

---

# 閉じられた世界と知識と記憶

なべにや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

閉じられた世界と知識と記憶

### 【Nコード】

N9171I

### 【作者名】

なべにゃ

### 【あらすじ】

何の因果か、応報か。

トンネルを抜けると、そこは、異世界？

ドキドキ、ハラハラ・・・私は、どうなってしまうのだろうか。

でも、慌てません！

私、大人ですから。

ゼロの使い魔二次創作物です。オリキャラ+オリ設定あります。お楽しみいただければ幸いです。

## 第1話：只今、取り込み中

あああ・・・

ああああああ・・・

ああああああああ・・・

つて、今、叫んでるのは私ですが。

いえ、発生練習なんかじゃありませんよ？

口が勝手に叫んでるんですよ。

なんといいいましょうか・・・本能？

そう、本能の叫びなので、私の意志では・・・

では、なんで叫んでいるのか？

そうですね〜どこから話始めたらいいのか・・・

話し始めると、長くなるので・・・

めんど・・・いや、手間・・・

いや、じ、時間が無いので・・・

でも、まあ、深く考えるのは、止めにして、とりあえず目の前にある問題を解決したいなあ〜

なんて思っんですよ。

いやあ、私・・・

今、落ちてる途中なので。

え？

そう！

そうなんですよ。

落ちてるんです。

少し、驚きました？

大丈夫です、私も驚いてますから。

なんというか、なんとなく凄いスピードで落下中ですね！

結構、長い時間落ちてる気がするなあ〜と思ってたりしますが。

でも、なんといいいますか、こう長い？時間落ち続けてますとね・・・

落ちているのか、上昇してるのか、感覚的にわからなくなるんです

よ・・・

と、考えられるのも、少し余裕が出てきたからですかね？

もちろん、こんな経験は・・・

初めてですが！

あ、なんだか、遠くに白い点が見えますよ？

周りが、真っ黒なのでよくわかります。

あれが・・・出口なのかな？

まあ、私の選択の余地はないのですけどね。

一方的に、ぐんぐん落ちてるだけなので。

あれが、行き止まりだったら・・・

ぺしゃんこですね・・・私。

それくらいは判ります。

これでも、大人なので。

そう、大人なんです。

でもねえ〜

大人でもできることと、できないことがあるんですよ。

本当に。

白い点が近づくとつれ、少しずつ、目の前が明るくなってきましたよ？

つまり、私の勘は、ドンピシャだったわけで。

凄いな、私。

偉いぞ、私。

まあ、周りに私を誉めてくれる存在がないので、自分で誉めてみました！

ちよっぴり恥ずかしいかも・・・なんて思ったのは秘密なのです。

そろそろ、ここから出られるのかなあ

目を開けていられないくらい眩しいですが、白い光がドンドン迫ってきます。

光がドンドン迫って・・・

はっ？

まさか・・・

この光は・・・

もしかして！

ビーム？

えっ？

ビームなの？！

ビームが迫ってきたら・・・私、ダメなんじゃ？

ビームがどんなものか・・・詳しくは知らないですが私の感じたところで言つと・・・

ビーム：熱くて凄いモノ

当たる

即死？

ダメじゃん！

凄くダメじゃん！

即死って、あれですよ？

即座に死んじゃうと書いて、即死ですよ？

い〜やくだ〜

即死は嫌！

なんていうか、こう、世間で云われるような、死に際に想い出が走馬灯のように・・・

なんて、体験してみたい！

だから、断固拒否の方向で！

お願いします！

なんて、考えてたら、あつというまに包まれていました・・・

凄く眩しくて、白い・・・ビーム？

ああ、眩しくて、目を開けていられないや・・・

なんだか、意識がぼんやりしてきた・・・

これが、即死体験なんだ・・・

痛いつて感じる間もないのは、いいことかも・・・

どのタイミングで、即死になるんだろう・・・

カラダがなくなつた時点で、即死成立？

意識がなくなつた時点？

それとも、魂が離れた時点なのかなあ・・・

結構、難しいな。

即死って、奥が深いぞ！

だけど、答えを出すことも、発表することもできないなあ

だって、即死中ですからね！

そう、私は、只今、絶賛即死中！

だから、忙しいんですよ。

即死するのに、忙しくって。

つまり、今は、誰にも邪魔されたくないんです。



**第1話・只今、取り込み中（後書き）**

初投稿です。よろしくお願ひします。



## 第2話：只今、状況把握中

「いあ・・・ぐう・・・ああ・・・」

痛い・・・

ほんと・・・痛い

本気で痛い時って、言葉にならないですね。

私は、どとらかというところ、痛いのが好きじゃないので。

ええ、もちろん！

知ってますとも！

世間では、痛いことが好きな人たちがいるってことは！

直接、見たことはありませんが・・・

でも、痛いのが、気持ちいいって・・・私には、無理な相談ですよ。

なんにせよ、光に包まれた後、私は、地面に激突？

私を中心に、挟り取られた地面を眺めながら、ここにあったであろう土はどこに、消えたんでしょうね？

などと思いつながら、キョロキョロ・・・

立ち上がり、辺りを見渡すもの・・・

ここは、何処なんでしょうか？

見える範囲で、キョロキョロしても、ここが、何処かなんて判るわけもないですよね。

なんて独り言を言いながら、挟られた場所から這い出てみた・・・  
ら！

人が一杯いた！

そして、見られていますよ？

もちろん、私がね！

こ、困りましたね・・・

多分、ここは、大事な土地で、そこに大穴開けたのは・・・  
私！

つまり、私は・・・

犯罪者？

え！

いや！

決して、私の意志でやったわけでは！

ですから、私自身には罪はないと！

大きな声で叫んでしまいたい！

けど叫ばないのが、私の奥ゆかしさなのですよ？

ふふふつ、心配ご無用。

慌てない慌てない、私は大人なんだから。

こんなことでは、慌てないですよ。

どんなトラブルも、冷静に対処！それが、私のクオリティー！

クールに、落ち着いて、余裕の表情を崩さずに・・・

「お願い、ナンちゃん助けて！」

と一生懸命念じながら、銀色の鎖が巻かれた左腕を、空に向けて振り上げた。

「来て来て来て・・・」

すると、腕を振り上げた先の上空に、青白い光を放ちながら、細やかな文字で装飾が施された大きな円陣が現れる。

そして、その円陣から、地面に向かい光が降り注ぎ、溢れんばかりの光の量に、眩しさに、直視出来ぬ気配に、目を伏せる。

しばらくして、円陣と光が消えたあと、そこには、1人の女性が呆れた表情で立っていた。

「ナンちゃん、来てくれたんだね」

私は、嬉しくて、小走りで近づきながら、ナンちゃんに話かける。すると、ナンちゃんは、私に気づいて、こちらに向かって、歩いてきた。

手が届く距離まで近づいた……ら！

ゴンっ！！

あぐっ！

私の頭の上に、痛みと共にやっちゃんの拳が……

「な、なんで……」

少し、涙が出たけど、しかたないですよ。

痛かったし。

「なんで？じゃねえよ！この馬鹿スーがあ！！」

拳をゴリゴリ押し付けながら、ナンちゃんが怖い顔してますよ？

あれ？

なんだか、怒ってるみたい……

おかしいな……私まだ、なんにもしてないよね？

それよりも、今のこの状況をなんとかしなきゃいけない……よね？

「ナンちゃん、なに怒ってるの？よくわかんないけど……私を助けて欲しくて呼んだんだけど……」

こ、恐くないよ？

だから、堂々としてるよ？

ちよつと、背中丸まってるかも知れないけど……。

「ちよつと、目を離れた際に、こんなところへ！いつもいつもいつもいつも！少しは自重しろ！城下ならともかく、こんなところまで逃げるとは！理由があるなら聞くけど……誤魔化したりしたら……わかってるよな？」

な、なんで？

なんで、私、攻められてるのおく？

「ち、ちがうよ！寧ろ、私は、被害者！そう！被害者です！こ、今回は、私の所為じゃないのです！」

一生懸命、身の潔白を主張する私を、値踏みするように見てますよ？はつきり言って……恐いです……。

「あ、あのさ……ナンちゃん？し、心配かけちゃったんだね？ゴメンね？」

上目遣いで、ナンちゃんを見つめます……

「だ、だからさあ……私をお願い聞いてほしいな」

私の勇気の在庫棚は、ここで品切れ寸前……

私とナンちゃんが睨み……いや、見詰め合ってる……そんな空間に。

「そこのお二方！……もし……もし……もし……もし……」



ぎゃあああああつ

痛い・・・耳が痛いです。

そんな大声出さなくてもいいのに・・・

すると、背後霊のおじさんが話しかけてきましたよ？

「す、すみませんが、わ、私の話を聞いて欲しいのですが！」

凄いな〜喋れるんだ、背後霊って。

しかも、怒ってるナンちゃんに、面と向かって話かけるなんて、凄  
い背後霊だ。

勇気も度胸も持つてる背後霊・・・って、なんか、イヤだな。

「うっさい禿げ！オレは今、忙しいんじゃ！後にしろ！！」

ほらね、怒られた。

私の経験でいうと、怒ってるナンちゃんには、何を言っても無駄な  
んですよ？

だから、静かあくに、嵐が過ぎ去るのを待つのが、一番いいのです  
よ。

ふふふっ・・・しめしめ、これで、怒りの矛先が変わったね」

「言いたいことはそれだけかな？スー？」

あれ？超能力？

私がかっさり思ってることが判るなんて。

ナンちゃんエスパーだったのかなあ〜？

ひどいや、私に内緒でそんな能力身に着けるなんて・・・

私も欲しいなあ〜超能力」

「って、声に出してたら、誰でもわかるワイ!!!」

「あれ!?!しまった!まんまと、ナンちゃんの術に引っかかったやつだよ」

「いや・・・オレなにもしてないから・・・」

なんだか疲れてるナンちゃん・・・  
どうしたんでしょうね?

「わ、わたしはハゲではナイ!!!」

うっ!?

何気に、背後霊のおじさんが叫んでますね。

いきなり何を?と思ったりしましたが、ココは紳士的に話を聞きましょうか。

おじさんの方に、向き直ると、そこには、禿げたおじさんと、ピンク色の髪の毛の女の子がこっちを見ました。

ピンク色かぁ・・・難しい年頃なのかな?

第2話：只今、状況把握中（後書き）

どうなるのかな・・・私にもわかりません。  
でも、頑張ります。

と自分に言い聞かせて・・・。



### 第3話：只今、生徒監督中

こんにちは。

私の名前は、ジャン・コルベール 42歳（独身）。  
トリステイン魔法学院の教師をやっています。

今、私は、私の教え子達の進級試験の1つを、行つために、学園校外の草原に來ています。  
毎年、この時期に進級試験をするのですが、生徒一人一人が、生涯を共に歩む、パートナーを召喚していく様子が、私の楽しみの一つでもあるのです。

ああ、初めての方もいらつしやいましたか・・・？  
少しだけ、事情を説明しようか・・・。

私達、魔法使いは、ある年齢に達すると、余程の事情が無い限り、生涯を共に歩む、使い魔を召喚魔法にて、召喚し、契約を交わすのです。

「魔法使いの技量を見るなら、まず、使い魔を見よ」という、格言があります・・・。  
それほど、この使い魔という存在は、魔法使いにとって、なくてはならない存在といつても過言ではないのですよ。  
ちなみに、私の使い魔は・・・っと、少し話が長くなってしまつたようです。

生徒達が、やってきましたので、これで・・・。

「さて、諸君、春の使い魔召喚の儀式を始めるとします。この場に召喚された使い魔が、諸君達の生涯のパートナーになるわけですが、使い魔とは、私達、魔法使いの偉大なる友といつても過言ではありません。

ません。対等な立場で、苦楽を共にすることで、お互いが成長し、また、高め合う存在であることを忘れてはいけませんよ。」

私の言葉を聞き、生徒達が一斉に、やや、緊張した面持ちで、杖を握り締め、たどたどしくも、召喚魔法を唱えていきます。

「召喚が成功したら、速やかに、契約の魔法を唱え、契約の印を結ぶのも忘れてはいけませんよ？契約が出来ない場合、また、問題がある場合は、私を呼びなさい！」

魔法の詠唱速度には、個人差がありますし、召喚されし使い魔の大きさや、種類も、千差万別。

丸一日かけて、この儀式をやり遂げなくてはなりません。

危険が伴う場合も、少なからずあるので、本来であれば、数名の教員または、教官が付き添うはずなのですが・・・

何故か、今日は、私ひとりで、管理監督をせねばならず、中々忙しいのです。

おや、草原に端にて、ぼつんとしているのは、ミス・ヴァリエール？どうしたのでしょうか・・・仕方がありませんね・・・少し様子を見てみますか。

半日を過ぎる頃、ほとんどの生徒が、召喚と契約を終えたようです。あと、数名が頑張っているといったところでしょうか？

今回は、なんと、ミス・タバサが、風竜を召喚し、少し驚きました。が、無事契約も交わすことができ、ほっとしています。

やはり、魔力保有量が多い生徒は、大型の又は、幻想種を召喚する傾向が高いようですね。

ただ、我が学院の学院長の使い魔が、ハツカネズミということもあり、魔力〓強力な使い魔とは言えないようです。

私は、密かに、さまざまな獣や幻想種の記録を趣味としていまして  
・  
・  
『コルちゃんの猛獣・幻獣コレクション』は、また、新たなページ  
が増えたことを教えてあげます。

「さて、残るは、ミス・ヴァリエール・・・君だけだ」

私は、未だに、召喚が成功していない女生徒に声を掛けました。  
座学は、とても優秀。

そして、努力家であることも知っています。

しかし、実技が大変苦手で、未だに成功率がゼロという、奇特的な生  
徒。

ですが、私は、教師である以上、言うべきことは、言わねばなりま  
せん。

「もう、日が暮れる・・・次で召喚できなければ、残念だが、進級  
はできないものと思ってくれたまえ」

非常に、心苦しいが、これもまた、魔法社会のルールであり、伝統  
でもあるのです。

何百という生徒を、世に送り出してきましたが、彼女のようなケー  
スは、私にとっても、初めてなのです。

だからこそ、成功してほしい。

でなければ、この先の彼女の人生に、暗い影を落とすことにもなり  
かねない・・・。

私の言葉に、彼女は、今まで以上に、真剣な面持ちで、召喚魔法の  
詠唱を始めるのでした。

「我が名は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァ

リエール。五つの力を司るペンタゴン。私の運命に従いし、宇宙の果てのどこかにいる私のパートナー！神聖で美しく、そして強力で、賢高き存在よ！我が導きに、応えなさい！！」

う・・・む。

なんだか、他の生徒より、欲張りな気がする詠唱ですが、何は無くとも、成功して欲しいものです。

彼女の詠唱が、魔力の奔流を作り、大きな力が・・・とても、危険な・・・大きすぎる力が働いている・・・それを感じた私は、彼女と周りの生徒全員に叫びました。

「全員退避！これより30リーグ全力で下がりなさい！早く！急ぐのです！」

私の叫びを聞いた生徒は、皆、飛行魔法または、全力疾走で、後方へ移動していきました。

何事もなければいいのですが・・・なにやら、胸騒ぎがします。そう思った瞬間！

上空より大きな力の渦が発生し、白く眩しいものが、見え・・・

どがあああああああああああ

さつきまで、ミス・ヴァリエールがいた場所に巨大な光が突き刺さり、爆発したのです。

「あ、あああ・・・いったい・・・なにが・・・」

私を含め、ここにいる全員が、目の前の光景に、騒然とする中・・・煙が晴れると、そこに、なにやら、人っばい何かが立っているのに気がつき・・・

私は、ぎゅっと杖を握り締めました。



第3話・只今、生徒監督中（後書き）

すみません・・・まだ、まだ、主人公？活躍・・・  
もう少し、まって下さい・・・。  
ほんと、すみませんです。

## 第4話：只今、使魔召喚中

「予習よし！」

「復習よし！」

「目覚まし時計よし！」

私こと、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは、声に出して、完了項目を指差し確認した。

明日は、ついにやってきた、春の使い魔召喚の儀！

いままで、実技は本当に苦手で、苦手で、苦手で……  
つていうか、まだ、一度も成功したことがなくて……

「ゼロのルイズ」なんて、酷いあだ名を付けられてはいるけど、明日の召喚の儀で、今までバカにしてきた周りの評価をひっくり返しちゃうような、すごくて、つよくて、かっこいい使い魔を召喚しちゃうんだから！

「さ、明日に備えて、早く寝よう……とその前に、お祈りお祈り……」

私は、窓の外に見える、2つの月に手を合わせ、明日の成功をお祈りした。

「神様……始祖ブリミルよ……明日は、どうか私に、凄くて、強くて、かっこいい、使い魔を遣わしてください……本当に、本当にお願ひします……」

心の奥底から、真摯に願いをかけ、私は、ベットに入った。

明日は、頑張ろう・・・絶対頑張ろう・・・。

私は、ミスタ・コルベールにつれられて、学園校外の草原へやって来た。

「何もないところだけど、草木の香りがいい感じ・・・」

天気の良い日に、ここで、ピクニックなんかしたら、気持ちいいでしょうねえ。

いいわね・・・いい考えだわ・・・朝から冴えてるわねルイズ！

私は、自画自賛しながら、ミスタ・コルベールの注意と説明を聞いていた。

それから、しばらくして、周りがどんどん、召喚と契約の魔法を成功させていく中・・・

私は、未だに、なんの手ごたえも感じないまま・・・

それでも、使い魔召喚の魔法：サモン サーヴァントを唱え続けていた。

時間だけが過ぎていくようで、私は、じりじりと焦りを感じる。

ああ、何故！？

私には魔法は無理なの！？

どうして、私には、才能が無いの！？

貴族なのに！私は誰よりも立派な貴族でありたいのに！

どうして使えないの！

公爵家の娘として、名門ヴァリエール家の人間として、魔法が使えないなんて！

お父様やお母様になんて言ったらいいの・・・



このままじゃ・・・進級はおろか、もう、誰にも顔向けできないわ・・・  
ここで、失敗したら、もう恥ずかしくて学院にはいられない・・・  
領地に引きこもって、一生暮らすしかないんだわ。

嫌っ！そんなの絶対に嫌っ！

私は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール！

誇り高きヴァリエール家の娘！

こんなところで、人生の終止符を打つわけには往かないのよー！

気がつくと、辺りは夕方に差し掛かり、目の前には、ミスタ・コルベールが・・・

「さて、残るは、ミス・ヴァリエール・・・君だけだ」

え・・・？

もう、私以外の生徒は、儀式を終えたってこと？

周りを見ると、皆は、召喚した使い魔とじゃれあったり、遊んだりしている。

また、日頃から私のことをバカにしている連中は、ニヤニヤしながら、こつちを見ているのが判った。

悔しくて、私は、愛用の杖を・・・ぎゅっと握り締める・・・

「もう、日が暮れる・・・次で召喚できなければ、残念だが、進級はできないものと思ってくれたまえ」

くっ、そうなのね、コレがラストチャンスってワケね！

私は、こんなところで負けるわけにはいかないのよ！

いいわ！この詠唱に・・・全てを賭ける！

「我が名は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。私の運命に従いし、宇宙の果てのどこかにいる私のパートナー！神聖で美しく、そして強力で、賢高き存在よ！我が導きに、応えなさい！！」

神様……どうかお願い……私の願いを聞き届けて！

私は、体の中にある、魔力の源を全て放出するように、力を込めて杖を振った……

すると……

「全員退避！これより30リーグ全力で下がりなさい！早く！急ぐのです！」

ミスタ・コルベールが突然、叫び、私を抱えて、凄いスピードの飛行魔法で飛び上がった。

わけのわからないまま……

私は、抱きかかえられながら、天空から、光輝く何かが落ちてくるのを、驚きながら……見つめていた。

後方へ下がったところで、降ろされ、私は、煙立つ……元いた場所を凝視する。

なにが……起こったのだろう。

あの、爆発は……なに？

確かに、私が魔法を使おうとすると、全て爆発してしまっただけ……

それども、あんな規模の爆発は、初めてだ……

傍らに立つ、ミスタ・コルベールが、杖を握り締めるのに気がついた。

え？

どうしたのだろう？

すると、煙が風に流され、視界がよくなってきた・・・  
目を凝らすと、煙の中から、何かが出てきた・・・

えつと・・・2本足？

なんだか、人っぽい？

ていうか・・・

こ、これは!？

これは、私の召喚魔法!？

ということは、私・・・成功した!？

召喚魔法・・・成功したの!？

やった!私はやったわ!凄いい、最後の最後で、私はやり遂げたんだわ!

お父様、お母様、私はやりました!

神様・・・始祖ブリミル・・・感謝いたします。

よかった・・・本当によかった・・・。

少し涙ぐみながら、私は、元いた場所へ歩き出そうとすると・・・

「待ちなさい、何が召喚されたのか、まだ判りません。ミス・ヴァリエールは・・・私の後に着いて来なさい」

ミスタ・コルベールが、私の前に出て、歩き出したので、私は、その後を着いて行くことにした。

使い魔?がキョロキョロしているところへ、近づくとつれ、なんだか・・・そう、空気が薄くなっているような、そんな息苦しさで、前に進むべき手足が、なんだか震えているような気がして、ミスタ・コルベールへ背中越しに、問いかけた。

「ミスタ・コルベール・・・私は、何を召喚したのでしょうか?」

「そうですね・・・見える範囲で言えば、人型・・・亜人でしょうか？とんでもない魔力を秘めているような圧力を感じますね。」

ええ！亜人？そう・・・でも、とんでもない魔力って？

でも、いいわ、私の使い魔だし！凄い力を持っているってことよね！  
ああ・・・これから、私の栄光の歴史が始まるのね。

少し、少しだけ、妄想・・・いえ、想像に気を馳せていたら、突然、私の使い魔（予定）が、叫び声と共に、腕を振り上げた・・・すると、またも天空が光が・・・

また、爆発？！と思つて耳を塞いだんだけど、違つたみたい・・・よくわからない魔法陣が現れて・・・

そこから、光があふれ・・・つて魔法！？

この亜人、今、魔法使つた！

凄い！凄いよ！こんな亜人見たことないよ！

魔法が使える亜人って！

凄いわ私！凄い使い魔召喚しちゃつたわ！

どおしよ！私、凄すぎるよお！

ドキドキしながら、その光景に見とれていたら、光の中から、また・

・・・亜人が現れた！

え？

ええ！？

増えた・・・？

亜人が増えた？

どういうこと？

どうすればいいのだろ・・・

1人      2人！

2人      4人！！

4人      8人！！

8人 16人!!

16人 32人!!

つて、このまま、どんどん増えたら・・・

私の部屋に入りきらないわ!

困る・・・そんなに広くないのに・・・

それに、食事とか、寝る場所とか、授業にも連れて行かなきゃならないし・・・

どうしたらいいのかしら・・・

少し、パニックになっていた私をよそに、ミスタ・コルベールが、  
亜人に話かけてる!

「そこのお二方!・・・もし!!・・・もしもし!!」

聞こえていないのか、全然反応しないわね・・・言葉が通じないのかしら?

でも、話している言葉は、聞き取れるような・・・

「す、すみませんが、わ、私の話を聞いて欲しいのですが!」

ミスタ・コルベールは、少し騒ぎ出した、亜人2人に、再び言葉をかけるもの・・・

「うっさい禿げ!オレは今、忙しいんじゃ!後にしろ!!」

と、叫ばれ、撃沈している・・・

「ハゲ・・・私が、ハゲ・・・確かに、少し、額が広がっては来ましたが・・・まだ、ハゲと断定されるほどのことは・・・しかし、晴れの日に、反射した光に・・・ミスター少し抑えてくれないか?眩しすぎて目が痛い・・・なんて、言われちゃったり?いや、最近  
は、頭皮に艶が出て、お肌スベスベって、気にしてましたけど・・・

・ハゲ？私が？・・・私は！」

「わ、わたしはハゲではナイ！！！」

赤く恐い顔をしながら、ミスタ・コルベールが叫び声を上げたわね・

・

問題は、そこじゃないような気がするのだけど。

とにかく、私が召喚したんだから、私が責任をもたないかね！

ミスタの声に振り向いた二人は、何故か、私を凝視していた・・・

第4話：只今、使魔召喚中（後書き）

で・・・出番が・・・

次こそは！

多分、頑張ります。

すみません。

## 第5話：只今、初見接触中

最近の若い子は、ぶっ飛んでるんですね……。  
ピンクですよ！ピンク！

え？

そんなに珍しいのか？

いや……。珍しいですよ？

珍しいでしょ？！

私の住んでいるところには……。いませんし。

まあ、そんな人は住めませんがね。

だって、基本は黒髪でしょう！

私の好み的には、やや、茶色かかっていたり、赤みかかっていたりも可！

ですが……。ピンクはないでしょう。

ピンクですよ？

大事なことなので、もう一度言いましょうか？

「ピンクか……。ありえませんか」

私のこぼした言葉に、反応したのが、約2名。

ひとり目は、私の隣で、同じものを見ているであろう「ナンちゃん」

「確かにな、オレの常識でも、ありえないな……。オレもそう思うよ」

二人目は、目の前にいる、ピンク色の髪の毛で、睨むように私を見ている女の子。

「な、なに、文句があるの！？っていうか、あんた誰！」



二人同時に、話されても、私は答えられないですよ？

耳は二つありますが、口は1つしかないんですから……。

なんにせよ、何時までも……ここにいるわけにもいきませんし、サクッと問題を解決して、家にかえるとしますかね。

ここで、解決すべき問題は、2つですね。

この穴をどうするか。そして、どうやって帰るか」

「え？何？どういうことだスー？」

私の言葉に、疑問を挟むのは、ナンちゃんですね……

あれ、もしかして、気づいてないのかなあ

おかしいな……ナンちゃんなら、すぐ気づくと思ったのに。

「気づかないですか？どうやら、一方通行のようなんです……葦原中国へのラインが繋がらないんですよ」

私の言葉を受けて、ナンちゃんもラインを繋げようとしているようですが……

やはり、上手くいかないようですね。

大体の原因は、わかっていますが……なんだか、腹が立ってききましたね……

すぐに、どうこうする必要も、無いといえは無いですが……それでも、嵌められるというのは、気分がよいものではないわけ……。

いやいや、ここは、クールに！

そうそう、冷静になろう……大人の威厳で……

「ちょっと！聞いているの！聞こえてるなら返事なさいよね！そのチビ！」

「「なっ!?!」」

「私が、話しかけてやっているのに、返事もしないなんて、いい度胸じゃないの! 亜人のクセに! そのデカイ亜人も! なんか言ったらどうなの!」

ピンク頭が、凄い剣幕で、怒り出したようですが、今、何て? 私の聞き間違いでなければ『チビ』って聞こえたんですけど?

私は、お腹の底から湧き出す怒りを押さえつけながら、首を横にギギグと動かし、ナンちゃんに聞いてみますよ?

「ナンちゃん・・・ちよつと教えてくれるかな? このピンク頭・・・今、なんて言った?」

にっこり、笑顔で聞いたはずなのに・・・  
ナンちゃん・・・なんだか、おどおどしてますね?

「いや、オレは何も聞こえなかった! 何も聞いてねえ!」

なにやら、必死に首をフルフルしてますが・・・  
そうですか・・・私の、聞き間違いかなあ〜空耳だったのかなあ〜  
そうだよ〜疲れてるのかな〜あははは

「ちよつと、笑ってないで答えなさい! あんたは誰なの! チビ!」

あ、聞こえちゃったよ・・・聞いちゃったよ?  
なんだ・・・空耳じゃなかったんだ・・・

『パキンっ!』



こんな、凶悪な力を持った存在がいるなんて……。

わ、私の責任……よね？

なんだか、怒らせちゃったみたいだし……

ど、どうすればいいの!？

第5話・只今、初見接触中（後書き）

少し、進展？

じれったいと思われる方・・・すみませんです。

## 第6話：只今、接触難航中

騒音が止み、風が流れ、あたりの景色が荒れたもの変わったことが、そこにいる誰もが、理解できたとき……。

ルイズは、自分とミスタ・コルベールが、半透明の何かに包まれていることに気がついた。

「ミスタ・コルベール？こ、これは？」

「わかりません。気がつくと、私も君もこの膜で包まれていました……。この膜が何なのか、私にはわかりませんが……。ひとつと言えることは、この膜が我々を守ってくれなければ、我々も、あそこに見える……。荒野の一部になっていたということです。」

その言葉を聞き、ルイズは、血が凍るような寒さを感じた。

私……。もしかすると、あそこに転がっている、黒焦げの丸太と同じになつてた……の？

あんなに太い樹木が、炭になつてる？

私も、炭？……炭に!？

ガクガクする身体を、ぎゅっと自分で抱きしめて、それでも、止まらない寒さに、震えていた。

「ミス・ヴァリエール……。今……。君は、今まで、感じたことのない寒さを体験しているはずです。コレがすなわち、『恐怖と死』です。まだ、学生である君には、理解出来ないかもしれませんが、行く行くは、貴族として、この感情を乗り越え、また、大きすぎる力が、どんな結果を呼び起こすのかわらねばなりません。」

「ミスタ・コルベール……わ、私は……」

「いいですよ、恐怖を感じるというのは、正常な証。慣れてしまつてはいけません。それに……これほどの魔力の奔流は、私も始めてですからね。少なからず、私も震えました……君と同じ……というわけです」

ルイズは、優しく、諭しように、話しかけてくれるミスターが、そばにいてくれて本当によかった。心から思った。

「さてと、そこな人間……話の途中で悪いが、スーが落ち着くまでに、聞いておきたいことがあるのだが？」

突然、背後から、強烈な圧力とともに、『南天』と呼ばれていた亜人が話しかけてきたことに、2人は驚いた。

「確認したいことは……そうだな、ここは何処なのか！そして、スーを召喚した理由！ついでに、お前達がなんなのか！！速やかに答えるがいい！！」

暴風を意識させるような、圧力と、言葉に、無意識のうちに、二人は少し後ずさっていた。

自分の杖をローブに下で、握り締めながら、話したのは……

「な、なによ！いきなり。失礼な奴ね！す、すこし力があるようだけど、亜人のクセに生意気な！貴族の私達に向かって、そんな口を利くなんて！使い魔なら、使い魔らしくしなさい！！」

ルイズは、突然話かけられたことには、驚いたが、使い魔（確定）である亜人（ルイズはそう思っている）に、甘く見られることは出

来ないと判断し、プライドを駆使し、強気な言葉で返した。

なんといつても、貴族、しかも公爵令嬢である自分より偉い人間が、周りにそんなに多くない環境で育ったことが影響し、上から目線で話をされることが、気に食わないのであった。

「はっ？人間・・・いい気になるなよ。お前達なぞ、その気になれば、いつでもオレの腹の中なんだぜ」

今まで以上に感じる圧力に、ルイズは、目を逸らしそうになる・・・しかし・・・ルイズのプライドの高さは、生物が本能として持つ、危険感知を上回った。

「はん！私は貴族よ！あんたのような亜人に、好き勝手されていいような存在じゃないの！やれるものならやってみなさいよ！」

売り言葉に買い言葉・・・そのやり取りに一番危険を感じたのは、コルベール。

このままでは、私と教え子の命の火が、目の前の存在に、まるで口ウソクの火を消すかのように、あしらわれてしまう！しかも、傍らで、高値で自分の命を吹っ掛けている教え子は、そのことに全く気づいていない！ここは、私がなんとかしなければ！

腹を括り、コルベールは、片手で、ルイズを制し、話に割り込んだ。

「ミス・ヴァリエール・・・お待ちなさい。そして・・・えっと、貴殿も少し待って下さい。少し、冷静にお話をさせて頂きたいのですが、宜しいですか？」

「ミスタ・コルベール！わ、私が・・・」

「ミス・ヴァリエール！私は、待ちなさいと言いましたよ？君は、



聞いてなかったようですが、使い魔とは、魔法使いと対等の立場で、関係を築くものなのです。信頼を得るには、まず知るところか始めなければいけません。しかも、まだ、契約もしていない相手に・・・ここは、私が、話をしますから、君は少し、大人しくしていなさい。」

「改めまして、私は、ジャン・コルベール。教師をしているものです。そして、こちらが、ミス・ヴァリエール。私の生徒になります。非礼は、この通り、お詫びいたします。また、私達を守ってくれた・・・先ほどまでの、膜は、貴殿のお力でしょうか？もし、そうなら、貴方は、我々の恩人だ。いくら感謝しても足りないくらいです。失礼ですが、お名前を伺っても宜しいですか？」

いつもとは違う、流暢な喋りをするコルベールに、戸惑うものの、大人な対応に、少し冷静になってその言葉に耳を傾ける。

「む、礼には、礼で返すのがオレの流儀だ。いいだろう。我名は、南天。この後ろで暴れている、マスターに仕えしものだ。」

「マスターですって！？それは・・・」

「ミス・ヴァリエール！話の腰を折るのは、貴族の行いとはいえませんが！黙って聞いていなさい！」

コルベールに注意され、しゅんつと下を向く。それを確認して、再び話し始める。

「す、すみません。それでは、貴方の質問にお答えせねばなりませんね。」

まず、ここは、トリステイン王国にあります、トリステイン魔法学院。我々でいうところの、貴族の卵達が、魔法を学び、成長するための場所です。

そして、貴方が仕えていると仰った……あの方を召喚した理由については、申し上げにくいのですが……使い魔召喚の儀式を行っておりまして、その際に、こちらのミス・ヴァリエールが、呼出してしまったと……そういうわけなのです。ご理解いただけると、助かるのですが……。」

その言葉を、大人しく聞いていた南天は、様々な可能性と、今後の対応について、考えをめぐらせていた。

しかし、いくら考えたとして、結局は、マスターが全て決めてしまうのだし、精々、火の粉が降りかからないように守るしかない……半ば諦めて、後ろで暴れている馬鹿マスターを、そろそろ止めるべきか、そちらを悩んだ。

また、思案げに、なにやら、難しい顔をしている目の前の南天を見て、緊急的な危機は、去ったのでは？とコルベールは少し胸をおろした。

あとは、双方の落しどころを交渉しなければならぬが……横で、挙動不審な生徒が暴発しないかどうか……それが懸念にはなっていた。

まったく、気位ばかり高い大貴族という人種は、世話が焼ける……コルベールは、胃がキリリと痛むような錯覚を自分の身体に感じたのだった。



第6話：只今、接触難航中（後書き）

余り、進みませんでした・・・。

劇的な展開を期待の方には、陳謝です。

力量不足で、すみません。

## 第7話：只今、交渉演出中

ストレスって、溜めすぎは、よくないですよね。

私は、小まめに発散させて、健康維持に気を配ってるんです。  
長生きの秘訣ですよ？

さてと、もう少し暴れたい気もするけど、もう壊すべき対象物も、近くに無いですね。

あんまり、無制限に力を使っても、お腹が空きますし・・・

これ位しておきましようか・・・何事も程ほどがいいんですよ。

ふふふ、大人ですからね、私。

弁えてるんですよ？

ではでは、ナンちゃんは、どこかなあ？

荒野になった一面を移動しながら、キョロキョロと南天の『気』を感じた地点を探してみる。

近づいていくと、南天と先ほどの、人間が2人話し込んでいる・・・。

ふむふむ、ナンちゃんは、何の話をしているのかなあ。

ま、面白いことになってるなら、いいけど、そうでなかったら、面白くしちゃえないか・・・。

ふふふ、久々に退屈しないで済みそうですよね？

ではでは、少し気合を入れて、モード変更と・・・。

ニヤニヤしたかと思えば、急に真剣な顔になり、先ほどまで、振り回していた金棒を、小さく縮め、懐へしまい込む。

そして、一步、また一步と、南天たちがいる場所へ近づくにつれ、自分の神気を少しづつ開放していく。

南天たちのすぐ近くに辿り着いた時には、放出する余りの強烈な神気に、ルイズとコルベールは、立っていることも、前を見ることも、息をすることも、苦しくなっていた。

ふふふ、やはり、少し神気を開放しただけで、この者たちでは、辛そうにしていますね……。

よしよし、作戦通り、作戦通り。

あとは、いつものように……とは云え、久しぶりだから、楽しまないかね！

すでに、息苦しそうに片膝をつき、蹲っている、2人とは対称に、大きな身体を伸ばしつつ、やれやれ……といった表情で、こちらをうかがっている南天の姿が、大人と叱られた子供のように見えて、少し可笑しかった。

まさに、仁王立ちというポーズで、強烈な神気を放出しながら、傍らに立つ南天に言葉を投げる。

「南天！そこに跪きしは、何者であるか？」

「はっ、この者は、ジャン・コルベール。ヴァリエール。共に、この世界の住人であるとのこと。」

片膝をつき、先ほどまでの、フランクな感じは、消え失せ、代わりに、王に付き従う騎士のように、頭を垂れ、質問に答えだす南天の豹変に、驚きを隠せないルイズとコルベール。

今から、私達がどうなるのか？生まれて初めて感じる高貴な圧力に、ルイズは、パニック状態であった。

「ふむ、して、この者たちは、何故ここにおる？」

「はっ、聞くところによりますと、どうやら、召喚術のようなもので、あなた様を呼出したとの証言をいたしております。」

「南天……我は、この者達が何故、存在しておるのかと聞いているのだ……よもや、私の怒りより庇い立てしてではあるまいな？」

「い、いえ、そ、それは、このような小さき者など、いかようにもできますれば、まずは、証言をさせてからでも、遅くはないかと……」

「さようか……なれば、召喚主ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール！そなたの言葉、後世へ残すがよい。」

「はっ、はひ?!」

突然、自分の名前をフルネームで呼ばれ、また、敵かで、強烈な圧力に、ルイズは、まともに返事もできなかつた。こ、このまま、こ、殺されちゃうのかも……と身の危険、命の危機にやっとなつぎ、ブルブルと震えが止まらないのだが、非常に、手遅れであった。

なんだ、もうノックアウト寸前なのかな？

もう少し、骨のある子かなあゝなんて期待してみたんですけどね……

いつも、私は裏切られる……  
妄想という名の、厚い壁に！

そう、血のつながらない妹や、猫耳メイド少女、はたまた、ツンデレ・ヤンデレなどと言うものは、都市伝説の中にしか存在を許されないものなのか!？

否！断じて否！

私は誓おう！

喩えこの身が、物言わぬ岩石になつたとしても！

はたまた、求婚のためだけに命の炎を燃やすアブラゼミになつたとしても！

見つけ出してみせる！

黄金の国ジパングに辿り着いたマルコポーロのように！！

はっ！？

いかんいかん、今は、それどころじゃなかつたですね。

あははは・・・

気を取り直して。

「なんだ？言葉も喋れぬものであつたか？南天よ、我はどうすればよいのだ？ん？」

よくいうぜ・・・いつものことだとは思いつつも、このやり取りをキチンとやり遂げなければ、お仕置きの矛先が、自分に向くのは明白であつた。別に、庇い立てしてやる義理は、これっぽっちもないのだが、悲しいかな、哀れな子ウサギには、憐憫の情が湧くというもの。

そう、見た目も、言動も粗忽だが、非常に深い情を持つ女・・・それが、南天であつた。

「で、では、代わりに私が・・・」

「無礼者め！貴様は、直答を許されておらん！身の程を知れい！」

自分が持ちうる・・・全ての勇氣の全額一点掛けを試みたコルベールであつたが、テーブルに着くことさへも許されず、南天の怒気に、粉になつて吹き飛ばされそうになつた。



私……きちんと言わなきゃ……さもないと、私やミスターは勿論のこと、後ろにいる学友や、王宮の姫様、領地のお父様やお母様、ちい姉さまの命も危ないかもしれない……。

召喚したのは、私。

責任を取るのも私！

頑張れルイズ！

ホームランは、無理でも、犠牲フライなら出来るかも！

で、できる！私は、やれば出来る子だもん！

ワケのわからない心の声援を受け、ルイズは、おずおずと話出した。

## 第8話：只今、願望思考中

ん？ルイズちゃん、ぶるぶる震えてるね〜  
可愛いね〜って、『S』な趣味は〜私にはないので・・・  
ちよっぴり手加減しちゃおうかなあ〜

気持ち圧力が減った気がしたルイズは、最後の気力を振り絞って、話かける。

「し、失礼致します。私の名前は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。こ、この度は、な、何故、このようなことになったのかは、わからないのですが・・・。私の所為でお怒りなのであれば、どうか、私一人に、その責任を取らせて下さい。私が悪いんです！ど、どうか、私だけで・・・お願いします」

自分の態度が原因なのか？

『チビ』といったことが？

それとも、ここに召喚してしまったこと事態に怒っているのだろうか？

わからない・・・わからない・・・だが、どうにか、その怒りを治めなくてはならない。

生まれて初めて・・・真摯に、自分以外を守る為に、他人へ謝罪するという行為。

「皆を守りたい」その気持ちだけで、今、心と頭を下げたルイズは、なにかわかったような気がした。

この学院に入るまでに、父や母、姉たちが、言っていた・・・

『貴族とはどういう存在なのか』そして、『どうあるべきなのか』。魔法が使えないことで、家柄にしか継れなかった自分の矮小さ、教

えられてきたことの本質を理解できていなかったことなど、自分の未熟を、今、この場で理解し・・・自然と涙が出てきた。

私が、ここで、殺されてしまっても、皆が助かるのなら・・・それでいい!

そう、思ったルイズではあったが、自身の震えが、いつの間にか止まっていることに・・・気づいてはいなかった。

へえ〜なんだか、少し、よくなつたかな?

思っていたよりも、いい子みたいですし・・・ここは、優しくしてあげてもいいかな〜なんて。

泣いてる姿は、子ウサギみたいで、なんとも保護欲を刺激されちゃうですね・・・。

あんまり、やりすぎると、後でナンちゃんに怒られてしまいますしね。

そろそろ、お開きにしますか・・・。

「ふむ・・・ならば、その責任とやら・・・どう取るつもりなのだろうか?」

ルイズは、そこまで考えてなかった自分を悔やみながら、高速で思考を巡らせ、この場における責任と、自分にできる範囲でできること・・・やはり、自分自身の命で贖うことしか、思い浮かばなかった。

「わ、私の、い、命では、いけませんでしょうか!」

「なるほど・・・自分自身の命を捧げると?その身体、魂、髪の毛から、流れる血液全てを、他人のモノになってもいいと・・・そう申すのか?」

え？・・・そ、そうよね、わ、私の命・・・私の全て？・・・ど、  
どうなっちゃうの？もしかして、あ、あん、あんことや、こ、こん  
なこともされちゃったりして？な、な、なんてことなのかしら・・・  
で、でも、もう、言っちゃったし、後戻りはできっこないわよね・・・  
。

自分の言った言葉の意味と、重みがどういうものなのか・・・ルイ  
ズはまだ、本当に意味での本質に気がついていなかった。しかし、  
矢はすでに放たれた・・・後は、目の前の存在が、どうするか・・・  
それを待つしかなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

暫しの間、沈黙が空間を支配し、重苦しい気配に押しつぶされそう。  
・・・そう思ったとき、沈黙を破る大音声が！

「天晴れ！天晴れである！その命を犠牲にしてまでも、守りたいものがあるのである？なるほど、近年まれに見る潔い行い！まさに、高潔な魂を持つ、尊き存在であるな！貴族というのは、伊達ではないらしい。」

え？い、今、私・・・褒められた？も、もしかして、上手くいったのかしら？言葉の意味はよくわからいけれど・・・なんだか、そんな気がするわ！でも、結局どうなるのかしら・・・私。

ルイズは、そのまま、事の結末がどうなるのか、じつと顔を伏せながら、聞いているしかなかった。

「ふむ、罪を憎んで、人を憎まず。その罪、そなたの潔き魂の輝きに免じて、赦そうではないか？の、南天、そちはどう思うか。」

「はっ、私も、いささか驚いてはおりますが、中々できることではないと思います」

「ふむふむ、では、それでよいな！」

なんだか、よくわからないが、少し空気が和やかなものに、変わったのを感じたルイズであった。

やった！私、許された！？た、助かったのね！

心の底から湧き出る安堵感に、腰が抜けそうになる・・・が、だ、だめよ、まだ気を抜いては、ここから先が肝心なんだわ。

ルイズは、再び気持ちを引き締めて、目の前の、存在に目を向け続けた。

「では、召喚主：ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール！」

「はいっ！」

「そなたが、我を召喚したこと、それは事実！なれば、古の理に従いにしえのとわりい、我もその責務を果たさねばなるまい。そなたの望み・・・1つ叶えよう」

「えっ？・・・」

あ、声出ちゃった・・・

え？なに？今、なんて言ったの？

ね、願い？願いつて言ったわよね？

な、なにを願えばいいの？

ど、どうすればいいのかしら？

「ふむ、未だに理解が遠いようであるな……。そなたの願いを1つだけ、我が叶えてやるうと言ったのだ。よく考えるがいい……。1つだけ。1つだけだ。」

悩んでる悩んでる。そうだよね、突然そんなこと言われたら、困るよね。

何を願うのかなあ、  
財宝？金？力？世界？

ま、叶えるといいながらも、出来ることと、出来ないことがあるんですけどね。

主に、私の事情で！

所謂、大人の事情というやつですよ。

あはは……

でも、まあ、めんどくさい（手続きが）ことは、好きじゃないですからね。

簡単なのがいいなあ、

どうかな？……そろそろ決まったかな？

「なんでもいい……。そなたが心に願うものを、言葉にするがい。だが、願いと代償は等価交換。大きい願いであればあるほど、その代償も大きくなるのだから。金か秘宝か、または、知識か？それとも世界の支配を望むのであるば、それもまたよし。まあ、それに見合った代償が用意できるのであれば……。だがな」

え？え！えええええええええええ

な、なに、どういうこと、本当？本当に私の願いを叶えてくれるの？  
で、でも、願いつて突然いわれても……  
どうしよう、何を願いしようかしら

金……って別にいらなわ……。公爵家はそれなりに裕福なんだから！

秘宝……って、どんな秘宝があるか知らないし……  
知識……そうね、それもいいかもしれないわ。  
せ、世界!?!?…そ、そんな恐れ多いこと願えるわけがないじゃ  
ない!  
でも、代償って……どうすればいいのかしら。

ある程度、満たされた人生（魔法以外）を歩んできたルイズではあ  
るが……

ことさら、願うべき欲望といったものが、ないこともなかった。

それは……自分自身の肉体の一部が……非常に気なる……こ  
と。

なんでも、叶うって本当かしら？

それなら、アレも……どうにかできるのかしら！

周りに比べて、少し小さいような気が……ね？

もしかして、このままだったりなんか……

いや、ちい姉さまは、立派に実ってる！

でも、エレオノールお姉さまは……

私は……どうかしら、もう16にもなるのに……

いえ、決して諦めたわけじゃない！

でも、なんていうか……心配になっても不思議じゃないと思うの  
よ。

二人の姉でいうと、二分の一の確立……なのかな……

ぐぐぐぐ……欲しい……欲しいの！

私が欲しいと望むもの！それは……『胸!』

さあ、言うのよルイズ！

胸よ！胸って!?!?

いや、待ってルイズ！

そ、そんなこと、どうやって願うというの？

大きくって言えばいいの？

綺麗なつて言えばいいの？

それとも、ちい姉さまのような？・・・といえは？

は、恥ずかしいじゃない！

それに、そんなこと言ったら、私がそのことを、何よりも気にして  
るみたいじゃない！

気に・・・していないことはないけど・・・

いえ、すません・・・凄く気にしてます。

でも、成長するかもしれないじゃない！

まだまだ、発展途上なのよ！

そうよ、そうだわ、だから、ここは！！



第8話：只今、願望思考中（後書き）

進まないことは、諦めて・・・

いや、すみません。

PV15000越え・・・ありがとうございます。  
感謝感謝です。

## 第9話：只今、使魔交渉中

そう！そうよ！

私の願い！

私の心からの願いは！！

「お願いします！！ 私の使い魔になって下さい！」

緊張を押し殺し、思っていたよりも大声で・・・まるで、叫ぶかのように言葉を発したルイズ。

そして、一瞬の間を置き、目の前より、自分に中<sup>あ</sup>てられる圧力が急激に上昇したのをその身に感じた。

「ほお・・・使い魔とな。」

急激に、自分の周囲の気温が下がったような気がした・・・。

不味かったかしら！？

少し調子に乗っちゃった！？

も、もしかして、また、怒り出すのかしら！？

ど、どうしよう・・・

ルイズは、思わず、叫んだ願いが、とんでもなく、危険なこと！かもしれないと、激しく動揺した。

「始まりの神より、生まれだされし<sup>さんきしん</sup>三貴子、<sup>あまねく</sup>遍く海を治めし暗黒の、  
天馬を駆使する黒龍眼、神将 <sup>オルバトウスサノオ</sup>降馬頭主宿参ノ王を使い魔にしたい  
と！そう申すのだなあ！！」

爆発するような、大声とビリビリ感じる空気の震え！

「ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！……  
終わった……終わったわ……私。」

この人……よくわからないけど、すごく偉い人だったんだ……  
なんてことなの！

知らなかったとはいえ、そんな偉い人を使い魔にしたいなんて、  
そりゃ……怒るわよね……

お父様、お母様、ちい姉さま……ルイズは、ここで終わってしま  
いますが、どうか、私の分までお幸せに過ごして下さい……

もし、私の願いが叶うなら……領地に残してきた、ポニーのラヴ  
ちゃんも長生きできますように！

両手を合わせ……祈るような姿勢で、ガクガク震えるルイズ。  
隣にいたであろう、コルベールはとっくの昔に気絶済み。

「ごめんなさい……、別の、お願いに変え……」

「わかった」

「そ……そ、そうですか！でしたら、あの、そうですね！ち、知識  
を……」

「いや、だから、わかったと申しておる！」

「え？あの……知識といっても、どうい……」

「だあかあら、わかった！使い魔！OK！大丈夫！問題ない！そ  
の願い叶えた！！」

「あ、あの、それって……」



目の前の降馬頭オルバトウクスサノオ主宿参ノ王？が、やけにフランクな口調にかわっていることにも、気づかない。

普通に、『コントラクト・サーヴァント』をすればいいのかしら？  
そうね・・・それで問題ない・・・というか、他の方法って知らないし・・・きつと、それでいいはずだわ！

「えっと、説明いたしますと・・・使い魔は、第一に、主人の目となり、耳となること。第二に、主人の望むものを見つけてくること。第三に、主人を守る存在であること。それが、使い魔としての役割です。そして、契約方法は・・・契約の魔法、『コントラクト・サーヴァント』でいいと思うのですが・・・」

「ん、使い魔の役割はわかった。では、その使い魔の契約期間は・・・君が死ぬまで。そして、代償は、死後、君の魂は死神に渡さずに、私が貰い受ける。それでいいかな？つて、それしかないけど。」

よく・・・わからない言葉がでてきたけど・・・そうね、もうどうでもいいか！  
使い魔の契約を早く結んで、今日は、もうベットに入りたい気分だわ！

「契約内容に問題がなければ、早速、契約をしまいましょうか・・・。」

「はい・・・よろしくお願いします」

ルイズは、疲れと緊張から、少し？投げやりの感情に流されてしまっているのですが・・・。

数日後、契約内容をきちんと確認しなかったことを悔やむことにな

るとは、このときはわかるはずも無いのでした。

ふむ、私を使い魔にしたいなんて！

そんな願いを申し出たのって、この娘が初めてですね。

多くは、その力を行使したいとか、自分のモノにしたいとか、世界を・・・とか、などなど。

身の丈以上の願いを申し出る輩が多かったと記憶していますが・・・。

自分の魂の器が、どれほどの価値があるか？なんてわかる人は、中々いませんからね。

願望の大きさと、契約の呪いの痛み又は、搾取に耐え切れなくて、殆どの方が、その場で・・・

何事も程ほどにしないとダメ！ってことですね。

お？今、私、いいこと言いましたね！

程ほどがいいんですよ。

程ほど程ほど・・・

『腹八分目、残りの二分はデザート用』って格言もありますしね？さて、色々と考えることもありますし、サクッと契約しちゃいますか・・・。

第9話・只今、使魔交渉中（後書き）

もう少し、もう少し・・・  
すみません。

頑張りますので、よろしくお願いします。

## 第10話：只今、契約締結中

「では……ナンちゃん？ぼーっとしてないで、そこに転がってるハゲ……っぽい？おじさんを起こして！それでは、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。契約の儀をいたしましょう。」

「ま、まって！その前に、私……あなたのこと、なんて呼べばいいのかしら？」

契約の準備を考えていた手と止め、ルイズに向き直り、まじまじとその鳶色の瞳を覗き込む。

「私のことは、スサノオ。スサノオと呼ぶこと！いいですか？ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。」

「わ、私のことは、ルイズ……でいいわ！」

スサノオは、それに頷き（うなづ）、両手で、契約の呪を描きながら、言霊を並べていく。

その姿を、目の前にし、ルイズは、スサノオを観察する余裕がうまれていた。

よく見ると、私より頭一個分背が高いのね……

髪は黒髪に、銀色が混ざっているし、

顔は……けっこうハンサム……になるのかしら？

服は、なんだかキラキラしてて、高そうな服……

でも、なんなのかしら？スサノオの手から描かれている魔法陣……私達を包み込むように、魔力の粉？がヒラヒラと舞っていて……



綺麗・・・

少しばおーつと見とれていると、言霊を並べ終えたスサノオの顔が真正面にあった。

あ、スサノオの瞳の色って、緋色なんだ・・・

「んっ!？んんっ!！」

顎を片手で少し持ち上げられ、スサノオの唇が、自分の唇に喰いつくかのように被さり、舌が侵入し自分の舌と絡み合ってきた・・・クチュクチュと唾液の混ざる音と、初めての濃厚な接吻に、気が遠くなりかけるが、身体の中から湧き出る熱い魔力の流れを感じ、身をよじる・・・

しかし、スサノオの腕が逃がすまいと、ルイズを抱き寄せたので、逃げることも、かわすこともできず、なされるがまま・・・頭の中が真っ白になっていく・・・そのことだけが、知覚できていた。長いような・・・短いような、とき時間の流れが停まったような、魔力の粉が舞い散る幻想的な空間で、放された唇は、二人を、銀色の橋でつないでいた・・・。

「はふう・・・」

身体を離され、身体に力が入らず、ぺたりつと座り込む。

な・・・な・・・な？

なななななななな!

なに!?

わわわわわわわわ・・・

わ、私!?

私!!

きききききききき・・・

キス!?

キスされちゃった！？  
キスウウウウウウウ！？

「な、な、なにすんのよ！わ、私は貴族なんだから！そ、そんな、キ、キスなんて、簡単にしちゃいけないの！な、なのに、こ、こんな、気持ちいい・・・じゃなくて！こんなところで！って場所じゃなくて！もおお！なんなのよ！」

混乱した私は、動揺したまま、口走る・・・  
わけがわからない！もう！どうなってるのよ！

「ん？契約の手順として、必要だったからね・・・でも、そんな、火照った顔で文句を言われても、恐くないけど？ふふふ・・・可愛いなえ〜」

ま、キスじゃなくても、いいんですけどね〜

でも、まあ、これくらいの役得はあってもいいんじゃないのかなあ〜  
と思ったり思ったり・・・と、あたふたしているルイズちゃんを、  
暖かい目で見ていると・・・

私の背後に、鬼が降臨してました！

「スー・・・私をいきなり呼出して、暴れたと思ったら、祈願  
叶訊の儀に巻き込んで、その上、その女と・・・ずいぶん楽し  
そうじゃないか？」

寒！いきなり、吹雪が私を撃ちつけるような、極寒の寒さが、私を  
包んでいますよ？

ま、まずい、ナンちゃんに色々と説明しなきゃ・・・と思っ  
たんですけどね・・・

何故か、こう、なんといいましょうか、流れ？そう、流れでこうな

「つちやったんですよ！  
だから・・・」

「許してくれると嬉しいかな？」

「馬鹿スーが！」

「ゴチンっ！！と私の頭に、再びナンちゃんの拳が突き刺さっています。  
す。

い、痛い・・・

なんで、私がこんな目に・・・酷い・・・。

天国から地獄とは、こういうことを言うのですね？

先人は、流石に、言葉巧みでいらっしやる・・・。

でも、まあ、これで機嫌が治まるなら、これはこれでいいか。

「じゃあ、もう結界解いて・・・そろそろ、本来の流れに戻ろうか」

私が、そういうと、ナンちゃんが、封印解除の術を成して、朝靄が  
明けるかのように、草原の中に、4人？が現れる。

そう、私が、ちよっぴり？切れた瞬間、ナンちゃんが、空間切断、  
空間封印の術を成して、元の時間の流れから切り離していたんだよ  
ね。私が知っている限りでは、こんなに術を素早く成せるのは、ナ  
ンちゃんくらいかなあ。まあ、時間がかかっていいなら、私のも出  
来ますよ？

だから、いつでもどこでも心置きなく大暴れできるのさあ。っ  
つて、後で、必ず怒られるんですけどね。

「はっ！？わ、私は、荒野にいたはずでは・・・？」

「コルベールの驚きの声は、ルイズも同感であったが、ここまでくれ

ば、なにが起きてても不思議じゃないか・・・と、半ば諦めていた。

「では、使い魔の契約とやらは、どうすればいいのかな？」

「え？さっきの・・・キ、キスは、なんだったの・・・？」

「ん、あれは、ルイズが死ぬまで、私のそばに居られるよう、ルイズの生体情報を、採取したんだよ。これで、私という存在がルイズの中で認識できるようになったはずだよ？私の存在を固定化しないと、ここには長くいられないから・・・。でも、これで、ずーっとルイズのそばにいられるよ？」

コルベールに聞かれないように、ルイズの耳元で、そつと囁く。

その言葉を聞いて、まるで、恋人達の言葉みたいじゃない！と、カアアッと急激に体温が上がってきて、また、あたふたして、スサノオに暖かい目で見られていた。

「では、こちらの『使い魔契約の儀』をお願いしましょうか・・・。つとその前に、ナンちゃんは、化身して私の懐へ。えつと、そのこのハゲ・・・『コルベールです』あ、コルベールさん、私とルイズと使い魔の契約をしますので、立会いをお願いしますか？あと、私たちのことは、他言無用で！少しでも漏れたら・・・ふふふ・・・いいですね？」

ちよっぴり、黒い笑いを見せながら、ささ、早くつと、急かして、南天に向かい懐を少し空ける・・・

すると、霧が晴れるかのように、南天の姿が消えうせ、その場所には、一匹の白蛇がとぐるを巻いていた。あつというまに、スサノオの懐に飛び込み、顔だけを覗かせ、真っ赤な舌をチヨロチヨロさせている。

「余り、混乱が大きいと楽しみませんからね、ここは、私ひとりが、召喚されたことにしましょう。」

うんうんと、頷く、スサノオを見ながら、もう、なにが起きても驚かないわ・・・と、心に念じながら、ルイズは、契約の呪文を紡ぎだすのであった。

第10話：只今、契約締結中（後書き）

原作ページに全然追いつかない・・・  
すみませんです。

## 第11話：只今、儀式終了中

いつのまにか気絶していたせいで、記憶が曖昧ですが、これで、やっと、今日の使い魔契約の儀も終了になりますね。

古今東西、人を使い魔にした話は聞いたことはありませんが、コレも伝統ですから、呼びだした以上は、使い魔となってもらわねば・  
しかし、不思議な青年だ・・・いつのまにか、ミス・ヴァリエールと打ち解けたみたいですが、私が気絶している間に、いったい何があつたのでしょうか？

「では、改めて、ミス・ヴァリエール・・・契約の儀式を続けなさい」

「はい」

ルイズは、スサノオの顔を、恥ずかしそうに見つめ、そして、声をかける。

「あなた、感謝しなさいよね。わ、私からこんなことされる人なんて、今までいなかっただから」

ルイズは、目を瞑り、手にした杖を振りながら、呪文を唱える。

「我が名は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

すっと杖をスサノオの額に置き、そして、ゆっくりと唇を近づけ・

・そして、重ね合わせる。  
先ほどの、濃厚なキスとは違い、唇を重ね合わせるだけの、かわいいキスであったが。

「ん・・・」

なんだ、こっちの契約もキスだったんだね。だから、ルイズちゃんは、『さっきのは』って言ってたんだ、納得納得。そして、役得。こういうキスも、初々しくていいよね！

イタツ！懐のナンちゃんが、噛んでますけど・・・しょうがないでしょ？こちらの儀式では、これが必要なんでしょうから・・・。

イタツ！だから、仕方なくなんですよ！決して、ルイズちゃんの唇って、柔らかくって、いい匂するな！なんて思ってますん！

イタツ！本当ですって！イタツ！ホント痛いつて！ご、ごめんなさい、少しは思っていました！

イタツ！もお！わかりましたよ！あ、後で、後でね！それで勘弁して下さい！お願いします。だから、そんなに噛まないで・・・変な趣味に目覚めそうになるから！

念話で、南天と会話？しながらも、スサノオは、徐々に身体の中へ浸透してくる「呪」の気配とその解析に意識を傾ける。

レジストしてもいいが、そこまで深刻なものではないと判断し、「呪」の不適切などころだけ書き換えた後、植え付けを赦すことにした。

「終わりました」

唇を離れたルイズが、恥ずかしそうに真っ赤な顔をしながら、コルベールに報告する。



「『サモン サーヴァント』は、何回も失敗しましたが、『コント ラクト・サーヴァント』はきちんとできましたね」

嬉しそうにコルベールは、ルイズに対し、よかったよかったと呟いた。

しかし、いつの間にか、近寄ってきた他の生徒達は……

「呼び出せないと思って、平民を連れてきたんじゃないのか？」

「ていうか、平民を呼び出して、どうするんだ」

そして、コントラクト・サーヴァントが終わると……

「平民だから、『契約』できたのさ！」

「そいつが高位の幻獣だったら、『契約』なんてできなかったさ！」

などと、バカにしたように笑いながら、騒ぎ始めた。

「バカにしないで！私だって、たまには、うまくいくんだから！」

ルイズは、はやし立てる者たちに、言い返す。

そして、余り、スサノオを刺激するようなこと言わないで！私も含めて、命の危険がすぐ目の前にあるのよ！と強く思っていた。

「ほんと、たまに。ほんとのほんとにたまに。よね？」

見事な巻き髪とそばかすを持った少女が、あざ笑う。

ああ、またか、まったくこの女は……。いつもなら、真っ向から、言い返すところなのだが、精神的に1つ山を乗り越えたルイズには、たいして、その嘲りも気にならなかった。

「そうね、たまに。それでいいわ」

「え!？」

ルイズが素直に認めたことへの驚きと、逆になんだか、酷くバカにされている気がして、とても恥ずかしくなった。

「どうしたの？熱でもあるの？もしかして、なにか、へんなことされされたとか？」

いつも、自分を辱めたり、馬鹿にしてきた、モンモランシーが心配の言葉をルイズに向けたことで、ルイズは、先ほどの、キスのことを思い出して、真っ赤になった。もちろん、濃厚な方を。

「な、なんでもないわよ！それに、あんたなんか心配されたくないかない！」

「なんですって！私が優しくしてあげているのに！ゼロのくせに！」

「こらこら。貴族はお互いを尊重し合わなければいけませんぞ！」

コルベールが、騒ぎ始めた二人をなだめている間、スサノオは、身体の中に浸透してきた「呪」が定着したのを確認する。

高熱を発しながら、自らの手の甲に印を刻むその「呪」を、まるで焼印だな・・・と思いつながら、眺めていた。

言葉発さず、片手を上げて、印を眺めているスサノオを見つけ、コルベールは近寄り、その左手の甲をしげしげと見つめる。

「珍しいルーンですな」

そう呟くと、懐から、ノートのようなものを取り出し、スケッチを始める。

それを見つけたルイズも、近寄り、スサノオに古代文字で刻まれた「使い魔のルーン」を手に取り・・・愛いとしそくに指いさでなぞる。

これで、契約も無事おわったわね。とんでもない使い魔を手に入れただけれど、これからどうなっちゃうのかしら・・・。

「さてと、もう日が暮れます。使い魔契約の儀はこれにて終了と致します。皆、無事、召喚そして契約できたことを嬉しくおもいますよ。では、各自、学院まで戻りなさい」

コルベールはそう、皆に伝えると、杖を振り、宙に浮いた。他の生徒達も、一斉に宙に浮く。

「ルイズ、お前は歩いてこいよ！」

「あいつ『フライ』はおるか、『レビテーション』もまともに使えないんだぜ！」

「そこの平民、あんたの使い魔にお似合いよ！」

口々に、そう言って笑いながら飛び去っていく。

残されたのは、ルイズとスサノオと懐の南天だけであった。

「そうか・・・ここは、魔法使いの国でしたね。皆、そのまま飛んでいくんですか・・・なんだか、こう、夢のひとつが終わったというか、壊れたというか・・・とても残念な気分です」

いきなり独白し始めたスサノオに、ルイズは、キョトンと首を傾

げる。

「な、何、どういことよ？」

その疑問の意味が全然理解できないルイズは、おそるおそる聞き返す。

「えっ？だって、魔法使いといえば杖！そして、飛行魔法といえば箒！なのに、杖や箒に跨らずに、そのまま飛んで行っちゃうなんて・・・なんとという反則！なんと理不尽！私は、私は、今猛烈に、魔法世界のありかたに絶望しています！」

いったい何が、不満なのだろう・・・スサノオの考えることは、さっぱり理解できないルイズなのでした。

第11話・只今、儀式終了中（後書き）

少し進展です。

進みが遅くてすみません。

PV25、000越えありがとうございます。  
感謝感謝です。

## 第12話：只今、魔法感動中

スサノオが、わけのわからないことで、絶望していた後、夕闇があたりを支配し始めた。

「皆、いなくなっちゃいましたね・・・」

「なにが言いたいのか全然理解できないのだけれど・・・いいわ、隠しても仕方のないことだし・・・私ね、魔法が・・・う、上手く使えないの。おかしいでしょ？皆、ちゃんと魔法が使えて、空だつて飛べるのに・・・。私は、いつも失敗。どんなに練習しても、全然上手くいなくて。だから、私に渾名は、「ゼロ」・・・「ゼロのルイズ」って呼ばれているのよ・・・」

見つめていた顔を背けながら、自分の実力と、皆と同じことができない・・・そんな自分との差を、スサノオに知られることが、とても悲しくて、いつの間にか俯いていた。

「そうですか・・・空も飛べないルイズちゃん。魔法も使えないルイズちゃん。頑張っても頑張っても、皆と同じことができなくて悲しいわ！だから、実力も胸もゼロ！」

「う、うるさい！しかたないじゃない！どんなに頑張っても、できないんだから！そ、それに、胸はゼロじゃない！す、少しはあるんだから！」

ふむふむ、少しは元気が戻ってきたかな？

湿った顔もいいですが、やはり、笑っていて欲しいですね。

「ここは、私が、我が主の為に、なんとかせねばなりませんね？」

「これは、失礼をいたしました。そんな、お悩みのあなたに！八百万の神も大絶賛！あら？不思議！本当なの！？こんなの今まで見たことない！コレを使うだけで、今までの悩みが全て解消という商品をご紹介しますよ！」

じゃじゃ〜んと自分の口でいいながら、スサノオが広げた手の中から、淡い緋色あかいろの光りを放つ石が埋めこまれたリングが1つ出てきた。そして、それを、優雅な仕草で、ルイズの右手薬指へと誘う。まるで、その指の為に作られたかのように、ぴったりと収まった。

「こ、これは？」

一連の動きに見とれている間に、自分の薬指に収まったリングを見ながら、スサノオに問いかける。

「これは、私とルイズの契約の『証』私の血液の結晶が填っているのさ。勇気と笑顔が湧いてくる不思議なリングでございます。ご主人様」

ご主人様と呼ばれたことの気恥ずかしさと、淡い光りを放つ石が、スサノオの血液の結晶というのにも驚き、暫しぼうぜんとする・・・そして。

「なにかの効力があるリングだと思っていいいのかしら？」

「これは、さすがご主人様！御目が高い。では、このリングの素晴らしきところを、お教えいたしましょう」

スサノオは、そういうと、芝居がかつたかの優雅さで、ルイズの手を取り、そして、自らの額を、ルイズの額へ軽く押し当てる。突然感じた、スサノオの体温と、いきなり、の行為にあたふたしそうになるが、押しとどめられる。

「落ち着いて、そして、目を閉じて・・・そして、意識を集中しましょう・・・そう、そして、意識を身体の中に向けて・・・もつと奥のほうに・・・体の真ん中に、熱くて大きな塊があることが認識できるはず・・・そう、わかるね？それが、魔力・・・ルイズの中に眠ってる魔力の塊です。そして、その塊に向かって、少し「開け」と念じて・・・そう、少しだけ、流れができたのがわかるでしょ？だめだめ、欲張らない・・・少しでいいの、少しで。そうそう、上手だね・・・これで、いいかな？」

少し、火照った体を感じながら、ルイズは、今までにない高揚感を味わっていた。不思議・・・なんなのかしらこの感覚。

「ハイ！よくできましたね！これが、魔力を引き出すといった行爲です。でも、ルイズには、何故かプロテクトがかかっていて、上手く魔力を引き出すことが・・・出来なくなっているみたいだね。ま、その原因は追々突き止めるとして・・・では、ルイズ、今なら、簡単な魔法が使えるようになってるはずだ。唱えてみて」

まさか？本当に？今まで、どんなに頑張っても、使えることの無かった魔法が、使えるようになるの？そんな思いで自分の杖をジッと見つめる。

よし、その言葉信じてみよう！

この数刻間の不思議体験は、ルイズにとっても、信じられないことばかりであったし、いまさら、驚くこともないわよね・・・そう考えて、呪文を口にする。



「レビテーション！」

唱えたたん、自分の身体が、ふわっと宙に浮かぶ！  
しかし、不安定に宙を舞うようにフラフラしてしまい、わたわたと  
していると集中が解け、地面に落ちる。

「あたっ！」

打ったお尻をなでながら、ルイズは、少しでも宙に浮いたという事  
実に、身を震わせる。

す、凄い、私、今、浮いたわ！自分の力で！やった！やったのよ！  
私、ちゃんと魔法が使えた！

身体の奥から湧き出る高揚感と共に、感激があふれだし止らない。

「えぐつ、よ、よかった・・・私、もう、一生・・・魔法・・・ち  
ゃんと使えないんじゃないかって、半分、諦めてて・・・で  
も、使えた・・・今、使えたよ・・・嬉しい・・・嬉しいよお・・・

えぐえぐと、泣き出して止らないルイズを正面に見据え、あらら、  
結局泣いちゃったか、と思いながらも、良かったね。と素直に感じ  
入り、ルイズを抱きしめる。

「ほらほら、落ち着いて、練習すれば、もっとキチンと使えるよう  
になるから。だから、がんばろうね・・・ご主人さま」

抱きしめられた恥ずかしさよりも、スサノオに対する感謝の気持ち  
が上回り、素直に、伝わる体温を心地いいと感じながら、『ありが  
とう、スサノオ』と心の中で思ったルイズであった。



第12話：只今、魔法感動中（後書き）

亀の歩みですみません。

ユニークアクセス、5,000越えありがとうございます。

どうか、これからも、よろしくお願い致します。

### 第13話：只今、原因説明中

私の名前は、降馬頭主宿参ノ王

オルバトゥススサノオ

職業・・・神将？

年齢・・・数えてない。

2人の姉がいるが、ことあるごとに、弄られている。

いつも仕返ししようと思いが、その都度痛い目に遭う。

なので、半ば諦めているが、それでも、いつかきつと！と星に願いを祈る・・・それが私のいいところ。

いつもは、葦原中国というところにいるのだが、その時は、何故か姉の一人に呼び出され、姉とお茶していた。

本心では、行きたくなかったのだが、『美味しいプリンが手に入ったのだけれど・・・』という甘言に、ついつい出向いてしまった。

え？

なに？

たかがプリンで？

おい！まて！たかがって言うな！

プリンはな！プリンはな！至高のお菓子なんだよ！

わかる？美味しいんだよ！プリン！

もう、プリンのためだったら、国の1つや2つ滅ぼしちゃうくらい素敵な食べ物なのだ！

わかった？

そう・・・でだ！

その言葉に、誘われて、ホイホイ出向いたのはいいんだけど、ついた途端に、やれ、「この懸案事項が」とか、「この書類に不備が」とかいいい始めて・・・結局、なんだかんだと姉の仕事を手伝う羽目に・・・またか・・・と思いつつも、プリンの為に頑張ったんですよ？

で、やっと、プリンを手に入れることが出来て、リビングで、ご対

面！

ほのかに、香るブランデーの香りと、黄色くて、フルフル揺れる極上プリンが……

うううううまああしいいいい！！

ああ、生きててよかった……まさに、このただけに生きてるかもしれない。

まあ、そんな感じで、味わいながらプリンを食べていたら、姉と私の真ん中ぐらいに、光りを放つ鏡のようなものが現れましてね。

対呪処理された、この場所に出現するなんて、どんな「念」に括られたモノだ？と繁々と眺めていたんですよ。そしたら、その鏡の光りが増しましてね……吸い込まれそうになるんですよ。

いやあ〜こりやいかん！と思って、離れようとした……ところ。すげー笑顔の姉上様がね……鏡に向かって、私を突き飛ばしたんですよ？

ありえますか？普通？

しかも、『私、今忙しいから、あなた変わりに行ってきて！』という暖かい言葉と共に！

はあ〜？なにそれ？ワケわかんないし！しかも、吸い込まれたら、真っ暗で、身体に力入らなくなりますしね……なんだこれ？といった具合になっただんですよね……。

「と、まあ、そんな感じで、こっちに飛ばされてきたんですよ。」

私が、そういうと、そうか……ならば、仕方ないか……とナンちゃんも納得のご様子。

え？なに？それ？本当なの？とルイズちゃんは、あまり付いてきてないご様子。

あれから、ルイズの部屋に戻ってきた、3人？は、ルイズの用意した、パンを齧りながら、経緯について話していた。

「ま、大神の性格からして、そんなところか・・・しかし、なんだ、いつものことだが・・・スーは馬鹿だな」

「え？なんで？」

「決まっているだろ・・・大神にな・・・嵌められたんだよ！いつも通り！毎度毎度、いいようにされてるなあってんだ！まったく、だからお前は・・・」

ちよこんと横たわる白蛇を前にして、怒られているスサノオの姿に、凄くシユールなものを感じたルイズだったが、いい機会だし、自分が思った疑問も聞いておこうと思った。

「ねえ・・・南天さん？『南天でいいぞ』あ、そう・・・じゃあ、南天は、いつたい何者なのよ・・・よくよく思い返してみても、名前しか教えてもらってないんだけど？」

「それは、お前がオレの自己紹介中に、話の腰を折ったからだろ？」

「ぐっ！」

そういえば、そうだったかもしれない・・・とルイズは思い出し、ちと沈黙。

「ま、隠すことでもないし、いいぜ。オレは南天。この、馬鹿スーに従う哀れな従者さ。スーはオレよりも上位の神になるからな、で

も、『そんなの関係ない』って、一度挑んでみたんだけど、勝てなくて、盟約を結んで、今に至るといっわけさ。わかったか？」

「えつと・・・よく聞こえなかったんだけど、さ『耳悪いのか？』違うわよ！さっき、上位の神って単語が聞こえたんだけど？なにそれ？」

「ん？そうか、この世界には、神様っていないか？まだ、こちらの情報は届かないからなんともいえないが・・・」

「いるわよ、始祖ブリミル！私達を常に見守っていて下さる神様よ！他の神様っていうのは、いるわけじゃない！」

「まあ、まあ、ルイズも落ち着いて、では、キチンと説明しよな。ナンちゃんは、うん、なんていうか河川を司る神様で、私は、海を治める神様っていったほうがわかりやすいかな？本来は、こういう異次元には、精神だけを送り込んで、依り代を媒体とするんだけどね。どうも、本体を直接叩き込まれた所為で、丸ごと全部来ちゃったって感じかな？まあ、その、始祖ブリミルって神様には、まだ会ったことないけど、神様にも色々あるんですよ。」

「わかんない・・・けど、あんたたちが、その、偉い人・・・いえ神様っていうのも理解できないこともないわ。あれだけ不思議体験させられちゃったらね。」

ルイズは、今まで生きてきた中でも、飛び切りの驚き体験に、知識と理解がついていけないが、でも、この人？たちが言う言葉に、嘘はないと信じた。

それにしても、自称神様を使い魔にしちゃう私って、実は凄いいんじゃないかって、ちょっといい気分になっていた。

「ああ、それと、言い忘れていたけど、オレたちが、その『神様』だつてことは、誰にも言うんじゃないぞ。ま、言つても誰も信じないだろうけどな。それと、スー……念のために、封環増やしとけよ！」

え？なんで？私、凄く使い魔と契約したんだつて、エレオノールお姉さまや、ちい姉さまに自慢できると思つたのに……。でも、確かに、神様なんて話は、異教徒うんぬんな話にもなりかねないし……内緒にしておいたほうがいいわよね。でも、いいわ。私には、凄く使い魔がいる！それだけで、今は十分なもの。

非常に残念がつたり、満足そうな顔をしたりと急がしそうなルイズの傍らで、ごそごそと懐から、3個のアクセサリのようなものを取り出し、言霊を唱えながら、指や耳へ付けていくスサノオ。もちろん、質問虫に変化したルイズは黙っていない。

「それは、何？」

「ん？これは、封環。」

「ほうかん？つて何？」

「いや、だから……。つて、めんどくさいな……。まあ、仕方ないか。色々知りたいお年頃ですもんね！つてまあ、冗談で……。ルイズにあげた指輪を意識して、『封環とはなんぞ』つて言ってみて」

「ん？……。そう……。こうかな？『封環とはなんぞ』……。え？何？今、頭の中に声が聞こえたわ！？なにこれ！気持ち悪い！？」

理解せぬまま、言われるがまま、スサノオに填めてもらった指輪に



意識をして、言われた通りにした瞬間・・・しゃがれた男の声で、その問いかけの意味を答えられた・・・突然聞こえたその声に、驚きよりも気持ち悪さが先にたった。まあ、女の子の感性としては当然であるが。

「で、どう？わかったかな？封環の意味が。」

「よくわからないけど、力を抑える為にするもの？ってことかしら・・・言い回しが難しすぎて・・・どう？あってるの？違うの？どっち！」

「だいたい、そんな感じの意味であってるよ。私達の力は大きすぎて、世界のバランスを崩すきっかけになりかねない。だから、その世界の強度に合わせて、力を加減しなければいけないんだ。」

なるほど・・・って、言っていることが大きすぎて、よくわからないが、確かに、大きすぎる力は危険だ・・・スサノオが見せた、あの破壊力は！！  
ルイズは、あの大木が消し炭になった様子を思い出し、少しブルツと身を震わせた。

「そういえば、あんたはいいの？南天。蛇の姿のままだけど」

「ん？オレか？オレはいいんだ、スーほど神通力が強いわけでもないし、第一自制できるからな。それに、この姿は、お気に入りなんだ。スーのすぐそばにいられるしな」

また、わからない単語が聞こえたが、今度は、自分で指輪に問いかける。

なるほど、そういう意味なのね・・・よくわからないけど。

納得したような、していないような、そんな顔のルイズであった。

**第13話・只今、原因説明中（後書き）**

少しずつですみません。

頑張りますので、よろしくお願いします。

総合PV30、000越え感謝感謝です。

## 第14話：只今、早寝早起中

不思議な体験をし、信じられないような話も沢山聞いたルイズであったが、お腹が膨れたことで、溜まりに溜まった疲れが、怒涛のごとく打ち寄せ、眠気という現象になって現れる。

「ふわあゝ……もつと話を聞きたいけど……眠気には勝てないみたい。そろそろ、寝ることにするわ」

欠伸を、あわあわと数回した後、ごしごしと目元をこする。すくつと立ち上がって、スルスルつと着ていた服を脱ぎだして、寝巻きに着替えようとすると……

「スー……女の着替えをマジマジと見るのは……神将の行いとはいえないと思うが？」

その言葉に、『ハッ』と両腕で胸元を隠し、『サッ』とスサノオに背を向けるルイズ。

眠気が吹っ飛ぶように、湧き上がるドキドキ感が、更なる動揺を誘う。

眠たくて、いつも通り1人のつもりで脱ぎだしてしまっただけで、そうだった、スサノオ達がいたんだっただわ……。

「なにいつているんですか、ナンちゃん。マジマジ見ていたんじゃないですよ……余りの美しさに見とれていた……といったところですよ」

背中越しに聞こえる、自分のことを『美しい』『見とれていた』というスサノオの言葉に、ルイズのドキドキゲージは、最高潮を突破しそうであった。

え！？

私の裸（スサノオは、本当は見えてないが）を『美しい』……って！それに、『見とれていた』ですって！？

もしかして、私の美貌にメロメロ！？

なに？どうすればいいの？

も、もしかして、こ、このまま？

え！？

だ、だめよ！き、貴族は、結婚してからも、すぐには、ゆ、許さないんだから！

そうよ、それに、まだ、今日会ったばかりじゃない！

キ、キスはしたかもしれないけど、あれは、契約の為にやったもので！

たしかに、あれは、初めてで、き、気持ちよか……ち、ちがうわ、な、なにいつてるのかしら、どうかしてるわ私。

好きとか、そんなのじゃないんだから！

そうよ、そうなの！だから、そんなこと意識するなんておかしいわ！しっかりしなさいルイズ！

ここは、気高く！品良く！も、求められたとしても、断固拒否しなきゃだめなのよ！

わかったわね！

マックスゲージを飛び越えて、ハイパーマックスまで高まったドキドキ感を、無理やり押さえ込み、厳しく心に叱咤して、スサノオに、断固言ってやろうと振り返る。

「いいこと！スサノオ！いくら私が魅力的だから……って、魅力的だから……あれ？」

「しいー！静かに！何いつているのかわからんが、スーなら、お前が固まってぶつぶつ言っている間に、もう寝たぞ」

見ると、自分のベットに、スサノオが入り込み、すーすーと寝息を立てている。

え？どうこと？なんで？

猛烈な肩透かし（ルイズ視点）を喰らったルイズは、この行き場のない思いと、ドキドキ感をどうすればいいのか、暫し呆然としながら、幸せそうに眠っているスサノオを見続けるしかなかった。

そして、自分がいかに、妄想力を膨らませ、何を想像していたかを思い返し、まさに、穴があったら入りたいぐらいの恥ずかしさに打ちのめされていた。

「わ、私って……」

「ま、何を想像したかは、大体わかるけどな、スーも今日は色々あって疲れたんだろうよ。色々ちからと力も使ったしな。」

「まあいいわ……私も疲れたし、ほんと……じゃあ……南天、私も寝るけど、明日は、ちゃんと起こしてって、朝、スサノオに伝えてくれるかしら？お願いね……はわああ……おやすみ……」

南天に言いたいことだけ言ってしまつと、ゴソゴソと、スサノオの傍らに入り込む。

スサノオから発する暖かさに、心地よく眠りの世界に旅立つルイズであった。

さて……これから、どうなるのかねと、すやすやと引っ付くように眠る二人から、窓の外に目をやり、双子の月が、いやらしそうに笑っている気がして、南天は、溜息をついた……。

「スー！スー！スサノオ！おい！起きろ！起きろって！……起きねえと……ガブっ！咬むよ」

「イタっ！って何！どうしたの！何が！って、ナンちゃんか……酷いな……咬まなくてもいいのに……ふあああああ」

「ほら、起きろ！目を覚ませ！もう日が昇る、オレがそばにいる限り！自堕落な生活はさせないからな！」

もう、ほんと、そういうところだけは、真面目さんなんだから……

もう少しぐらい寝かせてくれてもいいのに……  
はいはい、わかりましたよ……起きますって。

「ううううん！よし！」

自らに気合を入れて、起き上がる……つもりが、ガシッとホルドされていて、身動きが取れないことに気が付く。

よく……見なくても、自分の身体をルイズが抱きしめて、スースー寝息を立てていた。

なにか、いい匂いがして、寝心地いいなあ……って思ったら、ルイズちゃんでしたか。

ふむふむ、いいじゃん、あたたかくて、ぶにぶにしてて、なんだかまた、眠たく……

『ガブッ！……』

イタっ！！わかりましたよ！起きます！起きますから！ガジガジしないで！お願い！お願いだから！！

もうナンちゃんたら、もしかして妬い・・・イタっ！！すみません、もう余計なこといいませんから、イタっ！お願い許して！ほんと！わかった！わかったから！！

朝から、南天の咬み起こしを体験し、すっかり疲れたが、しっかりと目も覚めたスサノオは、朝食の前に、辺りを散策し地理を確認しておこうかと思った。

「ルイズちゃんを起こす前に、少し辺りを散策しようか、ナンちゃん。ほら、懐に来て！」

そういうと、さつと懐を広げ、南天を促す。

しかたないな・・・と呟きながら、懐に飛び込み、顔だけ出し、スサノオの温もりに、ニンマリする南天。

まったくこいつは、女に甘い！甘すぎる！そこが良い所でもあったりするが・・・それでも、あれだ！もつと節度ある態度を心がけねば！神将としての立場もあるのに！だから、オレがちゃんと見張って・・・いや、監視・・・いや、守ってやらねば！そう！オレが守ってやらないとな！

何故か鼻息荒くする南天に、首をかしげながら、ルイズの部屋があった建物から、外にでる。

自然に満ち溢れてるね！空気が澄んでるし、結構いいところかもね。キョロキョロと辺りを歩き倒しながら、観察する。

すると、水の流れる音を耳にし、そちらに向かって振り向いた瞬間・

・



「スー！危なっ・・・」

「キヤツ！？」

「おっと！？」

南天の注意が、スサノオの耳に入る前に、横から飛び出してきた来た女の子にぶつかっていた。

双方倒れこむが、そこはそれ、女の子が地面に激突しないように庇いますとも！

と、心の中で解説し、女の子を衝撃から守るスサノオ。

しかし、女の子が持っていた籠は、見事に宙に舞い、中に入っていた洗濯物は飛び散った。

ふむ、私の死角から、この衝撃力！そして、この弾力！この子やるな・・・

今日は、スカウターを持っていないが、かなりの胸せむせむを持っているに違いない！

そして、その、メイド服！猫耳が付いていないのが残念だが・・・

まあ、よしとしようじゃないか！

と、スサノオが密かに思っていたかどうかは、定かではない。

第14話：只今、早寝早起中（後書き）

毎日チエックしていただいている方も、ソウでない方も、ありがとうございます。

もう少し、執筆スピードが上がれば・・・  
ほんとに、申し訳ないです。

## 第15話：只今、好敵遭遇中

「あ！あああああ．．．．．」

洗濯籠を目で追いかけていたメイドっ娘（スサノオ命名）は、飛び散っていく洗濯物を見て、声を上げながら倒れこむ。

そして、そそくさと立ち上がると、舞い散った洗濯物を回収すべく拾いまわっていた。

スサノオも、その姿を見て、なら私も．．．と、散らばった洗濯物を拾って周る。

全ての洗濯物を、拾い終わり、これが最後だね．．．と籠に放り入れると、やっと周りが見えるようになったのか、スサノオにお礼を述べるメイドっ娘。

「す、すみません！本当にありがとうございました！貴族の方にこんなことして頂いたなんて！本当にすみません！！」

なんだか、謝られているんですけど．．．何故？

ま、なんにせよ、怪我が無くてよかったよかった．．．と、うんうん頷いていると．．．。

「わ、私、シエスタと申します。貴族様、本当にありがとうございました！」

と、言ったかと思うと、女の子は、韋駄天のように走り去った。

むっ、やると思っただが、素晴らしい足だ．．．あのスピードと、

あの胸なら、せんじゅうやく世界を狙えるかもしれない！なんて、独りで突っ込ん

でいたら、お腹のラツパが、食事の時間を告げていましたよ？  
では、そろそろ、ルイズちゃんを起こしに行きますかね？

『ボタンっ！！』

「ルイズちゃん！朝ですよー！ってなんで泣いてるの？」

ドアを開けながら、ルイズを起こそうと呼びかけたスサノオであったが、開けたドアから見えるのは、ベットの上でシクシク泣いているルイズであった。

「あつ！いた！もう！勝手にいなくなっちゃダメじゃない！起きたら、いなくて、昨日のこと・・・夢だったのかなって！でも、指輪はちゃんとあるし・・・でも、いないし・・・消えちゃったのかもって・・・そしたら、そしたら・・・」

「そかそか、心配だったんだね。ごめんね？勝手に外へ行っちゃったりして・・・大丈夫、大丈夫、私は、いなくなるから、いなくなるから、ずっとそばにいるから・・・ね？」

優しく、ルイズを抱きしめながら、子供をあやすかのように、慰める。

抱きしめられ、スサノオがいることを確認できたルイズは、嬉しかった・・・が、泣き顔を見られたことと、弱音を言ってしまったことが、非常に恥ずかしく、素直にそのことを表現できなかった・・・

「もう！今度勝手にいなくなったら、ご、御飯抜きなんだからね！

わかった!？」

「おお!これだ!これ!私は今、猛烈に感動している!！」

しかし、スサノオは、ルイズの反応そのものに、いたく感動し、拳を天に掲げ……

「おお、私は、ついに、伝説の1つに遭遇した!」などと呟いている。

その行動についていけないルイズであったが、そろそろ朝食の間でもあるので、着替えることにした……もちろん、スサノオに見られないように……

「スサノオ……き、着替えるから……外出てて。」

ということも忘れずに。

はいはい、婦女子の着替えを覗く趣味はないですから……と素直に、ドアに外にでる。

すると、ちょうど、向かいの部屋からも、女の子が部屋をでるところだったようだ。

背の高さは、私と同じくらいかな?……燃えるような赤い髪の毛の深い顔立ち、褐色系の肌に、南国系か?と疑問を持つも、それはない!と突っ込んでみる。

まじまじと私を見てくるので、私もまじまじと見返してあげる。

そして、1つ判ったこと……それは!この女の子……半端じゃない!……胸せなみち。

そう……果物に例えるなら……メロン級?

などと、互いを見比べている間に、後ろのドアから、ルイズちゃんが出てきましたよ。

「おはよう、ルイズ」

ルイズを見て、目の前の女の子が、にやっと笑う。（私のことはスルーのようです）

「おはよう、キュルケ」

ルイズは、顔をしかめると、嫌そうに挨拶を返した。

「あなたの使い魔って・・・それ？」

スサノオを指差し、本当に？みたいな口調で聞いてくる。

「そうよ！」

「凄いいじゃない！本当に、人間を召喚しちゃったんだ！」

ふむ、違うけどね！神様だけどね！ま、そこはどうでもいいけど。でも、ルイズちゃんを馬鹿にしているなら・・・プチツと神罰なんか喰らわしちゃったり・・・って、まあ、そこまでの悪意は感じられないか。

「でも、まあ、平民呼んじゃうなんて、あなたらしいわ、さすが、ゼロのルイズ！」

ルイズの頬に朱がさす。

「う、うるさうわね」

「私も、ちゃ〜んと、昨日成功しているの。もちろん、誰かさんと違って、1発でね！」

「あっそ」

「どうせ、使い魔にするなら、こつというのがいいわよね」フレイム  
「！」

キュルケが、勝ち誇ったかのように、使い魔を呼ぶと、後ろのドアから、真っ赤で巨大な火トカゲが・・・ゆっさゆっさと現れた。そして、火トカゲ自身が身にまとう炎と熱気に、廊下はむんむんする。

「なんだ、サラマンダーか・・・」

つまらなさそうに呟くスサノオを『なにい！』といった表情で、睨むキュルケだが、のそのそと出てきたフレイムと呼ばれた火トカゲは、スサノオの前に来ると、頭を下げ、這いつくばった。

『お初に御目にかかります、偉大なる神気を纏いし方々、私、サラマンダーのフレイムと申します。』

キュルケとルイズには、「きゆるきゆる」といった鳴き声しか聞こえないのだが、スサノオと南天に、その声は届いていた。

『おめーの主人・・・ちよつと品がねえな・・・だが、それは、おめーのせいじゃない。ま、当分この地にいるつもりだからよ、よろしくな』

『よろしくね』

南天とスサノオの言葉は、もちろん、フレイムにしか聞こえない。しかし、その仕儀さを見た、ルイズは、「何をしているのかしら」と疑問に思う。

そして、キュルケは、いきなり頭を下げだす自分の使い魔に、いったいどういうことなの？という視線を投げかけるばかりであった。

「あなた・・・なに者？」

しずしずと後ろに下がったフレ임을確認した後、キュルケは、スサノオに問いかける・・・が、スサノオは相手にしない。

「おお、すごいね〜やっぱり、サラマンダーは、凄い熱を出すんだ！尻尾も燃えてるし！」

と、フレ임을撫でたり、突いたりして、遊んでいた。遊ばれているフレ임もどこか嬉しそうだ。

「あなた、サラマンダーを知らないの？見て、この尻尾！この子は、まず間違いなく、尻尾から出る火炎の大きさからいって、火竜山脈のサラマンダーよ！コレクター収集家に見せたら、値段なんてつけられないほどの珍しさなのよ！」

「そりゃ、よかったわね」と苦々しく・・・やれやれと、相槌を打つルイズ。

「素敵でしょ。私の属性にぴつたり！」

「そりゃ、あんた、『火』の属性だもんね」

「ええ。微熱のキュルケですもの！ささやかに燃える情熱は微熱。でも、男の子はそれで、イチコロなんだわ。あなたと違ってね！」

キュルケは、得意げに胸を張る。ルイズも負け時と胸を張るが、なんと、勝負にならなかった。

ルイズはそれでも、キュルケを負けじと睨みつけるが、『せんどうりゅう胸』が勝敗を分けるならば、到底勝ち目はなかった。

「まあまあ、ルイズも、ミス・・・も、そこまで、そこまで。朝から、カッパするのは、お腹が空いている証拠ですよ？私のお腹も、



カンカン鳴ってますしね。ですから、ここは、朝食を食べてからに！ね？いいでしょ・・・ルイズ？」

「もう、仕方ないわね・・・スサノオがそう言うんじゃない・・・」

やけに、素直に使い魔の青年の言うことを聞くルイズを、変な生き物でも見るような顔で見ながら、傍らで世話を焼く青年に興味を持った。

「あなた、お名前は？」

「これは失礼しましたミス・・・私の名前は、スサノオ。ルイズの使い魔でございます。」

「スサノオ・・・なんだか、発音しにくいわね」

「うっ、うるさいわね！そんなの関係ないでしょ！」

「ま、いいわ、それでは、お先に失礼」

キュルケは、そう言うと、炎のような赤髪をかきあげ、颯爽と去っていく。

その後を、ひよこひよここと、フレイムが着いていき、スサノオの前を、ちょこんつと頭を下げて、愛想良く去っていく。中々礼儀正しい火トカゲのようだ。

キュルケがいなくなると、拳を振り上げて、突然、叫びだす人物が一人。

「くやしいいいい・・・なんなのあの『胸』せんとつりよへ いったい何が詰まっているのよ！私だって、毎日毎日牛乳飲んで頑張っているのに！理不尽よ！不公平よ！納得できないわ！」

「いいじゃないか、他人は他人、自分は自分。女の人の魅力は、胸の大きさで決まるものじゃないし、第一ルイズは頑張っているのだろっ？それに・・・」

ルイズの耳元に口を近づけて囁く・・・。

「今の、ルイズは、十分魅力的ですよ・・・私が、参っちゃうほどね」

囁かれた言葉の意味を、頭の中で反芻し、真っ赤になるルイズを温かい目で眺めながら、ふふふ、可愛い反応だね〜からかい甲斐がありますね〜でも、お腹空いたな・・・と心の中で思っていた。

もちろん、懐の中で、南天が、スサノオを咬んでいたことは言うまでもない

**第15話：只今、好敵遭遇中（後書き）**

毎度、御覧いただき感謝です。

PV40'000越え感謝です。

ほんとに。

## 第16話：只今、朝食満喫中

トリスティン魔法学院の食堂は、学園の敷地内で一番背の高い、真ん中の本塔の中にあつた。食堂の中は、1階に生徒が、そして、生徒達の行動を見られるように設けられたロフトのような中二階が、学院関係者及び貴賓席となつていた。学年ごとに、分かれているらしく、ルイズ達2年生は、1階の真ん中の列に・・・各々決められた席があるようであつた。

朝食、昼食、夕食と決められた時間に、全員一斉に食事をするらしく、スサノオ達が、着いた時には、かなりの賑わいをみせていた・・・。

「へえ〜結構、豪華な作りなんだね・・・」

さも普通そうに呟くスサノオに、結構どころか、かなり豪華なつくりなんだけど・・・と逆に言いたいルイズであつたが、そういえば、相手は神様である。この程度では、驚かないか・・・と変に納得していた。

「トリスティン魔法学院で教えるのは、魔法だけじゃないの。この国では、魔法使いは、ほぼ全員が、貴族なの。だから、ここでは、貴族として素晴らしい人間になる教育も受けるわけ。だから、食堂も食事も貴族として相応しいものでなくてはならないわけ。わかつた？」

豪勢な食事の山が並べられたテーブルの前で、そう説明しながらも、スサノオにイスを引かれ、テーブルについたルイズであつたが、スサノオは、特に感慨ないようであつた。

「そうか・・・世界が変われば、価値も変わるけど・・・ダメなところは、どの世界も同じ・・・だね？あつ、気にしなくていいよ。私の席は・・・ここには無いようだから、厨房にでもいって、軽いものでも貰って来るとします・・・か」

そう告げると、スタスタと食堂から出て行くスサノオを、どうかしたのかな？私、変なことと思ってないと思うけど・・・。神様の考えることは、わからないわ・・・と見送った。

「どうした、スー？あんな食事、あつちでも、珍しくも無いだろう？」

懐から顔出し、念話で、スサノオに話しかける南天だが、スサノオから返事が無いので、『？』と首をひねった。

時々、深く思考の海に入り込むと、中々でてこないからな、スーはま、別段、問題はないだろう・・・と黙ることにした。

「すみませ〜ん！すみませ〜ん！」厨房の中へ向けて声を掛けるも、反応が無い。

暫くすると、奥の方から、今朝の胸満点のメイドっ娘せんとうらちやく：シエスタが姿をあらわした！

スサノオは、逃げ出した！

しかし、回り込まれた！

スサノオは逃げられない！

「あなたは、今朝の！もしかして、噂の使い魔さん？」

目を爛々（ランラン）と輝かしたシエスタは、素早い動きで、スサノオを取り囲む。

「どうやら、逃げ切れないようだ・・・逃げる必要もないのだが。」

「噂かどうかは判りませんが、使い魔として、ここにすることに間違いありません」

「そ、そうですね・・・あ、そうだ、今朝は、本当にありがとうございますごさいました。てつきり、貴族の方とばかり思っていたので・・・逃げちゃってごめんなさい」

上目遣いで、頬を染めながら、斜め45度で謝ってくるシエスタ・・・まさか、狙っているのか？

その、ちよつぴり開いた胸元から見える、いけない谷間は・・・自分の胸せむせむの効果的な使い方を知っている？・・・って、なわけないか。

でも、私のドキドキゲージが、少しだけ、ホント、少しだけですよ？上昇した事だけは、教えておきましょう。

「いえいえ、勘違いがあつたのであれば、仕方ありませんし、気にしてませんから、あなたも気にしないで下さい・・・」  
『グウウウウ』

「.....」

「.....」

「ずいぶん、お腹が空いているみたいですね？・・・もし、よかつたら、食べていかれますか？賄い食になりますけど・・・」

「あ、ありがとうございます！私も、それが目当て・・・いえ、食べ物分け

て欲しくて、ここに来たんです」

嬉しそうに、少し恥ずかしそうにしているスサノオを見て、シエスタは、いい人かも？と少しドキドキした。

「んぐっ、はぐっ、もぐもぐ・・・ごきゅん。うめー！！おかわり！！」

「あはは、まだ、ありますからね？ゆっくり食べてください・・・。」

「欠食児童のように、ガツガツと食べるスサノオを、面白そうに、楽しそうに、眺めながら世話を焼くシエスタ。もちろん、スサノオに遠慮なんて、考えなどなく、胃袋に、ドンドン放り込んでいくが・・・。」

『少しは、遠慮しろ！ガブリっ！！』と懐の南天に噛まれ、仕方なく、本当に仕方なく、ご馳走様としたのでした。

「はあく美味しかった、本当に美味しかった・・・ありがとね、シエスタさん。ほんと、助かりましたよ。」

「いえいえ、また、いらして下さいね。それと・・・私のことは、『シエスタ』と呼んで下さい！！・・・ね」

にっこりと、スサノオ見る目は、とても黒くて、深くて、純粋な輝きを・・・そんな気がした。

うんうん、いいね！こういう純真さ！うんうん・・・って、私はオヤジか！と心の中の、スサノオ劇場では突っ込みまくりでしたが。

「じゃあ、お腹も一杯になったし、そろそろ、お暇するとしますか。また、来ます・・・シエスタ」

「はっはい！是非、また来て下さいね・・・ス、スサノオ様」

厨房から出た私は、食堂の入り口でキヨロキヨロしているルイズを見つめ、近寄るが、『遅いわよ！』と怒られ、教室へと引きづられて行くのでした。

おかしいな・・・いつの間にか、敬うとか、恐れとか・・・まあいい傾向か。

魔法学院の教室に入ると、食事を終えた生徒達が、各々グループをつくり騒いでいた。

その中にひとつに、朝出会った、胸せんとりやくメロン級のキュルケが、男の子の集団の中で、まるで女王様のようにチャホヤされているのが見えた。

『ま、老いも若いも、関係ないか・・・悲しい生き物だから・・・男ってヤツは！』

ちょこんと、顔を出した南天の辛らつな念話に、苦笑するスサノオだったが、あれは、仕方ないと思うね！いけない魔力が込められた塊だからね・・・それに、ここの生徒は、貴族ばかりだから、蛙かわずなんだよ。良いも悪いも物指ものさしが小さいのだから。

そんな、念話でやり取りしている、スサノオと南天だったが、自分の席に着いたのか、ルイズが席に座るの見て・・・。

「私の席は、当然ないですね・・・ま、仕方ありませんよね。ここにでも・・・」と、床の上に胡坐をかいた。

「う、ごめんなさい・・・学院事務局に言っておくの忘れててたわ・・・その、私のイスに・・・座る？」

神様・・・床に座らせちゃ・・・まずいのでは！と咄嗟に気配り



？してみたものの、『いいや、いいよ、別に私の国では、普通ですしね』と言われ、少し安心した。

そか、いいのか、でも、コレが普通って、どういう生活形式なのかしら？そこらへんも、また、聞いてみなくちゃね・・・スサノオのこと、まだまだ知らないことばかり・・・だから、もつと知りたい。

もつともつと教えて貰わなきゃ。だって、スサノオは、私の使い・・・魔で、その、契約・・・で、キ、キスしたし・・・ずーっと一緒にいてくれるって言うてくれて、だから、私も、大切にしないとって・・・そ、それに、怒ると怖いし、ズガガアーンって暴れだしたら、困るし、でも、優しいところもあって、魔法も・・・ちよつぴりだけど、使えるようにしてくれて、とても、感謝してて、なんか不思議な神様だから・・・私も、スサノオの横にいても、おかしくないような立派な貴族にならなきゃいけないわけで、だから、頑張らなきゃ！私、頑張るからね！

熱い視線をスサノオに送るルイズであったが、当のスサノオは、なにやら拳を握り締めるその姿を楽しそうに微笑んでいるだけだったのでした

第16話・只今、朝食満喫中（後書き）

総合PV45、000越え・・・本当にありがとうございました。

## 第17話：只今、授業参観中

始業の鐘が鳴り、生徒達は、改めて、各自席へ座り直す。

ルイズもまた、すぐ横（床の上にだか）にいるスサノオを気にしながら、緊張した面持ちで教壇のほうを向き、入口のドアが開くのを待つ。

「皆さん！おはようございます！」

暫くすると、元気な声で、挨拶をしながら、スタスタと紫色のロブを着た女性が入ってくる。

「彼女は、ミス・シュヴルーズ、赤土の二つ名を持つ、土系統のトライアングルメイジよ」と、ぼそぼそ、ルイズの説明を受けるスサノオであったが、この『系統』と『トライアングル』という単語に？（はてな）を浮かべる。

この世界の『魔法文化』を知るためには、色々と情報がたらないね・・・と独り思う。

別に、この世界がどうなるうが、魔法がどのように関わっているが、興味などないのであるが、ルイズに掛けられたプロテクトを解除することが、当面のスサノオの課題だと決めていたので、授業には、毎回出てみよう・・・とも思った。

「皆さん、春の使い魔召喚の儀は、大成功のようですね。この、シュヴルーズ、こうやって新学期に、様々な使い魔を見るのが、とても楽しみなんですよ」

そっぴいながら、教室にいる生徒と使い魔達を順々に見ていく。

そして、一番奥に座るルイズを見たとき、その横に座るスサノオを見つけ、少し驚いたように口を開く。

「おやおや、ずいぶんとかわった使い魔を呼出したようですね？ミ  
ス・ヴァリエール」

何気なく言ったつもりであろう・・・しかし、それを聞いた生徒達  
は、笑い声をルイズに向けて、さも可笑しそうにしている。

「ゼロのルイズ！召喚ができなかったからって平民を連れてきたの  
か！」

「そうだそうだ、平民を攫ってくるなんて、貴族としてはどうなん  
だ？」

「まさか、成功しないことがわかっていて、あらかじめ、平民を用  
意してたのか？」

「まあ、ゼロだし！」

「ふふふふ・・・」

次々に、誹謗、中傷、嘲り、さも、面白く、可笑しくそんな風に、  
ルイズに言葉投げかける生徒達。

彼らは知らなかった、ルイズが呼出した者が、ナニモノなのか。

彼らは知らなかった、それは、平民などという、貴族の奴隷ではな  
いことを。

彼らは知らなかった、それが、怒ればこの国の地図がいらなくなる  
ことを。

『ドンっ！！』

教室はおろか、学院自体が、大きく揺れる。

そこにいる全ての者が、「地震か！？」と感ずるほどの激震。

しかし、その震源地は、すぐ近く。

教室の後ろのほうから、息苦しいまでの何かが、自分達を圧迫して

いることを感じるが、余りの重さと、冷たく鋭利な寒さを感じ、誰も身動きが取れなくなっていた。  
もちろん、生徒の周りにいた使い魔達は、その現象がどうゆうもので、なにが原因かを本能で理解しており、皆防衛姿勢をとるのに精一杯であった。

「愚かな・・・誠に愚かな・・・貴族と称する下賤な人型。生徒も生徒なら、教師も教師か・・・。我、契約者を蔑ろにする者には、当然、その罪・・・贖ってもらわなければ為るまいな。」

そう、言葉を発するスサノオの右手が置かれた床には、大穴が空いており、震える大気は、全ての時間を停める。床には、すでに、割れた封環が、1つ飛び散っている。

その中で、ルイズだけは、南天が成した結界の中に匿われており、周りの変化に、第1級警報が鳴り響いていた。

まずい、まずい、まずい、まずい・・・

怒った！怒っちゃったよ！スサノオが！怒っちゃったよ！

私のことなのか、スサノオ自身のことなのか、わからないけど・・・

でも、ダメ、このままじゃ！この学院そのものが、無くなっちゃう！

で、どうしょ！南天は止める気なんでしょうね・・・私だけに結界？が張られているし！

ど、どうしたらいいの！私、どうしたらいいの！！

「この愚か者どもがああああああああ！！」

そう叫びながら、立ち上がったスサノオ！

その場に居合わせた、生命を持ちうる全ての生き物は、初めて身に降りかかった『神の怒り』に震え、怯え、そして絶望する。

何にそう唱えるのか・・・わからないままに、ピクリとも動かせぬ全身に、冷たい汗をかき、心の中では、皆、一心不乱に、神への謝罪を唱えていた。

「ただただ、自らを正すことなく、己が感情の思うがままに、弱きもの、しかも、女子おんなこを罵倒中傷するなど、貴族を僭称する蛮族どもめ！己が行動がいかなる結果を生み出せしか、その身で味合うがよい！！神の慈悲に感謝しやがれ！！」

スサノオが懐から出した金棒を、力いっぱい地面に降ろした瞬間。その教室にある全ての無機物が全て砂に変わり、爆発し！そして、はじけ飛ぶ！

机も、イスも、床も、天井も、窓も、壁も、杖も、紙も、本も、髪飾りも、石も、木も、金属も、

スサノオとルイズを除く全ての対象物が、酷い者は、骨を砕かれるようなその衝撃を、声さえ出せぬその身体に受けながら、皆、平等に気絶していた。

血を流していないものは、傷ついていない者は、皆無であるが、命の火は消されなかったようだ。

『これぞ神術！！神を舐めるな！愚か者どもめ！！』

ただただ、その、余りに衝撃的な光景を、結界の中で見ているしかなかったルイズは、青い顔で、震えていた。何が、どうしたのかわからなかった。でも、スサノオが怒り、そして、こうなった。それだけしかわからなかった。それだけで、精一杯。これだけのメイジが、一瞬で無力化・・・しかも、怪我をし気絶したまま、砂の中に埋もれている姿に、ただ、立ちすくしかできなかった。

「ずいぶん、手加減したなスー！」と、いつのまにか、ルイズの足

元にいた南天が、スサノオに声をかける。こ、これで、手加減？ルイズは改めて、スサノオの力の大きさを実感しながらも、何故、こうなってしまったのか聞いてみることにした。

「ねえ、南天……スサノオは、なんで、怒ったの？」

「それはだな……」

「ルイズが傷つけられた……ルイズの高潔な『心』が……ね。だから、怒ったんだ……私はね」

南天の言葉を遮り、外から差し込む光を背に受けながら、ルイズに微笑むスサノオの姿と言葉に、先ほどまでの恐さはすっかり消えうせ、逆に、神々しい光を放つ、高貴な存在であることを強く感じさせた。

わ、私の為に……スサノオの言葉が、とても、とても嬉しかった……いままで、『ゼロ』と馬鹿にされても、私を助けてくれる……そんな人いなくて……だから、私、こんな……気持ち……私のために、怒ってくれる……そんな人、今までいなかった……この、この気持ちは……なんだろう……嬉しいのに……でも、恥ずかしい……胸が……なんだか、へんな感じがするわ。

「スサノオ……あ、ありがとう。私の為に怒ってくれて！す、凄くうれしいの……でもね、でもね……やりすぎなのよおおおおおおおおお……」

上気し桃色に染めた顔に気づかないまま、ぎゅっと握った拳を振り回し、吼えるルイズ。

当のスサノオは、『おお！またか！また、私はああああこの瞬間を待っていたああああ！』と叫びながら、全然反省していない様子。

「なら、オレが、考えてやるしかないか・・・」と溜息まじりの南天なのでした。



第17話：只今、授業参観中（後書き）

全然、ストーリーが進まなくて申し訳ないです。

あはは・・・ふう

しかしながら、PV50,000越え感謝感謝です。  
どうぞ、これからもよろしくです。

## 第18話：只今、設定勸案中

さて、大激震の果てに、スサノオの怒り（超手加減ヴァージョン？）が炸裂した教室は全壊・・・校舎は、半壊。  
ただ、ラッキー？なことに、二年生の教室は、学院校舎の中心より離れた別棟だったため、学院全体としての被害は少ない・・・が。

「さて、この有様・・・どうしたらいいの？スサノオ様の意見を・・・是非、お聞きしたいわ！」

上気した顔で、ルイズは凄むものの、スサノオに通じるはずもなく・・・  
『めんどくさいから、全部壊しちゃいますかね』と言い出す始末。  
NO！それはダメ！断固否定！

でも、うーん、いいアイデアが浮かばないわ・・・  
もし、ばれて、責任問題になったとしたら、わ、私が、弁償しないといけないのかしら！？

それも、NO！私のお小遣いでどうにかできるレベルじゃない！  
お父様に、ワケを説明してなんとかしてもらおうか・・・うう・・・  
気が重い。

しかし、そんな、ルイズを笑い飛ばしたのは、小さな白蛇：南天であつた。

「何言つてんだよ・・・これは、神罰！つまり、厄災だ。だから、なんの問題もナシ！」

「え？言ってる意味が良くわからないのだけど・・・？」  
「頭悪い」う、うるさい！」な、だから、オレが解決策を説明してやるよ」

南天の説明はこうだ。

何も知らない、誰も知らない。突然、地震のような地響きがあったと思っただら、こうなっていました！

以上！終わり！

でも、！ルイズが召喚した使い魔は、かろうじて、ルイズを守った！だから、ルイズは無傷！というわけで、お前もここで『気絶してる！』

『きゆう・・・』

南天の言霊を聞いた瞬間、ルイズは、気絶し、その場に倒れた。

あとは、ここに倒れてる、馬鹿貴族どもか・・・こんなやつら、今すぐでも丸呑みにしてやるところだが、スーが赦さないだろうから・・・少し、記憶を弄るか・・・

しばらくすると、学院の教師や、衛士が、いったい何事かと集まってくる。

そして、その、砂にまみれた、または、埋もれている人の一部を見て、その惨状に、呆然とするも、学院長の指示のもと、てきぱきと行動していく。

生徒は自室または、医療室で、水系統のメイジが中心となって治療。教室ならびに、校舎は、土系統のメイジを中心に修復・修繕。

なんとか、一息ついたものの、この学院の院長、オールド・オスマンは、この原因を探るべく、手空きの教師達に調査の指示を出すものの、目が覚めた生徒のほぼ全員が、『覚えていない』と証言し、

結局なんの確証も得られないまま、時間だけが過ぎていくのであった。

結局、原因不明の大地震？というところで、決着したようで、なにもお咎めのなかったルイズは、胸をなでおろした。しかし、2年生の校舎は、調査継続の為、閉鎖となり、新に本塔の一室へと移されることと成ったと聞き、しつかり言っておかねば！とルイズは、スサノオに向き直る。

「いいこと！今度は、教室が本塔に移っちゃうんだから！だから・・・あの・・・その・・・こ、壊しちゃダメなんだからね！お、お願い・・・もう、暴れないで！」

言葉を聞きながら、なんだか不機嫌になっていくスサノオを感じ取り、少し勢いを落としていくルイズ。しかし、当のスサノオは、別段、そんな気は、サラサラ無く、別の考え事をしていただけであった。

そして、『ハッ』と気が付くと、少し涙目のルイズが、こちらを見ているではないか・・・

『これはもう・・・誘っているとしか・・・』と言いかけて、南天にガブリッと咬まれるお約束。

「ところで、スー・・・何を考えていたんだ？何か、渋い顔をしていたが？」

「ん？少し・・・悩みごとが・・・ね」

悩み事！？その言葉の意味するところは？

どうしちゃったのかしら？

も、もしかして、ここにいることに不満が？！

私のことで、呆れて、それで、その、もう帰りたいとか？！

それとも、私が、あれこれ準備を怠ったから？

それとも、給金が欲しいとか？食事とか？

何を？何を悩んでいるの！？

ま、まさか・・・もしかして、その、あの、あれだ、わ、私のことが、その、ほ、欲しい・・・とか！？

ええ！？た、確か、その、契約のときに、それらしいことを言っていたような・・・

で、でも、それは、赦ゆるされたはずだし、今になって、やっぱりなしているのは・・・

あ、でも、その、べ、別に、嫌ってわけじゃないのよ！

スサノオが、その、どうしても言うのであれば、しょうがないというか、し、仕方なく、そう！仕方なくなのよ！

だって、相手は神様だし、それに、優しいし、たぶん、私が嫌がるようなことしないでいてくれると思うし・・・

で、でもね、まだ、その、早いと思うの・・・私はまだ、学生だし・・・

その、慎み深い貴族の令嬢なわけで、そ、そんな、こと、興味が無い・・・わけでもなくて・・・  
でもね、でもね・・・

ああ！もう、いいわ！腹を括りましょうルイズ！

たぶん私には、それくらいしか・・・スサノオに、してあげられることってないし！

・・・だから・・・だから・・・

「好きにしているのよ！」

「え！いいの！ほんとに！」

突然の、好きにしている発言のルイズに、即反応を示したスサノオ。真っ赤に茹る様な顔で、スサノオを見るが、スサノオは、小躍りし

ながら浮かれている。

も、もう、しかたないわね！そんなに、喜ばれちゃったら、す、凄く恥ずかしいじゃない！もう、凄い神様なのに、なんていうか、可愛いところがあるのね。

そんな、ルイズの心の声が、聞こえたのかどうか定かではないが、急に真面目な顔で、ルイズの両手を握り締めるスサノオ……

「ありがとうルイズ……君は、本当に、素敵な女の子だね。この私に、こんなにも理解を示してくれるなんて！」

「べ、べつに、そんなことないわ……私が、してあげられることって、これくらいしかない……し……」

もう、スーパーハイテンションモードを突き抜けて、天昇しそうなぐらい、高まっているドキドキに、ルイズの心臓は、超高速稼働中なのでした。

ああ、領地のお父様、お母様、ちいねえさま、ごめんなさい……私、今日……教えを破つて、お、大人になっちゃうです。

でも、でも、後悔はしていません。相手は神様ですし、これはこれで、名誉なことだと思っし、だから、だから、ルイズを破廉恥な娘だと思わないで下さい。お願いします！

「そうか、じゃあ、やはり、ここは、ルイズにどちらがいいか選んでもらって、それにしよう！」

「うへ？え、選ぶ？い、い、いったい何を……」

な、な、なに！？何を選ばされちゃうの！？

あ、あれって、そ、その、え、えっと、どちらかだなんて、ど、どっしょおおおお、こ、困ったわ！私……だって、もちろん初めてだし、そのことについて具体的なことは、よくわからないし、だ、

だから、選べといわれても、なにがなんだか・・・も、もしかして、  
凄いことされちゃったりしたら、私、どうなっちゃうの!?

「では・・・」

「じくりっ」

急にシーンと静まり返った室内に、生唾を飲み込む音とその心臓の  
音だけが、響いているような、そんな幻聴に悩まされながら、まさ  
に、緊張の一瞬を味わうルイズ・・・時間の流れが、とても緩慢な  
ものを感じた。

「『天才美青年剣士：スサノオ』がいいか、『千人切りの鬼戦士：  
スサノオ』、いやまてよ、『仙術魔人：スサノオ』もやはり棄てき  
れない!しょうがない、この3つから、選んでもらえるかな?」

「は?」

「いや、だから、この、『天才美青年剣士：スサノオ』、『千人  
切りの鬼戦士：スサノオ』、『仙術魔人：スサノオ』のどれがいい  
かを決めて欲しいんですよ」

「えっ?」

「ルイズ・・・私の話・・・ちゃんと聞いてますか?」

「な、なにを言っているの?」

「だあかあらあく私の設定!職業!立ち位置!これを決めないと、  
いけないと思ってるね。私がいつまでも『平民』というジョブのまま  
だと、ルイズが嫌な思いをする可能性がまだあるわけで、だから、

私が、実は、『結構できる奴』で、しかも、『やんごとなき立場だった』という設定にするとしたときに、じゃあ、職業は何してたんだ？って聞かれるわけでしょ？だから、『新しいジヨブ』と『二つ名』も考えなきゃってワケで、ズーと悩んでたんですよ。わかったかな？」

「全然わけわかんناわよ！馬鹿あああああああ！！」

ルイズの叫び声は、それはもう凄いもので、そして、同時に繰り出されたパンチは、音速を超えたとか、越えなかったとか。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

「落ち着けルイズ……何故にそう、興奮しているのかわからんが、スーが時折、超馬鹿なことを言い出すのは、毎度のことなんだよ……でも、まあ、スーの話もわからんでもないな」

「ふむ、流石ナンちゃんは、理解が早いね。だから、ルイズ、まあ、落ち着きなよ。それで、ちゃんと、3人で、口裏を合わせないといけないしね。キチンと決めようよ……ね」

「神様が口裏なんて言うな！それと！私の、私のドキドキを返しなさいよー！」

「いや、ルイズ……何言ってるんですか？私には、そっちのほうが、さっぱりですよ」

「まあ……あれだ、スー……女にな、色々あるんだよ……色



々とな。  
「

第18話：只今、設定勸案中（後書き）

年の瀬も押し迫って参りました。

なんとか、毎日更新と想いつつも・・・

そろそろ・・・いや・・・しかし！

申し訳ございません。

第19話：只今、魔法挑戦中

・・・

トリステイン魔法学院の中央に位置する、本塔の最上階では、1人の老人が、重厚なつくりのセコイアのテーブルに肘をつきながら、顔に皺しわを寄せていた。

何か集中するような、どこか遠くを見ているような、そんな姿に、傍らで控える秘書は、束の間の平和をかみ締めていたのだが・・・

「うむ・・・なるほど・・・」

こぼれた呟きに、秘書は、突然立ち上がり、自分が座っていたイスに手を掛けた・・・と思った瞬間、そのイスは宙を飛び、老人の目の前に姿を移動させていた。

「何度いつても、わからない人ですね！オールド・オスマン！」

しかし、イスが当たる！と思った瞬間に、傍らに弾け飛び、老人は、『ふおっふおっふおっ』と笑い声をあげる。

「真実とは、どこにあるものなのか・・・神秘的な問いかけだと思わんかね？ミス・ロングビル」

「そうですね・・・しかし、それは、私のスカートの中にはありませんわ！」

そんな問答をしている二人の間を、小さな白いハツカネズミが横切

り、素早い動きで、オスマンの肩へと飛び登る。

ギリギリと、そのハツカネズミを睨むロングビルであるが、そんなことはお構いなく、オスマンは問いかける。

「で、どうじゃったかね？モートソグニル。ふむ・・・ふむ・・・なるほど・・・」

本当に、ネズミの言葉がわかるのか？それは、定かではないが、年齢を100年とも、300年ともいわれる偉大なるメイジ『オールド・オスマン』と呼ばれるこの老人ならば、それも可能なかもしれない。

「やはり、白か・・・純白か・・・フリル付きか・・・だが、ワシは黒！しかも、ガータベルト付きの、こう男心を猛烈に奮い立たせるヤツのほうに似合うと思うんじやよ・・・お前はと思う？なあ、可愛いモートソグニルや」

「何度も何度も！使い魔を使って、スカートの中を覗くなど何度言ったらわかるのですか！」

苛烈な怒りをぶちまけるロングビルではあるが、オスマンは、気にも留めていない。

逆に、その怒りを好意の裏返しだと勘違いしているほどだ。

「そんなに、カッコしなさんな・・・じゃから、婚期が遅れるんじやよ」

「うるさいいいい！今度やったら、王室に報告しますからね！」

「かつかつか、王室が恐くて、魔法学院の院長が務まるか！」

暖簾に腕押し・・・まったく反省の色が見えないが・・・

しかし、それも束の間、院長のボディには、光速の拳が決まり、

倒れこんだ身体に、苛烈な蹴りがこれでもか！これでもか！と浴びせられる。

「ごめん、痛いっ！やめて！も、もうしないから・・・」

以外にへたれな院長が、恍惚とした表情で床に転がっていた・・・しかし、蹴りは止まらず、オスマンは、頭を抱えてうずくまる。

「いや、痛っ！、もっと！いや、うそ！ほんと、マジで、痛っ！ああん！むぐっ、君、老人に何を、おおっ！痛っ、いや、すみません、痛っ！そ、そこは！おほっ！いやっ！ほんと、ごめんなさい・・・」

そんな、院長室のドアにノック音が響く。

『コンコン・・・』

「誰じゃ？」

「私です、コルベールです」

来客を確認すると、申し合わせたかのように、素早く自らの席に座り直すオスマン。

ロングビルも、乱れた髪を手早く直し、席に戻る。早業である。

「入りましたまえ」

「失礼いたします・・・」

ガタンっ！と勢いよく開き、眩しい額を惜しげもなく曝しながら、コルベールが部屋の奥に向かい、チラッと、ロビンギビルを目の端で気にしながら、オスマンの前にやってきた。

「遅れて申し訳ございません。調査の報告の件ですが……」

報告される内容を、頭の中で整理しながら、その奇特さについて考える。

教室のほぼ全ての備品が砂に変換されたこと。

強烈な地震が観測されたこと。

被害者？である教師並びに、生徒の全員がその『原因』についても『何が起こったか』かについてもまったく記憶が無いということ。

いくら調べても、まったくいいほど、何もわからないこと。仮に、賊が何らかの目的のために、侵入し、尚且つ、教室を砂に変換し、そして、そこにいる全ての者の記憶を消す。

不可能ではないだろう。しかし、それだけのことを、短時間でやるうとするならば？

単純に見積もっても、土系統、風系統、水系統を主にするメイジが最低でも、各10人は必要で、また、合計30人もメイジが、秘密裏に侵入・行動をすることは、難しいであろうし、そこまでする行動原理がこの学院にあるとは思えないし、想像もつかない。

長く伸びきった白い髭をしごきながら、どうしたものか……と呟いてみるものの、結局、なにもできなし、なにもわからないのじやろうな……と結論つける。

このことを王室に報告しなければ、また別の問題が発生するやもしれぬしのお……なんとも、頭がいたいわい。まあ、当面は、学院の警護を強化せねばなるまいで……。

「それとは、別件で、ご報告したいことが……」

「ふむ、なんじゃね？」

これを……といいながら、コルベールから出されたのは、『始祖ブリミルの使い魔たち』と標をつた古い書物と、なにやら書き込ま

れたスケッチ用紙。

それを見たオスマンは、急に厳しい表情をし、細められた目で傍らにいるロングビルに退出を促す。

それを確認し、コルベールに言葉を急がせる。

「……つまり、ミス・ヴァリエールの使い魔である青年が、伝説の使い魔『神の左手・ガンダールヴ』ではないかと！そう結論づけてまして。急ぎ、報告にあがったというわけです」

先ほどとは違い、興奮気味のコルベールであるが、オスマンは、もう一度尋ねる。

「つまり、その青年が、『伝説の神の右手』であるか？なるほど……しかし、それを呼出した生徒は、その伝説に見合った実力をもっていたのかね？」

「はあ……ミス・ヴァリエールは、優秀な生徒ですが、実技は、その、からっきしで……」

どうも、コルベールとの温度差を感じるオスマンであるが、ここはしっかりと釘を刺しておかねばなるまい……と口を開く。

「ならば、しばし様子見じゃな。その本の内容ですら6千年前のことじゃし、真偽はわからん。しかし、このことを王室なんぞに報告すれば、宮廷の馬鹿どもが、やれ外交だ、戦争だと騒ぐにきまつとる。ハゲ……じゃなかった、ミスタ・コルベール……君は、自分の生徒を戦場という名の死地へ向かわせても……平気かのお」

その言葉を聞き、100tハンマーで頭を打たれたかのように固まるハゲ……じゃなかった、コルベール。

「申し訳ございません・・・私は、また、同じ過ちを繰り返してしまつところでした」

「ふむ、ならば、このこと、他言するでないぞ・・・」

コルベールは、スケッチした用紙を魔法で燃やし、オスマンに頭を下げる。

二人のメイジは、共に良き教育者であつたようだ。

その頃、新たな教室で授業再開となつた2年生達は、再び、ミス・シユヴルーズの授業を受けていた。

「では、今日は、この石を、錬金してもらいましょう」

そつといいながら、机に置かれた、拳大の石を指しながら、生徒たちの顔を見て周る。

魔法の初歩の初歩。どんな系統のメイジでも、なにかしらに錬金できるものなのだ、理論上は。

しかし、希少価値の高い金属、硬質な金属、高品質なモノに錬金しようとする、レベルが高くないと難しい。中でも、土系統に特化しているメイジは、ことのほか錬金できる金属の質で、メイジの価値が決まるといっても過言ではない。

教壇に立つシユヴルーズは、『見本です』と言って、別の石を錬金して見せる。

「ミス・シユヴルーズ！それは、<sup>コールド</sup>金ですか？」

生徒の1人が、錬金された石の輝きから、<sup>コールド</sup>金だと思つたのだが・・・シユヴルーズは否定し、これは、<sup>シムル</sup>真鍮ですと返答する。



「私は、まだ、トライアングルですからね・・・さて、次は、どなたにやってもらおうかしら・・・」

どこでも同じだが、得意な者、自信がある者は、前を向き、そうではない者は、下を向く。

では・・・と指名され、一人づつ生徒が、前に出ては、錬金に挑戦し、銅や錫、青銅、鉄などに変えていく。

そして、ついに、ついに、ルイズの番がやってきた。

しずしずと、教壇へ向かいながら、緊張の面持ちで杖を握る・・・ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール 16歳。

来た！

ついに来たわ！

今日、ここで、私が魔法を成功させれば！もう『ゼロ』などという不本意な二つ名で呼ばれることも無い！

そう、今日から始まるのよ、この可憐で、高貴な、ルイズ様の、偉大なる伝説が、ここから始まるのよ！

ゴゴゴツと、スタンドのようなオーラを背中に背負い、妄想も背負い、身体から漲る魔力の流れを意識しながら、できる！私は出来る！そう！できるのよ！換える！換えるわ！そう・・・金！ゴールドどうせなら金に！ゴールド金金金・・・

そう頭で念じながら、強く杖を握るが・・・

『力を抜いて、優しく、そおくと、簡単なものを頭に浮かべて杖を振りなさい』

突然、頭に響く優しい言葉・・・

『大丈夫、成功します。だから、簡単なものから・・・身近にある金属を思い描いて・・・』

そうね、別に焦る必要はないんだわ、成功しても、失敗しても、私は私。

何も変わらないし、スサノオは、私の傍にいてくれる・・・  
そう思うと、ポヤポヤした暖かさが胸に広がり、心が穏やかに、優しい気持ちで一杯になる・・・  
そして・・・

『えい』と錬金魔法を唱えた！！

いつも通り爆発するであろうと身構える生徒。

おのが使い魔を抱え、机の中に隠れる生徒。

蔑むネタにするため、マジマジと見続ける生徒。

そして、まばゆい光を発した杖の先では、見事に赤銅に錬金され、赤くて鈍い輝きを放つ綺麗な金属の塊がそこにあった。

おおおおおおおおおおおっ！

ルイズが、初めて魔法が成功した瞬間！

そこにいた生徒たちは、全員総立ちで、叫び声を上げていた。

まさに、信じられないものを見た！そんな表情であった。

そして、当事者であるルイズは・・・

泣いていた・・・静かに涙を流し。

初めて出来た錬金。

初めて皆の前で成功した魔法。

嬉しい・・・凄く嬉しい・・・

きっと、気負っていたら失敗していただろう。

妄想に身をまかせていたら、爆発していただろう。

いつも、すぐ調子に乗り、誇大妄想に取り付かれる私でも、出来た。

魔法が使えた。

それも、自分が思い描くその通りに！

それも、これも、すべて、すべて、スサノオのおかげ。

私の、素敵な使い魔のおかげ。

ああ、なんて幸せなんだろう、この、皆の驚きの視線・・・クセになりそう！

いやいや、それは、置いておいて・・・

「スサノオオオオ・・・出来た・・・出来たよ！私にも出来た！」

そお言いながら、走り、教室の隅でルイズを見守っていたスサノオの胸に飛び込むルイズ。

よしよし、よかったね、よかったね、とスサノオは、背中を優しく撫でてあげる。

まるで、兄弟のように抱き合う二人を、見ながら、少し涙目で、『やるじゃない』と呟いたキュルケがいたことに、気づくものはいなかった。

第19話：只今、魔法挑戦中（後書き）

聖なる日・・・ま、そんなものです。

PV50、000越え・・・本当にありがとうございます。  
感謝感謝です。

第20話：只今、自己絶賛中

・・・

おお！偉大なる魔法使い！

王国一のメイジ！

その魔力と智謀！そして美貌！

どれをとっても、トリステインで？！

まさに女神！トリステインの女神だ！

そんな、声援のような、讃えるような声を背景に・・・

お気に入りのイスに座る私の前で、姫様と母様が、がっくりとしていた。

「ルイズ、あなたのその力・・・私では、到底叶いませんわ・・・」

「ルイズ、あなたはもう、この母を軽く越えてしまったよね」

え？姫様？そ、そんな・・・いや、でも、凄いかも私。姫様もそう言ったださってるし、母様も、軽く越えたって！いやあ・・・そんなに、そんなに誉めないで・・・私、嬉しい、嬉しいけど、いやあまいったわね、あはは、そうよ！凄いの！私は、ルイズ！ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール！そう！この、トリステインの女神なんだから！

いつの間にか、立ち上がり、私の方を見ながら・・・

「でも・・・」

「しかし・・・」

「胸の大きさは、まだまだですわね！」

「胸に関しては、残念のようね」

え？なに？ちょっと！なにそれ！私は女神なのよ！トリスティンの女神！胸なんか、胸なんか、こう、ポイ〜ンって、ポイ〜ンって、ほら！あるじゃない！こんなにも！凄いんだから！ちょっと、ちゃんと見なさいよ！ほら！ほら！

「それは本物？さわってみたの？」

「神の采配は、常に公平ではないのよ・・・」

本物よ！失礼ね！ほら、こんなに！こんな・・・に？これ・・・って・・・ない！ないじゃない！あれ？さっきまで、あったのに！本当よ！ここに、もっちりしたやわらかい塊が！本当よ！嘘じゃわ！

「本当かしら？もしかして、魔法のほうも・・・」

「虚勢を張るのはおよしなさい、人生なるようにしかならないのよ？」

いや、嘘じゃない！本当なの！本当なの！信じて！信じてよ！私を！私を信じて！！

「信じ・・・て・・・はっ！」

飛び上がるように跳ね起き、周りを確認するが、特に変わったことは無い・・・いつも通りの自分の部屋である。もし、違う点があったとしたら、自分の足元で、スー―寝息を立てているスサノオがいるくらいである。

「なんだ・・・夢・・・か」

そう呟きながら、自分の胸を触ってみる。  
どんなに触ってみても、夢で見たような塊はついていない。

「スサノオも・・・胸・・・あつたほうがいいよね・・・」

と両手を胸に当てて、ぼやいてみるも、こればかりはなんとものならない。

くうく姫様・・・胸の事だけは許さない！夢の中だけど、だけど、なんか悔しいわ！

母様も、あんなこと言わなくてもいいのに・・・  
はああああ・・・

「なんだ？こんな夜中に・・・ベッドの上で立つもんじゃない・・・  
危ないぞ」

ルイズの奇行に目を覚ました南天が、片目を開けつつ、注意を促す。

「大丈夫よ、そんなに、きやつ！」

言わんこつちやない・・・すつころんだルイズに潰されない様に、  
素早くベットから離れた南天は、溜息をつく。ま、まだ朝には早い、  
もう一眠りするか・・・とまるまるが・・・

「ねえ南天・・・ちょっと聞いていいかしら・・・」

「ん・・・なんだ・・・？」

寝ようと思った矢先に話しかけられ、少し不機嫌気味だが、別にそれを隠す必要もないとばかりに答える。ルイズは、ベットに座り直し、自分の胸に手を当てモジモジ話し出す。

「あ、あのね？その、えっと、す、スサノオって・・・胸のな・・・いえ、小さな女の子は、どうなのかなって」

「言っている意味がわからんが？」

「だから、その、胸の大きさは、気にするほうなの？好きとか嫌いとか！」

「ははくん、お前、なんだ、惚れたか・・・」

「な、なにを言っているの！ち、ちがうわよ！あれよ！あれ！一応、私は、スサノオのご主人様ってことになっているし、だから、つまり、スサノオが暴走しないように、その、好みを知っておかないといけないわけで、だから、なのよ！そう！他意はないのよ！」

「はいはい、いいて、いいて、スーは、知れば知るほどいい男だからな。変なところはあるけど。ま、別にいいんじゃない？人間なんて高々100年程度が限界だろ？だったら、誰も文句なんていわないし、逆に応援してくれるんじゃない？」

「はあ？なに言ってるのよ！そんなんじゃないって言ってるでしょ！もう・・・いいわ、私寝るから！」

そう言っつて布団をかぶるルイズであったが、南天に指摘されたことが、頭を離れずに、結局朝まで悶々とする事となった。

ま、いいか・・・こっちにいる間くらいは・・・となにやら考えていた南天がいたが、その言葉の意味は、今は誰にも伝わることはなかった。



はあああああああゝ眠い。

結局眠れなかったわ……

もう、南天が変なこと言うから……

でも、もう、朝だし、起きなきゃ……ああ、身体が重いわ……

そんなことを、頭の中で考えながら、身体を起こし、ベットから抜け出す。

この時間には、スサノオを南天は、ここにはもういない。

朝は、少し身体を動かさないといけないらしく、夜が明ける前には、いなくなる。

どこへいつているかわは知らないが、まあ、そんな遠くではないだろう。

でも、そろそろ、私を起こしに帰ってくるはずである。

「ルイズ〜朝ですよ〜起きましようね〜」と勢い良く、ドアが開き、いつも通りのスサノオが入ってきた。

そんな、スサノオを見て、眠いけど、今日も頑張ろう！とポツペを軽く叩き、キアイを入れる。

ルイズが錬金を成功させた翌日から、ルイズは、いつも通り授業に出ているが、いつも以上に熱心に、聞き入る。

魔法が使えることで、勉強がとても楽しくて仕方がない。そんな、未だかつてないほどの充実感を味わっていた。

そして、頭を使えば、魔力を使えば、当然のように、お腹の減りも早いわけで、授業終了の鐘と共に、スサノオを引っ張りながら、食堂に向かうのであった。

「ねえ、スサノオオ、いいじゃない、ここで食べなさいよ！ほら、私の席、詰めてあげるから！」

「ん？……はいはい、わかりましたから、落ち着いて落ち着いて・

・・・  
「

やけに優しいルイズを優しく往なしながら、たまには、付き合いますか・・・とルイズの隣に座る。

どうやら、決められた席というわけでもなく、気のあったもの同士で座っているようだ。

「これも食べなさいよ、ほら、取ってあげたから・・・」などと、甲斐甲斐しく世話を焼くルイズに、ホントにどうしちゃったのかな？と思いつつながら、女の子に優しくされるのは気分がいいなあ〜と軽い気持ちで、されるがままになっていたスサノオであるが、すぐ近くに、異様なオーラを発した人物が近づいていた。

第20話・只今、自己絶賛中（後書き）

総合PV65、000越え感謝なのです。

物語は、ぜんぜん進みませんが・・・

どうか、宜しく願います。

あはは・・・ふう・・・

## 第21話：只今、小瓶冒険中

・・・

スサノオが、何故か？ルイズから歓待？的な食事の世話をされていた同時刻・・・

その、やや羨ましい暖色系の空気に周囲が包まれようとしたその時に、それは始まった。

ス、スサノオ様だったら、今日は厨房のほうにお出でにならないと思っただら、こんなところで・・・

もう・・・折角ご用意した、『スサノオ様用特別メニュー』が無駄になっちゃたわ。

しかも、ミス・ヴァリエールとあんなにくっついて！！

何か・・・そう、二人の仲を進展させるような・・・そんなことがあったのかしら？

そうよね・・・お二人は同じ部屋で寝泊りしているわけだし、『メイジと使い魔は一心同体』ということですし・・・きゃあ～まさか！そんな？いやいや、まってシエスタ！落ち着いて！良く見たらわかるじゃない？あのミス・ヴァリエールの照れっぷり！あの様子じゃ、まだ！まだ！まだ！歩手前といったところよね。ならば、まだ、そう！まだチャンスはあるはず！

そんな、脳内討論会で、やいのやいのと盛り上がっていたシエスタの足元に、コロコロ・・・と1つの小瓶が、どこからか・・・転がってきた。

当然、スサノオに意識を飛ばしつつ、脳内討論会をしつつ、給仕の仕事をこなしているシエスタは、気づかない内に、その小瓶を蹴飛ばしてしまっつ。

そして、そのカワイイソウな小瓶は、己が運命を嘆きつつ、勢いに身を任せたまま、転がるしかなかったが……。

誰が……小瓶にとつての救世主となりえるのか？

転がり終えたその先に、テーブルの下で、もしかもしゃと、南天が鶏肉の香草焼き（1羽丸焼き）を攻略しているところであった。

「ん、瓶か……なにが入ってるんだ？……うわ！クサっ！なんだ、この安物！」

自分の傍らに転がってきた瓶……フタのコルクに顔を向けてクンクンと嗅いでみるが、余りに安物的なペンペラの香水のニオイに、『ウゲエー』と空気を吐き出す。

「ん？どうしたの？ナンちゃん？もつと食べる？」といいながら、テーブルの下を覗き込み、深呼吸？をしている南天の傍にある小瓶を見つける。

なんだろ……これ？と思い拾い上げた小瓶には、少量の青色の液体がゆれていた。コルク栓に鼻を寄せると、柑橘系のニオイ……ああ、これは、だめだあ！ナンちゃんは、柑橘系だめな人？だからね。

しかし、こんな小瓶どこから来たのでしょうか……

そして、隣でくっついてるルイズに、『この香水は、ルイズのものですか？』と聞いてみるも、『それ、男物だし、それに、そんな安物つけないわ！』と真っ向否定。

さて、どうしたものか……と、手の中でコロコロ転がしていると胸メロン級せんとろんじゅうきゅうのキュルケとちんまい青い髪の幼女が、前の席に移って来た。

「な、なにしにきたのよツェルプストー！あなたの席はあっちでしょー！」

「別にいいじゃない、ここは自由席のはずだけど？」  
「それでも、だめなの！あっち行きなさいよ！！」

こんな感じで、テーブルを挟み、やりあう二人。  
もちろんスサノオは、たわわんと、揺れるイケナイ果実を見ない  
ようにしながら・・・堪能中。

青い髪の幼女は、はむはむと、サラダを攻略するのに忙しいようだ。  
そんな中、キュルケが、スサノオの持っている小瓶に興味を示す。

「それは？」と問いかけるも、ルイズが割り込み「あんたには関係  
ない」と口を挟む。

「さっき拾ったんですけどね・・・誰ので・・・モガッ！」とスサ  
ノオが言うが、「だめ、喋っちゃ！」とルイズがスサノオの口を押  
さえる。

そんな一瞬の隙を突き、小瓶は、スサノオの手から離れ、フロンティア新天地に  
向かい飛ばたく・・・ことが・・・できるわけもなく・・・悲しい  
かな、その短い一生を終えた。

そして、新に発生した、柑橘系の刺激臭に、その場に居合わせた・・・  
・ほぼ全員が鼻をつまむ。

「にゃに（何）！こによにおひ！（このニオイ）！！」  
「すひません・・・瓶が割れちったようで」

「もおゝはんはのよ（なんなのよ）！はんてやすものはの（何て安  
物なの）ゝはたま（あたま）、ひたふなっへひた（痛くなってきた）  
ゝ」

暫くすると、この刺激臭は、食堂の空気の流れに沿って散っていく。  
・・・が！

「あなたたち！この香り！どこで手に入れたの！」

突然現れた、巻き髪とそばかすを持った少女が、厳しい顔で、こちらを睨みながら質問を投げかける。  
だが、スサノオにしても、ルイズにしても、答えない。いや、答えられない。

「なんなの！聞こえないの！はつきり言いなさいよ！」

「はつきり！」

「ば、馬鹿にしてるの！どこで、この香水を手に入れたのよ！」

「どこで！」

おお、私とルイズの声がハモりましたね？

しかし・・・なんたる、この少女は。何故か怒ってますしね？ニオイの元は、どこでもなく、ここでなんですけどね。それ以上の言葉は出ないのですが・・・さて、どうしたのですかね・・・

「もういいわ！本人に直接聞くから！」

一人でプンスカして、去っていくその背中を見ながら、なんだか騒がしい子だな・・・という印象しかなかったのですが、降って沸いた騒ぎに、ルイズも、キュルケも呆れ返っていたようです。

なには、ともあれ、食事を再開しますか・・・と席についたのですが・・・

「君達のおかげで、レディーたちに傷がついてしまったではないか！」

今度は、なんだ？と振り返ると、金髪の少年？が何故か怒っている。

ふむ・・・この学院生徒達は、怒りっぽい人が、多いようですね？  
私が思うに・・・怒りっぽい人には、2種類の人種がいるのです！  
まず、1つ目は、お腹が空いている人。  
そして、2つ目は、カルシウムが不足している人。  
ですが、今は食事中！つまり、お腹は満ち足りているはずですよ  
？ということば・・・

目の前の事実を消していき、最後に残ったモノ・・・それが真実！  
そう！最終的に、カルシウム不足が残るわけです！  
ふふふ、つまり！この金髪の少年は！常に、カルシウムが不足して  
いる状態である！そう言い切ります！！  
素晴らしい私の推理力に、少年探偵も真っ青ですね？

ならば、私ができることはただ1つ！

「仕方が無いね・・・コレでも食べて、不足分を補うといいよ」  
そういいながら、親切な私は、ナンちゃんが食べ残し・・・いや、  
取って置いた、鳥の骨と、卵の殻をお皿に乗せて突き出した・・・  
しかし、目の前の少年A（スサノオ命名）は、さらに厳しい目つき  
でこちらを見えていますよ？・・・あれ？おかしいな？私の親切心が  
通じない！？

「ギーシュ・ド・グラモン・・・私達に何の用なのかしら？それと、  
変な言いがかりは、よして欲しいわ」

たわなに突ったイケナイ果実を前面に押し出しながら、キュルケは、  
ギーシュと呼んだ少年に、『食事の邪魔をするな！あっちいけ！し  
っしっ』といった感じのオーラをのせながら、言葉を投げ当てる。  
その横で、青色の髪の幼女も『馬鹿』と視線で送る。

私は、骨と卵の殻を乗せた皿を持ったまま、様子を伺うものの、ど



うしたもののか・・・と1人思う。

「重ね重ね、失礼な人間だね！君たちは！もう一度言おう！君たちの無責任な行動のおかげで、二人の可憐な華が傷ついたのだ！この責任どう償ってくれるんだ！」

なんていうか・・・ワケ判りませんか？

新手的クレーマーでしょうか？

しかし、私は空気の読める男！

ほほおくなるほど、つまり、私達に『喧嘩を買えと』そういつているのですね？

「ふふふ・・・なるほど・・・」とちよっぴり殺気を漏らしたからでしょうか・・・ルイズちゃんが少年Aと、私の間に入り込んできましたよ。

「ギーシュー！身の程を知りなさい。どうせ、二股でもかけて、振られたんでしょけど・・・腹いせの相手を探しているのなら、1年生でも虐めてきたら？」

と、ルイズちゃん言葉には、『私は、公爵家令嬢！あんななんかとは家柄という名の格が違うのよ？ほらほら、三下は、あつちで弱いもの虐めでもして、お山の大将気取つてろ！』というオーラが込められていましたとも！ええ！私には判ります！判るんですよ！さて、この少年A・・・どうするのかなくちよっぴり楽しみかも？え？悪趣味？そんなことないでしょ？私は、大人なんですから。

第21話：只今、小瓶冒険中（後書き）

総合PV70、000越えありがとうございます。

なんていいましょうか・・・すすいすすい進まないストーリーなのに申し訳ない。

真に感謝感謝なのです。

## 第22話：只今、二股暴露中

・・・

判らない・・・何故だ？！

あれは、僕が食事をしながら、友人達を女性についてあれこれと語っていた時だった。

突然、僕の恋人である、モンモランシーが傍に詰め寄ってきて・・・こう言った。

「ギーシュ！この前あげた香水ちよつと見せて！」

なんだ？いったい・・・でも、まあ、女性は元来気難しいものだからね・・・そんなことを考えながら、ポケットを探るが、アレ？小瓶がない！おかしいな？肌身離さず持っていたはずなのだが・・・

「もしかして、誰かにあげちゃったり、落としたなんて言わないわよね？」

鋭い眼光で僕を睨むモンモランシーだが、まあ、部屋にでも置いてきたのかもしれないし、そんな目くじらを立てるほどでもないだろうに・・・

「ギーシュ！あの小瓶は、私があんたの為に調香した特別なものなの！この世界に1つだけの香りなの！もちろん、私にその香りに気づかないわけがないの！その香りが！あっちのテーブル付近でして、

しかも飛び散っているのよ？さて・・・答えを聞こうじゃないの！」  
うっ、そうか、僕の為に作ってくれた世界で1つだけのモノ・・・  
ああ、モンモランシー君の愛を感じるよ・・・僕は幸せ者だなあ・・・  
ならば、そんな彼女に『ウソ』をつくのは男らしくないね？

「ご、ごめん、可憐な僕のモンモランシー・・・その、言いにくいことなのだが、つい先ほど落としてしまったようなんだ・・・ゴメン・・・でも、僕は君のことを愛してる、だから、許してくれないかい？」

「そう・・・なら、しかたがないわね！もう、また、作ってあげるから、今度は落とさないようにしてね・・・この香水は、貴方だけにしか作らないんだからね！」

いやあ～そんな大きな声で宣言されると、その、照れるなあ～いやあ～僕は幸せ者だ～とポヤポヤした気持ちを満喫していたのですが・・・一寸先は闇とでもいいますようか？なかなか、現実は厳しいものだな・・・

「ギーシュ様！や、やはり、モンモランシ先輩とお付き合いしていらしたのね！」

1年生のエリアからやってきた、ケティが大きな声で私に声をかけてくれる・・・が、ここは、なんだ、空気を読んで・・・じっとしていて欲しかったのだが。

しかし、憂いの表情でこちらを見つめる・・・その表情！くう～可愛いね～もうお兄さん堪りません！

いいやあ～こんなにも、可愛いレディー達に愛されている僕は・・・なんて罪つくりな存在なんだ。

ああ、天は2物も3物も与えてくれたようだ・・・そう、はつきり言おう！僕は天に愛されているのだと！

「昨日、背中越しにかけていただいた・・・『僕が大切にしたい可憐な華は君だけだ・・・ケティー』という言葉はウソだったんですね！」

あ・・・いや、そんなことはないよ？そう、そのときは、心の底からソウ思っただ。だから、その、なんだ、後でお話しようよ・・・ね？

「ギーシュ？そういえば、昨日の放課後姿が見えないと思っていただけけど・・・どこにいつていたのかしら？」

おお！なんだか、背中にゾクゾクするものを感じるが・・・そんな笑顔で・・・しかし、目が笑ってないよ？モンモランシー？

「昨日、私とギーシュ様は、馬で草原まで遠乗りをしていたのですわ。モンモランシ先輩！」

「それは本当なの？ギーシュ？」

あ！ああ・・・ケティーそれは、二人だけの秘密だと言って言ったのに・・・

あんだか、非常に、こう、まずい気がしてきたが、だが、つまり、あれだ、僕を愛する二人が、お互いを知ること、さらに愛が深まるという・・・

「私というものがありながら、他の女にちょっかいかけてんじやない！」

「ギーシュ様・・・ひどいですわ！」

あれ？なんだか・・・想像と違う方向に？そうだ、ここは、僕がキチンと言わねば！

「すまない・・・だが、僕は！僕は！真剣に・・・二人を愛してしまっただんだ！」

ふっ・・・決まったな！こうして、また、愛のギーシュ薔薇伝説は語り継がれていくのさ！

こつも愛されすぎるというのも、時には困ったものだ・・・しかし、僕は、この世界の全ての女性に愛を囁かねばならぬ運命を背負いし男・・・

「「ふざけんなああああ馬鹿！！」」

二人の見事なハモリと共に、両脇から、ものごっついパンチが、僕の腹を挟りこむ・・・

『ぐはあああああつ』その言葉とともに腹を押さえて倒れこむ。

なんだこれは・・・何故？しかし、痛いを通り越して苦しいぞ・・・腹に穴が空いたか！？

そんな僕に、二人の可憐な華達は・・・

「死んでろギーシュ！さよなら！」

「私は、私だけを愛してくれる方しか興味ありませんの！もう話しかけないで下さいね！」

ドシドシと荒い足音を立てて去っていく華達・・・

な、何でだ・・・僕を愛するが故に、二人とも身を引くというのか？いや、待ってくれ、心配しなくても僕は、ちゃんと二人とも愛していけるぞ！

だから、だから・・・

「あの、レ、レディー達は、薔薇の存在の意味をよく理解していないようだね」

「ギーシュ！二股はいかんぜ」

「そうだ、お前少し自重しろよな」

「ちよつち、かっこわりくかもな」

痛む腹を押さえながら、場を取り繕うように立ち上がる私に、友人達は、やいのやいのと盛り上がる。

むうくしかし、何故、僕が落とした小瓶の存在が、モンノランシーにバレたんだらう？

モテモテギーシュ様を妬んで、誰かに奪われたのか？

まだ、少し頭が混乱しているようだ、よくわからない・・・

すると、アノ香りが風に乗ってやってくる・・・

おや？なるほど・・・そういうワケか・・・まったく、こんなことになったのは、全てこの香りの発信地にあるということだな！断固責任を取らせなければ！そうすれば、あの華たちも、また、こちらに振り向いてくれるさ！

香りを頼りに、場所を移動すると、もつとも香りがキツイ場所にたどり着く。

そこには、ゼロのルイズとその使い魔、そして、キュルケとタバサが仲良く楽しそう？にはしゃいでいるではないか！

なんだ、僕がこんなに、理不尽な目に合っているというのに！猛烈に腹が立ってきたぞ！！

「君達のおかげで、レディーたちに傷がついてしまったではないか

！」

怒りに任せ、怒鳴るものの、そんな僕に、骨や殻を乗せた皿を突き出し『これでも食べて』だとお！

馬鹿にするのもいい加減しろお！僕は、ギーシュ・ド・グラモン！名門グラモン家の男だぞ！しかも、邪魔者のように、話しかけやがって！こんな扱い生まれて初めてだ！なんだ、こいつらは！

「重ね重ね、失礼な人間だね！君たちは！もう一度言おう！君たちの無責任な行動のおかげで、二人の可憐な華が傷ついたのだ！この責任どう償ってくれるんだ！」

返答しだいでは、ただでは済まさない！私は今、猛烈に怒っているんだからな！

第一貴族の僕に平気で話しかけてくるこの平民も！絶対に許さない！

「ギーシュ！身の程を知りなさい。どうせ、二股でもかけて、振られたんでしょけど・・・腹いせの相手を探しているのなら、1年生でも虐めてきたら？」

な、なに！何故そのことを！いや、ちがう、間違っているさ、振られたんじゃない、少し距離をとっただけさ。なのに、この女達ときたら！まったく・・・

「まったく、少し錬金に成功したからといって、やはり、わかっていない・・・君たちは、貴族としての慎みさが足りないようだ。ゼロはやはりゼロといったところか。」

所詮は『ゼロ』、いくら公爵令嬢だからといっても、恐れるに値しない。



しかし、それでも、公爵家の人間に喧嘩を売るのは得策ではないのも、わかっているさ。

キュルケも、辺境伯の令嬢だ、格は僕よりも上。タバサも留学生だ。・ ・ ・ 後ろ盾はわからないし。・ ・ ・

ここは、無礼な行いをした、その平民にとつてもらうとするさ。ルイズの使い魔といつても、所詮平民。なんとでもなる。なんせ、僕はこれでも、メイジ！であり、貴族なんだからな！

「おい！今。ルイズのことを『ゼロ』と言ったのか？」

なんだ、この平民は！貴族に対して口の利き方が出来ていない！まったく、どんな辺境からきた平民なんだ！貴族はな、お前達平民に取っては神のような存在なんだよ！

「ん？『ゼロ』は『ゼロ』だろ？お前、誰に口を利いているのか判っているのかい？僕は、貴族なんだ！お前のような、田舎者の平民が気軽に話しかけていい存在じゃないんだ！まったく、主人が『ゼロ』なら、その使い魔も『ゼロ』だな！いいや、これ以上かわりあっても仕方が無い。・ ・ ・」

「撤回しなさい。そして、ルイズに謝りなさい！この似非貴族！」

な、なに？！今、この平民。・ ・ ・なんて言った？謝れ？似非貴族？こ、このおおおおお、名門グラモン家の！この、ギーシュ・ド・グラモンを似非貴族だと！もう、だめ、許さない！こいつだけは殺す！

「無礼な平民には、躰が必要のようだな！それにルイズ！君もだ！まったく、信じられない！常識も『ゼロ』だったとはな！決闘だ！自分がどんな立場の人間だったのか思い知れ！あの世でだ！」

そう僕は、ポッケから白い手袋を出し、無礼極まりない平民へ投げつける。

ふふふ、自分の立場と実力を思い知り、泣きながら許しを請うなら、考えてやらないこともない。恐ろしさに震えるがいい！さあ！謝れ、許しを請え！這い蹲れ！

「ん？決闘？ここで？すぐ始めますか？」

なんだこの平民！僕との実力差がまるでわかっていないようだな！仕方が無い、その身体に、直接叩き込んでやる！

「ここは、食事を楽しむ場所だ。広場へきたまえ。逃げずにな！」

僕は、そう告げ、ヴェストリの広場に歩き出す。  
カッコいい、かっこいいぞ僕。

これで、バシツといいところを皆に見せ付ければ、僕の華達も、すぐに気がつくさ、僕の器の大きさにね。

そして、始まるのさ、愛のギーシュ薔薇伝説がね。

そんな風に、考えていたさ……そんな風にね。

第22話：只今、二股暴露中（後書き）

進みが遅くてすみません・・・

PV75,000越え感謝です。

ホント、頑張ろう・・・。

## 第23話：只今、激裂決闘中

.....

ギーシュとその友人達が、連れ立って食堂を出て行くのを見送り、どうしたものかと私は考える。

決闘か・・・いい響きだ。なんだか熱血マンガみたいで、ワクワク・・・ってそんなことはないけどね。

ただ、あいつは、ルイズちゃんのことを『ゼロ』と何回も呼んだよね？

ふふふ・・・ぷつちと神罰与えちゃおうかなあゝ

えへへ・・・どんな罰を与えちゃおう？

案山子かかしに変えちゃって、自分をもっとも大切にしてくてる人（男）のキツスがないと永久に案山子かかしのままになるのとか・・・

子豚に変えちゃって、3回転生を繰り返さないと元の時空列に戻れないやつとか・・・

壺の魔人の弟子にして、3万人の願いを叶えないとダメなやつとか・・・

フタを開けると、おじいさんになっちゃうやつとか・・・

ズボンのチャック（男限定）の精霊にしちゃうとか・・・

ああああ・・・色々あって悩んじゃううううう

なんにせよ。ルイズちゃんを馬鹿にした奴を、許してはイケナイ・・・

.....

「ス、スサノオ？そのニヤニヤしているところ悪いんだけど・・・ギーシュはともかく、この学院を廃墟にするのは、ナシの方向でお願いしたいのだけど・・・」

ルイズはそう、小さく言いながら、スサノオが、自分のことでギー

シユに怒っていることが判っているので、嬉しくもあり、恥ずかしくもあり、でも、スサノオが本気？を出しちゃったりしたら、大変なことになるのは明白で……

ああ、でも、私の為に、スサノオが決闘……なんだから、御伽噺のお姫様みたいだわ、私。

そして、決闘に勝ったスサノオは、私にこう言うの『これで、君の名誉は守られた、だから、私と……』

きやああああ……いいの？ほんとに？私でいいの？ああ、なんてことなのかしら、でも、スサノオがそう言うんじゃない、もう、仕方が無いから、まあ、ちよつとしたご褒美として……ね、その、キ、キスしてあげてもいいわ……よ。だから、最初は、や、やさしくしてね……お願いスサノ……オ……

『で、どうすんだスー』

『ん？そうですね、ま、所詮、ただか魔法使いの坊ちゃんでしょう？軽く往なして、見ましようか、彼の奮闘具合で判断すると……そんな感じで』

念話で、やり取りは誰にも聞かれないが、その様子を、タバサと呼ばれていた青色の髪をした少女が目を細めながら観察していた……もちろん、二人はそのことも感ずいてはいたが。

そこに、ギーシユとのやり取りを見ていたキュルケが、待ちきれずに声をかける。

「『素手で杖には勝てはしない』というけれど、平民では貴族に勝つのは難しいわよ？あなた、どうするつもりなのかしら？」

そんな言葉、はっと妄想空間から帰還を果たしたルイズは、どうしたらいいかしらと思案顔になる。

スサノオも落ち着いているし、多分手加減はしてくれるはず。たぶ

ん。きつと。まあ、いきなりキレることはあるかもしれないけど・

「スサノオ・・・私が、ギーシュに謝らせるから・・・その、私のことは許してあげて！」

「なんでかな？」

「だって、もし、もしよ？大変なことになったら（主に私の責任問題が）まずいから・・・」

「でも、あいつはルイズちゃんのことを・・・だから、許さない」

「え？あ！その、それは、凄く嬉しいのだけど・・・でも、ね、やつぱり・・・」

そんな、甘い？会話に業を煮やしたキュルケは、言葉を強くしながらも、話しかける。

「ねえ、ルイズ・・・その平民・・・強いのか？なんだか、ギーシュに勝つことを前提に話してるみたいだけど・・・」

「う、うるさいわね！当たり前でしょ！スサノオは、凄い神っ・・・じゃなくて、すごい神業を使う東方の騎士なんだから！ギーシュなんか、クシャクシャのポインだから！」

「でも、一応ギーシュもドットメイジ。それなりに『使える』わよ？」

「だから、うるさい！スサノオは誰にも負けないの！負けるわけがない！だって私の！わ、私の、す、素敵な・・・使い魔なんだから・・・」

最後には、真つ赤な顔でキュルケに言い返すルイズを見ながら、ああ、楽しいね〜ここは。そう、強く思ってしまった。そろそろ、あの、ギーシュとやらも、待ちわびているころでしょう。向かうとしますか。

広場に、スサノオ達が到着すると、噂を聞いた全ての生徒達が集まり、事が始まるのを、今か今かと待ちわびていた。

そして、その広場の真ん中では、ギーシュが、大きな声で、皆に宣言をする。

「諸君！決闘だ！」

手に持った薔薇の造花を振り上げると、周りの観衆から、『おおおおおお』と歓声上がる。

「ギーシュが決闘するぞ！相手は、平民の使い魔だ！」

ギーシュの友人達も興奮気味に、周りを煽る。

そんな中、私は、静々と広場の真ん中に到着した。

「よく来たな平民！逃げずに来たことは褒めてやろうじゃないか！それに免じて、ここで、泣いて土下座すれば、許してやらんこともないぞ！」

そんなギーシュの言葉に、また、周りは歓声を上げる。

はぁ・・・なんだか、疲れる空間ですね〜よっぽど、飢えているの  
でしょうね娯楽というものに。  
さて、どうしましょうかね？

「では、始めるとするか！」

余裕の表情で、ギーシュが、薔薇の造花を一振りすると、薔薇の花  
びらが1枚地面に落ち、そこから、1本の槍を持った騎士甲冑姿の  
女型の人形が現れた。

大きさは、人間と同じくらいの大きさだが、土ではなく、硬い金属  
で出来たいるように見えた。

「僕は、『青銅』のギーシュ。この青銅のワルキューレが、君の相  
手をするさ」

「なるほど、では、私の獲物はこれで十分ですね」

私は、懐から、1本の扇子を出し、パツと広げ、パタパタと仰ぎな  
がら、挑発する。

怒気を孕んだ顔で私を睨んでいます。さて、どこまでできるのか、  
魔法使いという輩の実力を見せてもらいましょう。

「いけーワルキューレ！！そいつを串刺しにしまえ！」

その言葉と同時に、素早い動きで、槍を繰り出すワルキューレだっ  
たが、スサノオは、半身をずらしただけで、かわし、その扇子で槍  
を打つ。

その衝撃で、あらぬ方向へ向かされてしまったワルキューレに、ス  
サノオは、すかさず、その肩を打つ。



しかし、人形であるワルキューレに痛みなどはなく、扇子の形に凹まされた肩を、なんでもないとった風に、スサノオへと向き直る。突く！かわす！突く！捌く！突く！打ちつける！そんな、繰り返しを何回か繰り返す様子は、まるで、舞踏のようで、周りの観衆は、黙ってその動きに見とれていた。

しばし、ポカ〜ンとしていた、ギーシュだったが、ブンブンと頭を振り、杖も振る。

そして、新たに産み出した2体のワルキューレを、スサノオの元へ走らせる。

「中々やるようだが、これでどうかな！」

そんな、ギーシュの言葉を鼻で笑うように、新たに加えられたワルキューレの攻撃も、舞うように、避けては打つ！捌いては、打つ！スサノオに、1撃、当てることすらできないことに、焦りだしたギーシュは、残りの魔力を使い、合計7体のワルキューレを繰り出す。それでも、どんなに、連携した動きをさせようとも、スサノオは、余裕の表情で、扇子1本で、全てを捌ききる！

「あれ？どうしたのでしょうか？まさか、これが、名門中の名門、グラモン伯爵家の男、ギーシュ・ド・グラモンの『本気』だなんて言うんじゃないでしょうね？」

捌きながら、全てのワルキューレを往なしながら、まるで、踊りを楽しんでいるかのように、スサノオは、そこにいる全ての、人間に聞こえる大声で問いかける。

ぐぬぬぬぬ・・・そんな声が聞こえてきそうな表情で、睨みつけるも、当のギーシュに残された魔力は少ししか無かった。

ならば、一発、ワルキューレの連携を潜り抜けたその瞬間に、フアイヤーの呪文を叩き込んでやる！

そして、丸焦げになるがいいさ！  
そんな、ギーシュの考えを、笑っているかのようなスサノオの動きを、その隙を見出す瞬間を、密かに待っていた。

7体のワルキューレは一斉に、スサノオへ突きを繰り出したその時！  
飛び上がるように避け、宙に舞うスサノオ！

今だ！その瞬間、ギーシュの杖から火の玉が放たれる！  
定められたその標的に、音速に近いスピードで、グングンと火の玉は迫っていく！

そして、そこにいる誰もが、当たった！と思ったその瞬間！

扇子を開いたスサノオが、まるで、掬うかのようにその火の玉を扇子の上に転がし、ギーシュへ投げ返す！

そして、すでに決まった！と思い込み、ガッツポーズで無防備なギーシュに足元に、それは、着地する！

『ゴオウー！』

足元が燃え、靴が燃え、ギーシュは、その場に転がり、火を消そうと必死になる。

その間に、もういいか・・・と、スサノオは、全てのワルキューレを扇子で両断・粉碎していく。

手加減するのも楽じゃない・・・そうばやいたが、それは、誰の耳にも聞こえない。

全てのワルキューレが、瓦礫になった後、スサノオは、火が消え、ホツとしている、ギーシュの頭に扇子を打ち込む。

『スパーン！』

そして、その衝撃で、仰向けに頭を埋もれさせるギーシュ。

そして、静まり返る広場。

「目を持つものは、開き見よ！耳あるものは、さらに聞け！我は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールの使い魔にして、『仙術魔人』がスサノオなり！東方より呼ばれ出でしこの地にて、真なる心に感銘し、遣えし我は、ここに宣言する！我が主人を蔑む凡俗は、いかなるときでも、我が両断してみせよう！我が、力を侮りし者は、この場にて、現れよ！そして、の力示すがいい！」

響き渡る大音声！

そして、その口上は、そこにいる全ての者に浸透する。  
今まで、目にした光景。

扇子一本で、青銅製の人形を両断・粉碎する豪腕。

ファイアーの魔法を跳ね返した不思議な術。

世間を知らぬ、貴族の子息、令嬢でしかない生徒達に、それに言葉に対する気概はまったくなく、逆に、今までルイズのことを馬鹿にしてきた者たちは、恐れおののいた。

あの力で、裁かれたとしたら？

あの、もの言わぬ瓦礫の仲間入り？

そして、その、『魔人』の目の前で、顔を埋もらせているギーシュの運命は？

**第23話・只今、激裂決闘中（後書き）**

PV80,000越え・・・ありがとうございます。  
感謝感謝です。

第24話：只今、温情感受中

.....

静まりかえり、唾を飲み込む音さえ憚れる様な緊張感が漂う中、扇子で、トントントンと肩を叩きながら、くいくいつと指を曲げ、見えない糸で引つ張りあげる.....かのようなし仕草で、埋もれたギーシュを、空中へ放り投げる。

「イテっ！」

無様に着地したギーシュは混乱していた。記憶があやふやで、気がつくくと、放りだされていた。

そして、さっきの頭に直接入ってくるかのような口上.....

そして、自分の目の前にいる、センジュツマジンという人種？

ついさっきまで、食堂にいた平民と同一人物なのか？

『スサノオ』といったこの男が放つ.....重厚なオーラはなんだ？

身体の芯が震えるこの現象は？

僕は、何を見ていた？何を聞いていた？判らない.....そしてどうなってしまうのかも。

「さて、ギーシュ・ド・グラモン！其の方が、侮辱し言動！ならびに立ち振る舞い！万死に値す！よって、このスサノオ自ら、この場で！その首.....引き離してくれよう！」

扇子で首を切るジェスチャーをしながら、凍てつく眼光でギーシュを睨むスサノオ。

ギーシュの命運ここに尽きたか！

その場に居合わせた、誰もが思った・・・しかし！そこに飛び出す  
2つの影！

「「待つてください！！」」

そこには、モンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モン  
モランシ と、ケティ・ド・ラ・ロッタ、二人の少女が立っていた。  
二人は、お互いを目配せし、頷き、そして、スサノオの向き直る。

「お願いです！ギーシュを、ギーシュを助けて下さい！」

「私からもお願いします！ギーシュ様を助けて下さい！」

おお、可愛い女の子が二人も？中々このギーシュモテモテじゃんね  
？命のせめぎあいに飛び出してくるなんて、中々できないよ？ま、  
世間知らずっていうこともあるけどね。

さて、どうしようかなあゝ別に命を取るつもりはないんだけどね。  
でも、ここで、しっかり釘をさしておかねば、この場にいる全員に  
ね！

「ふっ、笑止！敗者には死を！それが決闘に定め！力無き者の言葉  
など聞くに堪えん！」

チヨッピリの殺気と大音声に、女の子達はもう、ガクガクのブルブ  
ルですね。

ここで、1歩踏み出せるなら、本物なんですけどね？

「然るに、この者・・・そなた達が庇い立てするに値する男とは・・・  
・思えぬしな！」

もう少し、込めました殺気。

さあ、どうする？踏み出すか・・・下がるか！君達の選択によって、運命は変わる・・・かもよ？

「え、えつと！その、ギーシュは、馬鹿なところも多いけど、優しいところもあるんです！」

「あ、あの、ギーシュ様は、すぐ調子にのる方ですが、いいところもあるんです！」

お！踏み込んで着ましたか・・・愛されてますね？多分・・・しかし、愛を囁くのは簡単ですが、維持するのは難しいんですよ？このギーシュが、この二股をどういう形に落ち着けるか・・・興味が湧きますね。さて、もう一押し・・・いきますか・・・

「ならば力を我に示せ！その命かけられるならば！首の1つが3つに増えたとして、なんら変わらぬ！女子おはこに庇われて、それで貴族の誇りが守れるのかな？フッフ・・・ハハハハっ・・・」

さて、ギーシュ・ド・グラモン・・・その矜持と魂の輝きは、偽者か否か・・・私に認めさせてみる！

「ま、待て！その子達には関係ないだろ！決闘は、僕とお前だけのことだ！首を刎ねたければ、僕のだけにしろ！」

ギーシュは、持ちうる勇氣と誇りの全てを、立ち上がることで、言葉を吐き出すことに使い切った。

内心は、超ガクガクのブルブル。本気で怒った領国の父や兄たちから、こんなプレッシャーを受けたことなどない。

ここで死んでしまうのはイヤだけど、あの子達を巻き込むわけにはいかない！それに、嬉しいけど、女の子に庇われて、生き延びるの

も誇り高き貴族としてはどうなんだ！

『命を惜しむな、名を惜しめ』がグラモン家の家訓！ここは潔く散るう……だが、死ぬというのは、どうなんだろつか……僕は、僕は……

「ふふふ、もとより、そのつもりだ、似非貴族！己が妄想に抱かれて、溺死しろ！」

「なに！僕のドコが似非貴族だというんだ！」

「言われねば判らぬとは、やはり、知性も矜持も誇りも、ペラペラのウスウスか！そんな中身しか持たぬ輩が、貴族とは片腹いたいわ！いいか！よく聞け！メイジだから貴族？親が爵位を持っているから貴族？否！断じて否！尊い行いにより、敬われ、慕われ、また、そのもの達を守り、慈しむ、またそのために努力を怠らず、力を惜しまず、また、時には英断し、最良の選択を選ばねばならぬ者！それが貴族！貴人に連なる一族のことよ！その、眩しいばかりの魂の輝きに、皆、頭を垂れるものよ！そなたは、今まで、そうであったか？贅沢の意味を！平民と蔑むものたちの本当の価値を！おのれの真なる使命を！考えたことがあったであろうか？ただ快樂のためだけに、己の自己満足のためだけに、その力を使い、蔑み、妬み、搾取し、押し通す！そんな、愚かな生き物が貴族の全てであったなら！我は、滅ぼさねばなるまいて、貴族の皮を平気で被る蛮族をな！」

そのスサノオの言葉を聴き、反論できるものはこの場にはいなかった。

自分は違つ！無礼な奴め！そう、思っただけだ！

なぜなら、そのことを口に出せば、ギーシュと共に首を切られることが明白であるから。

己の命と誇りを天秤にかけるものの、自分の命がなによりも惜しい。



・・そう考える者達ばかりであった。

そして、その行動そのものが、スサノオがいう似非貴族に当てはまることに、誰1人気づかない。

そして、スサノオの言葉に、素直に感銘を受けるものも少なからずいた・・・が、今までの自分の生き様を照らし合わせそれが、言い訳できないものであったから・・・だから、言葉を出せない。

「さて、これで、わかったであろう！では、さらばだ・・・」

振り上げた腕を見て、ギーシュの命・・・今度こそ、ここに尽きたり！本人も含め・・・そう思った。そして、もうどうでもいいや、切っちゃうか・・・とスサノオもちよっぴり思ったそのとき！

「待ちなさい！」

大きく叫び、観衆の中より飛び出したのは、この場を支配し、命の手綱を握るスサノオの主人・・・

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールであった。

ツカツカと広場中央へ向け、歩みを続けるルイズに、この場にいる全ての視線が集まる。

スサノオも、振り上げた腕をそのままにし、固まっている。

ギーシュも、モンモランシー、ケティーも震えながらも、その動向に注目する。

「待ちなさい、スサノオ！その首、切ることはありません！」

広場中心に到着したルイズは、辛うじて立っているギーシュを指差し、スサノオへ命令する。

その言葉を聞き、振り上げた腕を一旦下ろすが、細めた眼光は、そのままだ。

「いかな御主人の言葉とて、聞けぬときもありましょう！もし！それでも聞けと御命じであれば、その理由を聞かねばなりませんまい」

スサノオ VS ルイズ そんな構図が、広場中心にて展開されていた。

お互いが睨みあい、1歩も引かぬ！そんなオーラがこの場に充満している。

スサノオは、扇子を。

ルイズは、杖を。

互いに向け合い、握り締めていた。

「スサノオ！確かに、ギーシュは私のことを馬鹿にした。そして、あなたのことも。決闘と言い出したのもギーシュだわ。でも、そこに、命のやり取りは、やりすぎよ！だから、引きなさい！」

自らの杖をスサノオに向け、強く大きくその言葉は、響き渡った。助かるのか？ギーシュは、突然現れた救世主を眩しそうに見る……

「聞けませんな！ご主人の穢れ無き魂を、少しでも曇らせた罪！まだ、こやつは償っておりませんゆえ、その命で償わせます。」

「私への想いが、そうさせているならば！この騒ぎ、私に治めさせなさい！」

お互い譲らず、にらみ合う……

ふふふ、ルイズちゃん……かつこいいじゃん。どうせ、ナンちゃんアドバイスしてるんだろうけど、それでも、ここまでやるとはね？ちよっち、惚れちゃうかも？なんて……ふふふ。

そして、ルイズも・・・  
ふふふ、スサノオ・・・恐れけど、大丈夫なのよね？南天が私の懐  
で、アドバイスしてくれているけど、切れて、大暴れしないわよね  
？でも、真剣な目つきで私を見るスサノオ・・・ちよつとカッコい  
いかも・・・ここは、いいとこ見せないかね！

「ギーシュ!!」  
「はいっ！」

数刻の沈黙が過ぎ、更に1歩踏み出し、ルイズは、大声で告げる。  
突然呼ばれたことで、焦りながらも、返事を返すギーシュだが・・・

「謝りなさい！私とそして、スサノオに！ついでに、そこにいる、  
あんたの元彼女たちにもね！そうすれば・・・私が、許してあげる  
わ！あんたの命・・・助けてあげる」

その言葉を聞き、ギーシュは、助かるの？ねえ、助かるの？とキョ  
ロキョロしていたが、ルイズに向き直り、頭を下げ、謝罪の言葉を  
述べる。

「すまなかつた・・・この通りだ。ルイズ・・・スサノオ殿。君達  
を侮辱して本当にすまなかつた。そして、モンモランシー、ケティ  
ー二人にも・・・本当にすまなかつた。そして、ありがとう。」

「べ、別にあんたのことなんて、どうでもよかつたんだけど！私が  
原因で自棄になつていたんじゃないかと思つて・・・それだけよ！  
勘違いしないでね！」

ギーシュの謝罪に、ツンケンとしながら、モンモランシーは答える。  
「が、それはどう見ても、あれだ、その、ツン・・・くうく羨ましいiiiiii・・・いや、大丈夫、近くで見られてだけでもOKさ！  
さて、そろそろ、まとめますか。」

「ギーシュ・ド・グラモン！我主人の命により、許しがた以上！  
我が不満を言うは無粋というもの。努々感謝するがいい！我主人の、  
天よりも高く、海よりも深く、輝きを放ち続けるであろうその、高  
潔な魂に！・・・ただあああああし！次はない」

ピシッと扇子をギーシュに向け、言い切ったあと、ルイズと共に、  
去っていくスサノオ。まるで、地が割れるかのように、観衆が道を  
作る。

颯爽とそこを通り去る背中を見て、やっと、自分が助かったことを  
実感する・・・と同時に、力なくその場にへたりこむギーシュ。  
見送る背中へ、とてつもなく大きく感じられた。

第24話：只今、温情感受中（後書き）

ちよつち、バテきたかも・・・  
年末は、オトナシク・・・  
すみません。

第25話：只今、密事進行中

・・・

ギーシュとの決闘騒ぎから、数日。

瞬く間に、『スサノオ』という単語が恐怖の象徴になり、また、その恐怖の元凶を従えるルイズもまた、恐怖の対象となっていた。

そして、もう学院の生徒にルイズのことを、面と向かって『ゼロ』呼ばわりするものはおらず、本人達は、すこぶるご機嫌な日々を過ごしていた。

「ねえ、タバサ・・・あなた、あの、ルイズの使い魔・・・スサノオ様をどう思う?」

読書に勤しむタバサの部屋に押しかけ、お茶を飲みながら、キュルケは、その反応を待っていた。

少し、考えをまとめるような仕草をしながらも、本から目を離さずに短く答える。

「変。そして、強い」

「そうよね！ギーシュのゴーレム7体を、掠らせず、踊るかのよう  
に捌く技量！強いなんてものじゃないわ！そう・・・なんていうか・・・  
そうよ！そう！凄く強い！」

興奮気味のキュルケは、あのとときの光景を脳内メモリーから投射し、  
現実を離れる。

暫くして、意識が戻ってきた時、その胸にうちに輝く熱い炎がさらに大きく燃え上がるのを強く感じた。

ああ、この感じ！これは、まさに恋！それも、今だかつてない超ド級の恋の予感！

私のこの想い・・・必ず捉えてみせるわ！

そんな感じで、1人盛り上がるキュルケを、またか・・・と心の中で溜息をつくタバサ。

はあ・・・どうしよかしら・・・スサノオが暴れたおかげで、『ゼ口』といわれることはなくなっただわ。それは、嬉しいことなただけど・・・かわりに、『魔人使い』『魔主人』なんて呼ばれているらしいし・・・なんだか、よくわからない二つ名・・・いったい誰がつけるのかしら・・・まったく！

こんなに清楚で、おしとやかで、かわいらしい女の子に・・・『魔主人』は無いんじゃないかしら！

それに、スサノオは神様なのに・・・まあ、あの『仙術魔人』というのも、結局自分で決めていたし、いいんだけどね。別段、私が口を挿むことでもないしね。

とにかく、今回のことも含めて、スサノオに・・・な、なにか、ご褒美あげないと！

私は一応、スサノオの・・・ご主人様なわけだし、働きに対しては、報いるところがなかなければいけないと思うの！

でも・・・なにがいいかしら・・・神様だし・・・ね？

ルイズが、あれこれ思いを膨らましながら、自分の部屋に戻ってみると、ドア越しに、スサノオの声が聞こえてくる。ルイズは、思わず、扉に耳をあてるが・・・

「ナンちゃん……私ね……もう、我慢できないよ……もう、限界……これ以上は……」

え！何？どういうこと！？

まさか、ここにいることが嫌になったの？

それとも、この貴族社会に我慢できないとか！？

「その、やっぱり、欲しいんだ……身体が……求めちゃって……その、だから……いいでしょ？」

ええええええ！？ま、まさか！もしかして！あ、あれのこと！？

「いや、待てスー……もう少し我慢できないのか？あまり、おおつぴらにはできないだろ？」

「うん、わかってる……でも、欲しいんだ……ナンちゃん、お願いだよ」

う、うそ！本当に？そうだったわ……そういえば、あの日依頼ずっと白蛇の姿だったし、だから忘れていたけど、南天は、女の人で……私より……いいスタイルしてたけど……

「わ、わかった、だから、そんな切なそうな目をするな！だが、ここでか？流石に、この部屋ではまずいとオレは思うんだが？」

「そうだね、こんなことでルイズの部屋を汚したくないし……場所、変えようか？」

あ、あああああ、やっぱり……その、スサノオも男の子？だし、その、私と一緒のベットに寝てるけど、時々、抱きついて寝ちゃったりしてるけど……その、なんていうか、求められたり、触られたりってなかったから、その、そんなものなのかな？って思



つてたけど・・・違うんだ・・・やっぱり、その、我慢していたんだわ！ああ、なんてことなの！私、ちつとも、気づいてあげられなかった・・・言ってくれれば・・・その、あの、少しくらいは、許してあげるに・・・

そうよ！そうよね！やっぱり、ご、ご褒美に・・・少しくらいは・・・いいわよね？

ご褒美だもん、そう、だから、その、言おう！我慢しなくても・・・私が受け止めてあげると！

きやああああ・・・って、言えるかしら私。

いや！言うのよルイズ！あなたは、ご主人様なんですから！

そう、メイジと使い魔は一心同体・・・いや、そんな、は、恥づかしいわ・・・一心同体だなんて・・・まだ、その、『好き』って言われてもないし、言ってもないけど・・・いやいや、そうじゃない！スサノオの・・・その、身体の負担を軽くしてあげるのも、ご主人様の務めなわけで・・・だから、その、スサノオにだけ、特別よ？特別になんだから！だから、感謝しなさいよ？

そして、優しくして・・・ね？

そんなルイズを他所に、ドアが開く・・・が、ルイズは何故か咄嗟に、隠れてしまい・・・

その隙に、スサノオと南天は、部屋から出て行く。

ルイズは、二人を追いかける為に、後ろから、後をつけだした。

どこに行く気なのかしら？

私の部屋以外で、自由に入れる場所なんてないはずなのに・・・いや、スサノオ達は神様だもの、もしかすると、どこか秘密の場所とか作ってたりするかもね。

そんな想像を展開している間に、気がつくと、スサノオ達は、食堂へと入っていく。

あ、あそこで・・・し、しちゃうのかしら！？

なんてこと、どうしたらいいの？

ここは、そう！私が、突入して、『南天ではなく、私にしなさい！』  
って言えばいいのかしら・・・

そ、そうよね、それしかないわ・・・いい、ルイズ・・・覚悟を決めるのよ！

では、1、2の3！

掛け声を共に、扉を開き、食堂へ突入するルイズ。

しかし、そこに人影はなく、シーンと静まり返っていた。

あれ？確かにここに入ったはずなのに・・・

すると、さらに奥の厨房の方から、カチャカチャと音がし始めた。

あ、あんなところで？い、行かなきゃ！急がなきゃ！

『バンっ！』勢いよく扉開けたルイズは叫んだ！！

「ちょっと待った！スサノオ！どうせするなら、私にしなさい！」

そして、開いた扉の先では、女の人の姿になっている南天と、妙にウキウキしているスサノオが・・・

手を止めて・・・固まっていました。

「そ、それで、あなたたちは・・・ここで、何をしようとしていたのかしら？」

互いの温度差に、少しくドキドキしながら、ルイズは、スサノオにキチンと聞いてみることにした。

やはり、話し合いをちゃんとしないと、お互いの気持ちや考えがわからないから・・・

だって、部屋では、とっても、切なそうな声だったし・・・

「いや、単純に欲しいものがあつたから・・・ここにきたんだけど

「それよりも、ルイズは何故ここに？」

「え？い、いやだわ・・・べ、べつに、たいした用事はないのだけど・・・そ、その、あんた達がココに入るのが見えたから、その、つまみ食いでもしてるのかと思って・・・」

真つ赤になりながら、身振り手振りで説明するルイズがとても可愛らしくて、『そうなんだ・・・』と納得してしまうスサノオと南天だった。

「それで、ほ、欲しいものって・・・なんなの？別に・・・私に言えば、いろいろとしてあげるのに・・・」

「いや、そういうわけにもいかないんだ・・・」

「え？」

「ルイズ・・・すまん、別に隠していたわけではないのだが・・・スーは・・・その、時折発作的に求めてしまうのでな・・・それで、なんだ・・・それを満たしに・・・というわけだ」

「え？発作的って・・・それに、み、満たすって!？」

「ルイズ・・・ごめんね。黙っていたけど・・・私には、いや、男には、発作的に求めてしまうものなんですよ！特に、私の場合はね・・・強く求めてしまう傾向があるみたいで・・・」

「あああああ、ああ、そうなんだ?!その、やっぱり、それって、ツライのかしら?」

「ええ・・・身体がね・・・求めるんです！すみませんね、ルイズ・・・」

「いいのよ・・・私にはよく判らないけど、男の人って、そうゆうものだって、ちい姉さまも言ってたし・・・だから、我慢できなくなったら・・・わ、私にいいなさい！それでも、一応、あなたのご主人様なん・・・だ・・・し・・・ね？」

「ありがとうございます・・・ルイズ。じゃあ・・・ここで、さっそくやつちやいますか」

「え?!あ!ああ。わ、わかつたわ、でもね、その、私・・・初めてだから・・・だから、優しく・・・その、教えて欲しいの・・・いいかしら?」

「もちろんですよ、ルイズ!ちゃんと、最初から、優しく教えますから・・・だから、大丈夫ですよ」

「そ、そう、なら、お願いしようかしら・・・でも、私の部屋でも・・・いいのよ?」

「いえ、汚してしまうのも気になりますし、だから、ここでいいのですよ」

「ごめんなさい・・・私、やっぱり、変だわ、自分から言い出したことなのに・・・でも、それでも、これは・・・いったい?」

ルイズは、スサノオが懐から取り出した、エプロンの着衣を言い渡され、もちろん、南天もつけてるんだけど・・・この、メイドエプ

ロン・・・可愛い！でも、こんなを着けて・・・その、するのがいいのかしら？よくわからにのだけど？

「はい、ちゃんと、エプロンつけましたね？では、始めます！」

いきなり、ルイズちゃんがやってきたのにはビックリしましたが・・・仕方ありませんね、これもまた運命なのかもしれません。

私も、もう、これ以上は我慢できそうにありませんしね、本当は、あまり、よくないこと・・・なんでしようけど、ここは勢いで！え？何？大丈夫ですよ・・・私、コウ見えても、教えるのは上手なんです。ナンちゃんにも、キチンと手ほどきしてありますしね。どちらかというと、もう、ナンちゃんのほうが上手なくらいで・・・私は、見ているだけ、出来上がってしまうこともあるくらいですな。ふう・・・もう、堪りません！この香り・・・ルイズちゃんも、不器用なりに頑張ってくれているので、そろそろ・・・

「はい！出来たぜー！」

「おおおお！私は、また、神の奇跡を目の前に行っている！この香り！そして揺れ具合！形も最高ですよ！ああ、ナンちゃん・・・あなたやはり最高にいい子ですね」

「ばかつ！褒めすぎ！それに、ここに来る前は、毎日見てただろ？ま、久々だから、仕方ないか・・・」

出来ました！出来ましたよ！

え？見えない？何言っているんですか？

ほら、良く見てくださいよ、このナンちゃんの胸元！

この添えている手にあるのは、まさに至高の芸術品！

そう、これぞ、神が神の為に作り出された、美の結晶・・・

「プリンです!!」

「へっ? な、なに? それ!」

驚いていますね・・・ルイズちゃんは初めて見るのでしょうか。

本当は、異世界に異文化を持ち込むことは、よくないことなんです  
が・・・

今回は仕方ありませんよね? だって、私の『プリンカ』<sup>しゅく</sup>が、もう底  
をつきそうで・・・

もう、夢の中でも、プリン! プリン! と体が求めて止まなかったの  
ですから。

まあ大人の事情というわけで、大目に見てくれると・・・いいな。

第25話：只今、密事進行中（後書き）

PV90、000越え・・・感謝感謝です。

本当にありがとうございます。

また、感想もいただき、またも感謝です。

頑張ります・・・物語は、全然前進しませんが。

あはは

第26話：只今、外出準備中

・・・

凄い！凄いわ！

こんなものが、世の中にあつたなんて！

ルイズは、南天と共に作った『プリン』というなの不思議な食べの  
もに舌鼓を打ちながら、確かにこの美味しさなら・・・禁断症状が  
でてしまうのも、納得だわ

そんな思いを抱きながら、その横で、『うまうま』と幸せそうに、  
プリンを食べるスサノオを見て、可愛いかも・・・と、顔を赤らめ  
た。

「ふゝ満足！満足ですよ！ナンちゃんありがとう！そして、ルイズ  
もお手伝いご苦労様。超満たされましたよゝふふふ」

凄くご機嫌なスサノオの横で、白蛇に戻った？南天も、なんだか誇  
らしげな、恥ずかしげな、そんな風に見えておかしかった。

ルイズは、少し、過剰な妄想に走ったことを反省しつつ、言わなけ  
ればと、口を開いた。

「ねえ、スサノオ？あなた、何か、欲しいものはないの？なんだか  
私ばかり・・・その、嬉しいことしてもらってるから、私も、スサ  
ノオに何かしてあげたいのよ・・・」

おや？なんだか嬉しいことを言ってくれてますね・・・でも、今は、  
そうねゝプリンな幸せで胸が一杯ですし・・・取り立てて、何か・  
・といってもね？



でも、それではルイズの自尊心は満足しないでしょうから……  
ふむ、そうですね。あまり負担にならない程度で、何かしてもらい  
ましょうか。

「ありがとう、ルイズ。その気持ちだけで、私は満足ですが……  
それでは、少しお願いしてもいいですか？」

「ええ、なんでも言っただい！私にできることなら……そ  
の、あれや、こんなこととかも、もちろん大丈夫よ。ちゃんと心の  
準備はできているから……」

赤い顔で、スサノオを見ながら、ルイズは、胸の中で高まるドキド  
キを抑えるので精一杯であったが。

それでも、スサノオが何を望むのか、聞き逃さぬよう、キチンとス  
サノオの目を見続ける。

「そうですね、今、私が望むことは……2つ。1つは、この国で  
しか食べられない美味しいお菓子を教えて欲しいこと。もうひとつ  
は、この国の、武器を1つ欲しいところですね」

え？そんなことでいいの？それなら、簡単だし、全然負担にもなら  
ないけど……

本当にそれだけでいいのかしら？でも、まあ、スサノオがそう言う  
んじゃ仕方ないわね。

「スー、菓子はいいとして、武器は持つてるだろ？」

「ははは、もちろん。しかし、私のは威力がありすぎる。それに、  
異文化の武器を振り回すと、目立ちますしね、よからぬ人に興味を  
持たれても困りますから、そういう意味も込めて、というわけです」

なるほど、神様の武器は強力すぎるというわけね。手加減が難しいということかしら？

まあ、それなら、今度の虚無の日に、街へ繰り出しましょうか・・・そんな計画を立てつつ、ルイズは、スサノオと南天、3人で、過すこの時間がとても幸せなものに感じていた。

そして、やってきた虚無の日・・・

「スサノオ、今日は、出かけるわよ！」

そんな、ルイズに、寝ぼけ眼のピントを合わせるスサノオ・・・ありや、今日は、お休みだから、ゴロゴロ・・・と思っていたのだけど、ルイズ・・・いつになく早起きだね・・・いつも、こんな風に早起きしてくれればいいのに。

でも、なんだか、おめかししてるし、私も、ささっと準備をしますか・・・。

「はいはい、判りましたよルイズ。そんなに急かさなくても大丈夫でしょ？」

まあ、スサノオの言うとおり、そんなに急がなくても平気だけど、なんだか・・・とてもドキドキして眠れなかったんだもん。べ、べつに、スサノオと、買い物に行くことに、ドキドキしてるわけじゃないんだから！でも、ちゃんと、新しい下着はつけてるし、も、もし、その、あんなことを求められても、一応準備はOK・・・え？だ、だって、その、どうなるか判らないじゃない？ちい姉さまも、男の人とお出かけするときは、心構えが大切だ！って言っていたし・・・

何故か、鏡の前で、モジモジ・・・クネクネしだしたルイズを、生暖かい目で見ながら、どこに出かけるのかな・・・と、スサノオは、声を掛けられずに佇んでいた。

その頃、キュルケは、布団の中で、ぼんやりと目覚めた。

ああ、朝なのね・・・そうだわ、今日は、虚無の日・・・

お休みだし、もう少し寝ようかしら・・・

はっ！ダメダメ！さっさと起きて、準備しなくちゃ！

今日は、スサノオ様をデートに誘おうと思っていたんだわ！

本当は、昨日までに約束を取り付けようと、あの手、この手で近づくのだけど・・・

ルイズがべったり張り付いて、話をちゃんとさせてくれないし・・・だから、今日は、部屋に直接行って、拉致・・・じゃなかった、確保・・・いや、捕縛・・・

まあ、なんとか誘い出して、街に繰り出しましょう。

さあ、そうと決まれば、おしゃれおしゃれっと。

そう、1人で呟くと、少し？胸を強調するような、ちよっぴり大人びた服を選び、薄く化粧を始める。

ふふふ・・・今日こそは、必ず、あの方を落としてみせる！

この、恋の狩人、微熱のキュルケの名に賭けて！

しかし、無常にも、準備を終えたキュルケを待っていたのは、無言のドアと、無人の部屋だった。

そして、窓の外に、ルイズと連れ立って歩く、スサノオの姿を見つめる。

恐るべし・・・狩人の目！

「な、なんてこと！ルイズに負けてはいられないわ！追いかけてく

「ちや！」

キュルケが向かったのは、馬小屋ではなく、親友の部屋。

『コンコン』とノックをしても、返事はない。

それはいつものこと。

彼女は、いつも、サイレントの魔法を部屋にかけ、読書を堪能するのが趣味なのだ。

だから、遠慮なく、ドアを開ける。そして、やはり、読書に熱中している親友の姿も目にし、安心する。

「タバサ、お出かけするわよ！早く仕度をしてちょうだい！」

「今日は、虚無の日……」

クールに『読書の邪魔をするな』を体現するタバサだったが、キュルケが言いだしたら引かないことも知っている。

しかし、今日は、虚無の日、誰に邪魔されることなく読書を楽しむ日なのだ。

本はいい……現実とは違う自分だけの世界に浸れるから。

だから、休みの日は、朝から寝るまで、物語の世界に入り込む。

それが、タバサの休日の過ごし方……

基本、タバサは、他人のことなどどうでもいい、どちらかというと、自分以外は、居なくてもいい……そう思われても仕方が無いほど、他人に対して壁を作ってきた。

そう、これ以上、自分の大切なナニかを奪われないように……

そう、これ以上、自分が大切と思えるモノを作らないように……

しかし、この、微熱のキュルケは、そんなことお構いなしに、構ってくる。

そして、『親友』と呼んでくれる。

友達のいなかったタバサには、どこか眩しくその姿が映った……だから、一緒にいる。別に理由はない。ただ、それだけだ。

そんな、キュルケがやってきたのだ。  
やれやれ・・・何故、ここに誘いにきたのか、理由を聞かねば。  
そんな目で、キュルケを見るが・・・

「わかつているわよ！でもね、恋なの！いい？ココ重要！それは全  
てにおいて優先されるべきことなの！だから、今日は、その恋を追  
いかけるの！」

「全然・・・わからない」

「もおおおお、ちゃんと説明してるのに！いい？その恋を刈り獲  
るために、あなたの協力があるのよ！というわけで、追いかけない  
といけないの！だから、あなたの使い魔で追いかけて欲しいのよ！」

聞いていて、全然わからないが、自分の使い魔を使い、目的を追い  
かけたいということか・・・  
はあくというタバサの溜息は、キュルケには聞こえないようだ。

ルイズ達が、馬小屋へ行くと、そこにいる、全ての馬と、そこを根  
城にしている全ての使い魔たちが、頭を垂れる。

その光景に、ルイズは、息を呑む。

誰も、何も、言葉を出すことが出来ない不思議な光景。

そして、その中を1人歩き続ける存在・・・それはスサノオ。

その中心で、スサノオは皆に声をかける・・・

「今日は、街まで出かけることになった。皆の中で、安定して、な  
おかつスピーディーに3人を運べる元気な奴はいるかい？」

その言葉を聞いた、馬や使い魔たちは、『私が！私が！』と  
いつているかのような仕草で首を振り出し、鳴き声を聞かせる。  
ルイズには、動物の言葉はわからない・・・でも、今なら・・・聞  
こえるような、そんな気がした。

第26話：只今、外出準備中（後書き）

あけましておめでとうございませう。

2010年も、どうぞ宜しくです。

総合PV100、000越え感謝です。  
ビックリです。

あ、がんばろう・・・

## 第27話：只今、城下散策中

・・・

『親友』と呼んでくれる彼女が、自分にしか解決できないことを持ち込んだ。

タバサは、仕方ない・・・と部屋の窓を開け、ピューっと甲高い口笛を吹く。

すると、しばらくして、使い魔である風竜が、窓の外によってくるのが見えた。

タバサとキュルケは、窓に足をかけ、風竜の背中に飛び降りる・・・

「いつ見ても、あなたのシルフィードには惚れ惚れするわ・・・」

そんなキュルケの褒め言葉を耳にしながら、タバサは、自分の使い魔である風竜：シルフィードに、念話で文句を言いながら、杖で頭を叩く。

『来るのがいつもより遅い』

『イタっ！しかたないのね！神様に選ばれたくて、最後まで粘っていたのね！』

この風竜、ただの竜ではなく、大精霊の祝福を受けた知恵ある竜、古代竜の流れを汲む韻竜と呼ばれる種族で、人との会話が可能であった。しかし、タバサはそのことを隠匿し、念話のみで会話をすることと決めてあった。

『神様って、何？』

『もう、お姉さまは、何も知らないのね！神様は、神様なのね！』

『もういい、静かにしてて』

再び、杖で、シルフィードの頭をポカリっと叩くと、キュルケに意識を向ける。



「どこに迎えばいいの？」

「あ！わからないわ・・・慌てていたから、でも、そうね、多分、城下に向かったと思うわ！私の勘がそう言っている！」

そんなキュルケに文句を言うでもなく、タバサは、シルフィードに命令する。

「馬・・・1頭、もしくは2頭。食べちゃダメ」

馬を巧みに操るスサノオの背中にしがみつきながら、ルイズは至福のひと時を味わっていた。

ああ、スサノオの背中・・・暖かい。それに、広いのね・・・ふふふ・・・

そう思いながら、しがみつく腕に力を込める。ああ、これはいいかも・・・

しかし、二人も乗せて、こんなに走るなんて、この馬凄いわね。

本当なら、2頭に分かれて行くところなのに・・・なんだか、凄く張り切ってるし、やっぱり竜じゃなくて、自分が選ばれたことに、喜んでいいのかしら？目の輝きが違ったし・・・

ルイズは、馬小屋で、タバサの風竜の、『乗って！乗って！』という幻聴を聞きながら、流石に『他人の使い魔を足にするのは拙い』とスサノオに忠告した結果、この馬を選んだのだ。

トリステインの中心である、その城下町に、いつもより早くたどり着いたことに、驚くルイズであったが、そのぶん馬もずいぶん疲れ

ているようだった。

場外に馬を預け、門をくぐると、そこはかなりの賑わいを見せる大通りとなっていた。

ルイズが、『掏られないようにしてね』といいながら、スサノオに財布を預けながら、その腕にしがみつく。

ああ、ルイズちゃん大胆ですね？ふふふ、しかし、悲しいかな、その、当てようと意志とは裏腹なそれは、もう少し成長が欲しいところですね……。

でも、そこは、それ、今という時間を楽しまなければ。

そう思いながら、辺りキョロキョロと、もの珍しそうにし、ルイズに、あれは何だ？これはどう使うのか？と楽しそうのやり取りをする二人が歩く通りの両側では、果物、野菜、魚、肉、花、雑貨、宝飾品など、色んな掛け声や、呼び声でお客を誘う露天商たちの賑やかな喧騒で溢れていた。

そして、もちろんそんな、浮いている二人の懐を狙う不埒な輩もいるわけで、素人では気づくこともない早業で、スサノオの懐に忍び込ませる……

しかし、残念なことに、その懐には、ちゃっかり南天が気を張っており、忍び込むその手には毒の牙をプレゼントしていく。

痛みで手を引いた、その数秒後、昏倒し道に転がる男達は、かなりの数に上ったが、ルイズは全く気づくことはなかった。

そんな中、ルイズ達を遠巻きに尾行する二人組み。

タバサとキュルケは、道に転がる男達を見ながら、その目に見えない早業で、何かをしているのであろうと思っていた。

「さ、流石、スサノオ様は凄いわね！よくわからないけど」

「へん、そして、邪魔」

そして、ルイズ達が、狭い路地の先を、さらに曲がったことを確認し、再び追いかけ始める。

随分と、裏道に詳しいルイズに、半ば感心し、半ば不思議に思いながら、一定距離をとりながら、尾行する二人。

ルイズ達が最終的に入っていったのは、武器屋だった……。

『カラ〜ン』扉を開けると、取り付けられたベルが鳴り、お客の入店を知らせる仕組みだ。

その音を聞きつけ、カウンターの奥から、店主らしき髭面の親爺がのっそり出てくる。

パイプを啜えながら出てきた親爺は、胡散臭そうに、ルイズ達を一瞥し、そのマントに描かれている貴族の証、家門と五芒星に気づく。

「すみません、貴族様、うちはね、まっとうな商売してますぜ。お上に目を付けられるようなことは、一切ありませんや」

「客よ！」

その言葉に、芝居がかったような驚きをみせ、そして、カモが来たかのように、媚びる様な目付きで話し出す。

「最近は、物騒ですからね……しかし、貴族様が剣を持つとは、驚きますな」

「私じゃないわ……この方の、望む武器を都合してちょうだい」

スサノオに顔を向け、なんでも好きなものを選ぶといいわ……そういうが、スサノオは、1本の直剣をじーっと睨んでいた。

そして、懐から顔を出した南天も、じーっとその剣を見つめている。

暫し、剣との睨み合い？が続いた後、やれやれといった風に、剣へ向け話し出す南天。

「8000年ほど姿を見ないと思ったら、こんなところに括られていたのか、対向剣<sup>ツムカリ</sup>」

いくらなんでも、剣が喋るわけないじゃない・・・ルイズが思っている、カウンターから親爺が声を飛ばす。

「おい、デリフ！いつもなら、口やかましいお前が、なに黙ってるんだ！」

「やかましいですね親爺さん！私にも色々と事情があるのですよ！」  
え？なに？今、剣から声？が聞こえた！驚くルイズに、カウンターの親爺は解説するかのよう、話し出す。

「その剣は、デルフリンガー。インテリジェンスソードでさあ・・・いつもは、やれ腕がないだの、身の程知らずだのって、手に取る客に文句ばかり言いやがるおしゃべりなダメ剣でさあ」

その言葉に、反応するかのよう、またも、剣から声が聞こえる。

「うるさい！たかが剣と思うなかれ！剣にも使い手を選ぶ権利くらいはあるのですよ！」

いったいどこから声がでているのだろうか？そんな、疑問を頭に出しながら、ルイズもデルフリンガーと呼ばれた剣をじつと見る。

「で？オレが話しかけているのに、姿を見せないとは、いつの間にか、礼儀を忘れちゃったようだな？なんなら、ここで封神<sup>ホウシン</sup>かまそう

か？」

「あいや！またれよ！こんな異世界で、お会いするとは思いがけず、安心しておりました！」

誰がうまいこと言えといったか！と剣を殴りつけるスサノオの拳を受けると、剣の柄から、小さな精霊のような、髪を頭の上で1つに束ねた男の姿が、ちょこんと浮かび上がる。

『な、なにコレ！剣からなんか出てきた！』そう、声に出せない驚きの表情で事態を見つめる、ルイズ……

「ごほんっ、久方ぶりでござりますな、コクリュウガン黒龍眼殿ヤスに八頭殿、かれこれ、8000年ぶりといったところでしょうか」

ちよん鬚頭の、小さな侍が、両手を合わせながら、頭を下げる。

「相変わらずお二人一緒とは、仲がよろしいですな」

「うん、ひさしぶりだね。まあ、私とナンちゃんは、仲良しだからね」

剣と普通に会話するスサノオに、驚きながらも、カタカタと人形に様な動きで、指で示しながら、その正体を問う。

「ス、スサノオ……それ……なに？」

ねえ？お化け？お化けなの？それとも、悪魔？悪魔！？

そんなルイズに、ウインクしながら、『それは、また後でね』と念話を飛ばす。

そして、『この剣を買いましょう。』とカウンターへ持っていくスサノオ。

そ、そんな変な剣・・・本当に買うの？そっいいながら、親爺に言われた金額をカウンターへ広げて、値段の交渉を始める。  
当のデルフリンガーも、『親爺、世話になった、達者でな』と声を出したきり黙りこむ。

「ちょっと待った！剣を買うなら、私がプレゼントするわ！」

そこに、尾行に疲れた二人組みが、武器屋に乱入する。

『げっキュルケ！』そういつて、嫌な顔をするルイズだが、キュルケは、そこはスルーして、スサノオの腕に絡みつく。

「ねえ、スサノオ様！剣なら、私が買ってさしあげますわ！だから、何でもお言いつけになつて」

こぼれんばかりの、メロン級をその腕に堪能しながらも、スサノオは、背中に刺さるルイズの視線が痛くてしかたなかった。

うくん、この感触を味わっていたのは山々ですが、流石に、拙いですよ？

くうく残念です、非常に残念です！でも、もう少し、もう少しだけ・・・

しかし、そんなスサノオの熱い想いは、懐から顔を出した、南天により中断される。

「キャッ！」と小さく叫び、南天に驚き、離れるキュルケ。

そして、『ふふふ・・・』と黒い笑顔で、それを見つめるルイズ。タバサは、我関せずとばかりに、店内の武器を見てまわっている。

もくナンちゃん・・・もう少し空気呼んで・・・あの胸の感触は、なかなか味わえるものでは・・・いや、大丈夫です。そんなことあ

りません。

ええ、ナイスタイミングでした。だから、その、ガジガジしないで・  
・  
南天に耳を齧られながら、スサノオは、念話で、言い訳をしつつ、  
キュルケに向い直り、話しかける。

「はは、驚かして申し訳ないですね。この白蛇は、南天。私の大切な友なのですよ。」

『大切な友』という言葉を聴き、耳を齧るのを止め、スサノオの懐に入り込む南天。

少し、赤らんでいたかどうかは、定かではない。

「そして、私の剣は、ルイズにもう買ってもらったので、これ以上は不要なんですよ……」

そうよ！スサノオの望むものは、全部、私がしてあげるんだから！  
スサノオは、私の使い魔で、パートナーなんだから、当然よね！ツ  
エルプストーなんかお呼びじゃないのよ！と胸を張り、キュルケに  
眼を飛ばすルイズであったが、如何せん、胸の張り合いでは、勝負  
にならず、なんだか、変な対決姿勢でにらみ合う二人だった。

「まあまあ、こんなところで、なんですからね。場所を変えませんか？出来れば、甘いお菓子が食べられる店があればいいのですが？」

『甘いお菓子』という、嬉しキーワードに引かれた二人は、この街一番の、美味しいパイを出してくれるお店に、移動することにし、  
そそくさと会計を済ませる。

もちろん、タバサも、その店は知っていると見えて、目元が少しだけ下がったが、誰にも気づかれることはなかった。





第27話：只今、城下散策中（後書き）

すみません、少し立て込んでました。  
頑張ろう！と心に声援を送りつつ・・・。

第28話：只今、乙女質問中

・・・

スサノオの希望により、甘くて美味しいお菓子を求め、行き着けの喫茶店に入る、4人組み。

ルイズとしては、スサノオと二人つきり？で、来たかったのだが、キュルケの猛烈アタックと、スサノオの『学生同士の友達に、家柄や爵位（親の）を出すのは、自分に自信がない証拠』と悟され、しぶしぶ同席することとなったのである。

「ここの、クックベリーパイが超美味しいの！きっとスサノオも気に入ると思うわ！」

そう言いながら、店員に、注文するルイズの横で、まだ見ぬウマア（デザートに心躍らせるスサノオだったが、その様子をじつと観察するタバサと、熱い眼差しで見つめるキュルケにちよつと引き気味だ。

「ねえ、スサノオ様・・・色々と聞きたいことがあるのだけれど・・・  
いいかしら？」

そんなキュルケを、『なによ、私のスサノオに話しかけないで！』と喉まで出かかったが、ぐつと飲み込むルイズ・・・先ほどスサノオに言われたことを思い出したようだ。

いったい何が聞きたいのかしら？まあ、いいわ・・・不思議の塊でしょうしね。ふふふ、神様ってことは、私とスサノオだけの秘密だ

し、嗚呼、なんて甘美な言葉なのかしら……二人だけの秘密……  
ふふふ……

「さて？なんでしょか、私に答えられる範囲で答えますよ？」

そう、スサノオは、そのとき悔っていました……恋に恋する乙女の質問タイムの恐ろしさを！

「では……ご出身は？」

「東方の、とある国……とだけ言っておきましょう」

「フルネームをお聞きしても？」

「降馬頭主宿参ノ王と申します」  
オルバトオススサノオ

「スサノオ様とお呼びしても？」

「かまいませんよ」

「ご職業は？」

「今は、ルイズの使い魔です」

「その前は、何をなさっていたのかしら？」

「そうですね、とある国の将を任されていましたよ」

「将とは……なんですか？将校ですか？將軍ですか？」

「ふふふ、ご想像にお任せしますよ」

「年齢をお聞きしても？」

「ふふふ、禁則事項です」

「私よりも、年上なのでしょうか？」

「それは……間違いなく」

「好きな食べ物は？」

「プリンです」

「プリンとは？」

「超極旨なお菓子のことです」

「聞いたこと……ありませんわ」

「ふふふ、残念ですね……また、機会があれば」

「嫌いな食べ物は何？」

「納豆です」

「納豆？」

「東方の食べ物で……いや、説明するのもおぞましい」

「紅茶派？それともコーヒー派？」

「強いて言えば、紅茶……でも、緑茶が好きですね」

「緑茶？」

「これも、東方の飲み物で、あつさりした飲み物なんですよ」

「……好きな、女性の好みなどは？」

「そうですね……内面に清涼感溢れるそよ風を感じさせてくれる人……でしょうか」

「外見は……お気になさらない？」

「私はね、女性の内なる輝きにこそ、美しさを感じられる男……なのです」

「……では……胸は、大きいほうが好き？」

「私は……大きさではなく、形が大切だと……いや、なんでもありません……聞かなかったことにしてください……」  
(ルイズから発せられる黒い何かに気おされながら)

「今まで、お付き合いした女性の数は？」

「ふふふ、それも、禁則事項です」

「あら、随分お隠しになるのね？」  
「強いて言うならば、今まで食べたパンの数を憶えていない・・・  
といったところでしょうか？」

ふう〜年頃の女の子は、どうして、こうなんでしょうね？まあ、気になるのは仕方ないですね・・・だって、私は『モテモテ；スサちゃん』の異名を持つ、高天原一のいい男（自称）ですからね！  
ん？信じてないですね？これでも、異酒屋、栖那空、伽芭俱羅、桃沙露・・・などなど、神界：雅3丁目では、VV言わせてるんですよ？

でもね・・・いつも！いつも！いいところで、邪魔が入るんですよ・・・

ナンちゃんとか、姉上とか、クツシーとか・・・

この前も、やっと電話番号を聞き出せた、キャサリンと、食事の待ち合わせをしていたところに、何故か現れたクツシーに、拉致されて、携帯握り潰されちゃって・・・ああ、さようなら、私の宝物（電話番号・メアド）達・・・と涙で濡らした枕だけが、私の事をわかってくれるのですよ・・・

でも！考えてみると・・・そうですよ！

この世界には、ナンちゃんしかいないわけで、そういう意味では、色々と、その、あんなチャンスやこんなチャンスも、モノに出来るって感じがしますよね？

うん、そんな気がしてきました！

ふふふ、なんだか楽しくなってきましたね！

そこに、思いがけず、タバサが口を開く・・・

「・・・スサノオ・・・メイジ？」

おっと、この子も、私に興味がありありますか？

むふむふ、ここは、私の知的な一面をちらつと見せることで、フラグ・・・いや、縁を立ててみましょうか？

「あなた方の言う、メイジの定義がわかりませんが、『魔法』の行使を意味するのであれば、NO！です。いかな仙術魔人（自称）といわれる私でも、悪魔の力を使うことはできませんから」

『え？』そう、そこに集う3人の魔法学院の生徒達は、スサノオの発言に、驚いた。

1言も聞き漏らすまいと、その言葉に集中していたが故に、とんでもない単語も全て聞こえていた。

今・・・なんて？スサノオ様は、なんて言ったのかしら・・・確か、悪魔の力って聞こえたのだけど・・・本当なの？  
口には出さないが、キュルケも驚きを隠せない。

「あ・・・スサノオ・・・今、悪魔の力って聞こえたのだけど？」

「ん？そうですね・・・では、ルイズ、あなた方メイジが使う『魔法』の魔の文字は何を意味するでしょう・・・考えたことはありますか？」

「え？いや、考えたこと・・・ないわ。だって、皆、使ってるし・・・」

「では、ざっくり、貴族と平民の違いは、魔法が使えるかどうか・・・ですね？ならば、その線を引きの根本的な理由はなんでしょわか？」

「え！って、そんなの、誰にも教えてもらってない・・・わ」

「そう、そこはね・・・『教えてもらってない』ではなく、『教えることができない』ということですよ」

ど、どういうこと？わけわかんないわ？なんなの魔法って、なんなの悪魔の力って、そんなこと考えたことも、聞いたこともないわ！

「おっと、待望のデザートも来ましたし、難しい話は、また今度で！うはああああ・・・いい香りですね！これは期待できそうだ！」

急に、デザートへと気を逸らしたスサノオだったが、他の3人は、それぞれ別のことを考えながらも、スサノオを目で追う。

もーまた、難しい話して！よくわかんないけど、スサノオは嘘はつかない・・・だから、さっきの言葉は本当なんだ。たぶん、今、そのことを聞いても私の理解は追いつかないのだから・・・だから、中断したと思う。今、指輪の力を借りても同じこと。もっともっと勉強して、この世界のこと、スサノオの言わんとすること、その全てを理解できるようにしたいの！そのためには、私自身が努力しないといけない！

スサノオ様・・・ス・テ・キ・・・強いだけじゃなくて、こんな知的な一面もあるなんて・・・ああ、私の恋の炎は燃え盛るばかりだわ！

絶対、私の虜にしてみせる！

へんな男・・・でも不思議・・・嘘と言っている感じはない・・・でも、初めて聞く話・・・興味深い・・・

そんな乙女達も、焼きたての、クックベリーパイの魅力に、全ての

意識を持っていかれるのであった。

そして、ルイズ1ホール、キュルケ1ホール、タバサ3ホール、スサノオ5ホールと、店の店員ならびに、周囲のお客を唸らせ、大食い記録保持者の榮譽に輝いたのは……どうでもいい話であった。



第28話・只今、乙女質問中（後書き）

本当に、すみません・・・

## 第29話：只今、弟子志願中

・・・

最近・・・やけに視線を感じるんですよ？

え？自意識過剰じゃないかって？

いやいや、私はこれでも神将ですよ？

空気読める神：ベスト3位には、常にランクインしている男（自称）ですよ？

そこいら辺の気配はキチンとわかります。

モチロン、この気配は、精霊・亡霊・・・の類ではないですね。

私を狙う・・・狩人のような・・・そんな気配。

「スー、今日はココまでにしようか。」

ナンちゃんの言葉で、朝錬を終了するするのが、ココに着てからの日課になっている。

本当は、朝寝坊したり、ゴロゴロしたり、惰眠を貪ったりしたいお年頃なのですが、私の相棒は、それを許してくれません。

ああ、お休みが欲しい・・・そんな、想いを胸に抱きながら、暫し休憩なのです。

「黒龍眼殿も、八頭殿も、朝から精が出るでござるな。関心関心」

「やかましいわ、対向刈、いいよなあ〜君は・・・剣だもんね〜朝錬なんて、関係ないもんね〜」

「いやいや、コレでも拙者は、イメージトレーニングは欠かしたこ

とがないのでござるよ？あんな、こんなシュチュエーションでも、即時対応可能なのでござる！」

そんな感じで、しばし、まったり・・・

「あ、そうでござる・・・黒龍「コクリュウガン」眼殿、こちらの世界にいる間は、拙者のことは、『デリフ』とお呼び下され。」

「ん？いいけど・・・なんで？」

「こちらに喚ヨばれて、初めて『友』と認めた御仁が、名づけてくれた名前・・・それが、デルフリンガーなのでござるよ。もう、6000年も前の話でござるが・・・今では、こちらのほうが、しっくりくるのでござるよ」

「OKOK、なら、私のことも、スサノオでいいよ、こちらにいた間は、字あひなも爵位も関係ない、ただのスサノオで通すつもりだからね」  
「恐れ多いことはありませんが、そう申されるのであれば、『スサノオ殿』と呼ばせていただきます」

「ん・・・ま、いいか。ナンちゃんもそれでいいよね？」

「いいだろう、ならば、オレのことも、南天でいい。しかし、喋り方が、昔に戻ったな？」

「はは、やはり、このほうが、拙者らしいでござるっ？」

さてと、一休みしたし、そろそろ帰って、ルイズちゃんを起こさないかね？

そう思いながら、立ち上がり、デリフを鞆に収めていると……  
茂みの中から現れる黒い影！

「すすすすすす、スサノオ殿！どうか、弟子にして下さい！」

「また来たの？ギーシュ君、君も懲りないね。」

先日の、決闘騒ぎから、数日、毎日毎日、ここへやって来ては、こ  
うして弟子入り嘆願にやってくるんだよね

『私は、弟子は取らない！特に男の弟子はな！』とかつこよく言っ  
てやったのに……  
全然聞きやしないんですよ……困ったものだ。

「このギーシュ！何度断られても、弟子にしていたたくまでは、何  
度でも、こうしてお願いに参ります！僕は、あなたのその大きな器  
に……惚れました！」

え？なに？今……惚れたって？

ええええええええ！何だつて！も、もしかして……ギーシュ君  
は……そっち側の人間だったのか！くうううう、この私とした  
ことが、気づかなかつた……

だめ、私はね、『男が好き』という性癖の男は、生理的に受け付け  
ませんから！残念！

「だって、好きになつちやつたんだもん。」なんて可愛く言っても  
ダメなものはダメ！

え？言っていないって？いや、とにかく、ダメなものはダメなんです！  
だから、もう近寄らないで！こつち見ないで！あつち行ってくださ  
い！！！」

「おい……スー……お前、また、大きな勘違いをしているよう

だぞ」

南天が、指差す方向には、膝をつき、がっくりと頂垂れる、ギーシユの姿が……

しかし、今日のギーシユは、いつもと違うようだ。

「スサノ才殿！酷いです！あんまりです！この不肖、ギーシユ・ド・グラモン！つま先の先から、頭の天辺まで、女の子大好きエキスでいっぱいなのです。そう、つまり、私は、女の子大好き星人なんですよ！しかも、女の子と一言でいっても、色々ありますよ！年上、年下、先輩に後輩、幼女に熟女、学生にOL、看護婦に女医、眼鏡っ子にポニーテール、猫耳、ウサ耳、はたまた、タヌキ耳、シツポ付きに、翼付き、怪女に、人魚、人妻に義姉、義妹、お隣さんや管理人さん、あれこれ、などなど……全部ひっくるめて、大好きなんです！」

「わかった！わかったから、そんな恥ずかしいこと、大声で叫ばないでくれ！」

「え！そうですか、判っていただけましたか！つまり、弟子入りはOKということですね！」

は？何？なんで、そうなるのかな？

おかいいよね？ちょっと意志の疎通が難しいですよ？

「スー……いいじゃないか、こつも毎日毎日来られても面倒だ。認めてやっただらどうだ。」

「いや、しかしですね……弟子は……」

「そうだよな……男の弟子はとらない。」

「そうそう・・・」

「しかし、女の弟子は、とっちゃうかも？」

「いや・・・それは、まあ、どうでしょうね？」

「オレはいいんだよ？オレはな。しかし、あれだ、このことを櫛籬クシ刀ナダが知ったらどうなるかなあ・・・」

「ははははは・・・ナンちゃんは・・・私を裏切ったりしませんよね？」

「当たり前だ！オレは、お前の盾であり、矛でもある。だが、ついで、ついで、こぼしちゃうかもしれないよな？だって、オレは完璧超人じゃないんだから」

ああ、だめだ、ナンちゃん・・・告げ口するき満々ですね・・・よりによって、クツシーに！

はあ・・・まあいいか、どうせ、そんな長い時間の話でもないですしね。

「わかりましたよ！いいでしょう！ギーシュ・ド・グラモン！君の弟子入りを認めようじゃないか！」

「え！本当ですか！やった！僕は、ついに・・・」

「静かに！ギーシュ、喜ぶのはまだ早い！弟子入りは認めた・・・しかし！ついて来れなければ、それまでだ・・・いいかね？厳しいよ？」

「もちろんです！僕は、必ず、上り詰めて見せます、諦めません！」

猛烈にやる気漲るギーシユを見ながら、私は、この男を、この世界で一番の貴族に育てあげようと・・・なんて、思っていたいなかった。軟弱なボーヤが、ドコまでやれるか・・・それだけだった。私の弟子を名乗ることが、どれだけ苛烈で、苦難を伴うか・・・彼は、きつと、後悔するだろう・・・しかし、もし、成し遂げたなら？それは、それで、面白い試みだ・・・

「うむ、いいか、ギーシユ。師匠と弟子の絆は、親と子のそれ以上なのだ。師匠の言うことは絶対。師匠は黒と言えば、白でも黒！猫耳メイド美少女がいると言えばいる！血のつながらない可愛い妹がいると言えばいるんです！いいですか？これが守れん奴には、弟子を名乗ることは出来ない。君には、守れるかな？」

「も、もちろんです！僕の崇拜すべきは、師匠である、スサノオ殿だけであります！」

「うむ、ならば・・・今日から、このスサノオの名を辱めることの無い様、精進するのです」

「はい、判りました師匠！」

というわけで、今日から、私の弟子になったギーシユ君です。

色々と、教えることが沢山あるのですが、まあ、楽しくやりましょ  
うか・・・ね？

頼れる弟子になるか、面白い弟子になるかは・・・お楽しみですね。

第29話：只今、弟子志願中（後書き）

すみません・・・

連投には、無理があったようで・・・

なんとか、なんとか、あははは・・・



第30話：只今、冥土始動中

・・・

嗚呼、スサノ才様・・・あの緋色の瞳に見つめられたあの時から、私は貴方様の虜・・・

そして、あの華麗な立ち回り・・・素敵すぎる・・・きっと私は、貴方に出会うために生まれてきたんですわ。

そして、私は、スサノ才様への愛に殉じるべく、早朝より活動を開始するのです！

起床し、すぐに身づくろい！

いつ、あの方に見つめられても、求められても常に完璧な私を奉げたい・・・うふふっ

だから、念には念をいれて！

女の朝は忙しいのです！1分1秒たりとも無駄にはできませんわ！

そして、スサノ才様専用朝食作り！

基本的に、厨房へお食事に来てくださるあの方へ・・・私の愛を表現しなければ！

栄養バランス、見た目、味、どれも完璧！もちろん、コック長マルトーさんのお墨付き。

「お前が男だったら、必ず弟子にしていたのに」とお褒めの言葉も何度言われたことか。

ふふふ、女はね、相手の胃袋を押さえた者が、最終的には勝利するものなのよ！

私の母も、祖母も、そのまた祖母も、佐々木家の女は、そうやって

意中の殿方をGetしてきたの！  
だから、もちろん私の仕込まれて育ってきたわ！そう、全ては、あ  
の方の為に！

食事の用意ができたなら、スサノ才様が毎朝勤めていらっしやる、鍛  
錬の様子を覗き・・・いや、見学に。

朝日を浴びながら、健康的な汗をかくスサノ才様・・・ああ、そ  
れだけで、その姿を見ているだけで、御飯3杯はいけますわ・・・  
そんな、毎朝の私の特別な時間に、最近現れる、負け犬貴族・・・  
ミスタ・グラモン！

私のスサノ才様を困らせるなんて・・・ここは、やはり、佐々木  
忍群の力で、一族諸共歴史から抹殺すべきかしら？

よし、そうしましょう、次に・・・そう、次にスサノ才様を困らせ  
た・・・その時は・・・ふふふ・・・

しかし、私の思惑とは裏腹に、スサノ才様は、なんと、海よりも広  
く、山よりも高い、その懐の大ききで、ミスタ・ギーシュを弟子に  
してしまわれたのです！

嗚呼、なんてことなの・・・影からそつと見守るしかない私では、  
これ以上近づけないというのに！

それなのに、弟子！？そう！弟子ですよ！？

くつ、弟子といえは、親子も同然、兄弟も同然、恋人も同然！もち  
ろん同衾もあり！？

う、羨ましすぎる・・・ここはやはり、抹殺・・・いえ、だめよシ  
エスタ！落ちついて！クールになるのよ！

今、あの負け犬貴族は、スサノ才様の弟子扱い。そんな人物が、突  
然消えたとなれば、色々と問題になるわ・・・情の深いあの方のこ  
と、深い悲しみの海へ落ちていくに決まっている・・・

ん？そして！そこに、優しく、可愛くて、胸も大きな、シエスタ  
ちゃんが、全身全霊で慰めてあげたなら・・・

『ああ、シエスタ・・・君はなんて優しくて、可憐女性なんだ・・・私はもう、君なしでは生きていけないよ』

なんてことに！？なる、なるわ！そう！これは決定事項なの！ふふふふふふ・・・

よし、こうなったら、もう少し、あのミスタ・グラモンを生かしておく必要があるわね。

よかったわねミスタ・・・貴方の命、獲らないでいてあげるわ、今のところはね・・・  
ふふふふ、あはははは・・・

その頃、いつもより、早く目が覚めたルイズは、ベットの中で、まどろんでいた・・・

最近・・・どうも、スサノオの周りを、ちよろちよろ伺っている連中（女限定）

特に、あのキュルケと、メイドと中心とした平民達・・・  
私の目を盗んでは、ちよっかいを掛けてるみたいだけど・・・気に食わないわ。

スサノオはね、私の使い魔なの！相方なの！つまり、私のモノ！スサノオの全ては、私のモノ・・・

きゃあああゝえへ・・・つまり、それは、こ、恋人同士・・・  
って感じかもしれないわけで、そうすると、私はスサノオのモノなわけで、だから、その、あんなことも、しちゃってもいいかな？ってなるわけで、そうしたら、そう、そうだわ、もう結婚するしかないでしょ！だって、し、しちゃったんだから、その、そうね、そうすると、春の暖かい日に、ロマリアの大聖堂で、沢山の人たちに祝福されながら、バージンロードを歩く私・・・そして、司祭様の前で私を待つスサノオ・・・

そして、私の指に、指輪を嵌めながら、永遠の愛を誓う私達・・・  
そ、そして、ふたりは、熱い口付けをしちゃって・・・あ、いやん、もう、スサノオったら、みんなの前で恥ずかしいじゃない・・・で

も、貴方がそうしたいならって、そうね、子供は3人、女の子2人と男の子1人欲しいわ……  
もう、気が早いんだから……スサノオったらあん……

はっ！？な、なにを考えていたのかしら、もう！わ、私ったら、また、跳躍しちゃったみたいね……  
そういえば、今日は、スサノオ遅いわね……なにかあったのかしら？

べ、別に、気にしてるわけじゃないのよ！ただ、なんていうか、そう！私は、ご主人様なんだから、使い魔の動向は、全て把握してないといけないわけで！  
だから、その、恋人とか結婚とかいう単語に、興味があるわけじゃ……ない……ことも……なかつたりするかもしれないけど！いの！今は、まだ、そこまで、進展してるわけじゃ……ないし……ね。

今日は、食堂でなく……厨房の一角にある平民たちの食事スペースで、朝食を食べているの……  
何故か？そうそれは……

「ハイ、スサノオ様、今度はコレを召し上げね」

そう、この、私の！スサノオに！甲斐甲斐しくも、まとわりつく、このおっぱいメイドが原因！

私達は、いつも通り、食堂で朝ごはんを食べてようと、席についたのもちろん、スサノオも私の横にピツタリ座らせて……と思ったのだけど、他の貴族が勘に障るから、厨房へ行くよ……ってスサノオが言うものだから、「仕方ないわね」って見送ったそのすぐ後に

！この、おっぱいメイドが、スサノオの腕に絡みついで、厨房へ引つ張って行くのが見えちゃったから、その、なんていうか、追いかけちゃったんだもん……。

「ミス・ヴァリエール……ここは平民の食事スペースですよ？貴族様は、皆様、食堂で召し上がっていらっしやいますよ？邪魔……じゃなかった、場違いですから、どうぞ、お戻りになって下さいまし」

ねえ、今、言った！こいつ、私のこと邪魔って言ったわ！

きいいいい……いやいや、ここで引き下がったら、このおっぱいメイドの思う壺よ！

クールに、そうクールになるのルイズ、肉を切らせて、骨を絶つよ！

『スサノオお〜ねえ〜いいでしょお〜私と一緒に、朝ごはん食べましょうよお〜ね？』

そういいながら、腕に、その、私の、む、胸を押し付けながら、食堂へ引つ張る仕草をしたの……そしたらね、『仕方ないですね、ルイズ……なら、ここで一緒にしましょう。それでいいよね？』  
って言ってくれました！ふふふ、作戦通り……どう？聞いた？  
おっぱいメイド！これで、文句は言わせないわ！

「シエスタ、すまないが、ルイズの分も、こちらに用意してくれるかな？」

「もちろんです。スサノオ様！」

な、なに、このおっぱいメイド、スサノオには、随分素直に従うじゃない！

まあいいわ、ここで、私とあなたの立場の差を見せ付けてやるんだから！

そう、思っていたのだけど……

「お、美味しい！？な、なにこれ！いつも食べているモノより、全然美味しいわ！」

そう、悔しいけど、このおっぱいメイドが作った朝食・・・美味しかったです、ハイ。

スサノオもニコニコして食べてるし・・・悔しいけど、これは、真似できないわ・・・  
やるじゃない、おっぱいメイド・・・

「いいわ、おっぱいメイド。あんたのこと、ちょっとは認めてあげても。」

（そんな胸で、スサノオを誘惑しようなんて、甘い甘い！精々、得意の料理で頑張ることね・・・）

「それは、ありがたきことですわ。それと、私の名前は、シエスタ。おっぱいメイドと呼ばれるのは、恥ずかしいので、どうか、そう呼んでください」

（ふっ、無いものねだりですか？残念ながら、私の胸は、大きさだけじゃなくて、美乳なの！ま、そんな貧相なもの比べられると、こっちが悲しくなるから、やめてほしいわ）

スサノオと料理をはさみ、笑顔で、しかし、その裏では、非常に、黒いやり取りが、そこにあったが、知ってか知らずか、ただただ、ニコニコと料理を食べ続けるスサノオであった。

第30話・只今、冥土始動中（後書き）

ほんと、申し訳ないです。総合PV130、000越え、ありがと  
うございます

### 第31話：只今、友人集合中

・・・

おかしい・・・

本当に、おかしいと思うの。

だって、この場所は、食堂の隅にある、フリースペース。

そして、明かりも暗く、厨房の近くにあるせいで、給仕やコック達の声も聞こえるから、騒がしい場所。

だから、あまり使われない、この人気のないテーブル。

でも、そういう理由だからこそ、他の生徒が寄り付いてこないからこそ、スサノオと二人っきりで食事をしていても、誰にも邪魔されない場所・・・。

今日は、ちょっと大胆に迫ってみようかしら・・・

なんて思っていました・・・つい、数分前は！

なのに・・・なのに・・・

「なんで、ここに！あんたがいるのよギーシュ！」

「そして、キュルケ！邪魔だから、あつちに行きなさい！」

「タバサ・・・サラダを大皿ごと持ってこないで！」

「で、シエスタ・・・あんた、ちゃんと仕事しなさいよね！」

はあはあはあ・・・

なんで、こいつらがココにいるのよ！

あんたらがいる所為で、私の『ちよつと大胆に・・・』という綿密



な作戦が実行できなでしょうが！  
もおおおおおおおおおお・・・

「何を言っているんだルイズ。弟子である僕が、師匠と食事を共にするのは当たり前だろう」

「はあ？何言っているのギーシュ？」

しかも、弟子って何？ていうか、その当たり前前ってなんなのよ！

「あら、ルイズには関係ないでしょ？私は、スサノオ様と食事がしたくてここにいただけなの」

それが邪魔だつていうのよ！

あんたは、その無駄に育った脂肪の塊を持って、あつちで指啜えてこつちを見ている元ボーイフレンドんところへ行きなさい！

「このサラダ美味しい・・・」

タバサ・・・確かにその、ハシバミサラダ、苦くて誰も食べないけど、もつと憤み深さが必要でしょうが！ていうか、人の話を聞けえええええ

「あら、私は、きちんとしていますわ・・・スサノオ様の身の回りのお世話も、私の大切なお仕事ですもの」

そんなこと！いつ決めたつていうのよ！

スサノオの身の回りの世話なんて、あんたは必要ないの！スサノオが望むことは、私が！何でも、し、してあげるんだから！

息も荒く、騒がしているルイズの周りには、何故か、邪魔な4人が、

同じテーブルについている。

まあ、今更、何を言ったところで、こいつら私の言う事なんて、聞きはしないだろう。

わかっている、皆、スサノオが目当て……私が……私の方が邪魔者なのかな……

なんて言うと思ったら、大間違いなんだから！

スサノオはね！私のなの！私専用なの！私の、私による、私のためのスサノオなの！

だから、スサノオの優しさを受け取るのは、私だけなの！

スサノオに、触れていいのは私だけ！

スサノオに、キ、キスしていいのも私だけ！

スサノオと、あ、あんなことしていいのも私だけなの！

と、脳内会議場では、ルイズを讃える拍手と共に、独占宣言をしているルイズでした。

「まあまあ……ルイズ、実はね、今朝、ギーシュを弟子にしたんだ」

「え？どういうこと？」

「ん〜ナンちゃんかね、毎朝やってくるギーシュを面倒くさがってね、ま、いいかな〜って感じで」

「はあ……そう。よくわかんないけど……まあ、いいわ、スサノオが決めたことなら、私は別にかまわない……けど……ギーシュ、あんた、なんで、また、弟子なのよ？」

軽いノリで話すスサノオに少々呆れながらも、コテンパンに、のされたギーシュのことが理解できない。まあ、然程付き合いが深いわ

けでもないので、仕方ないと思うが。

「僕はね、あるとき師匠に言われた言葉が、深く胸に突き刺さってね。真に貴族と名乗る為には、今のままではダメだと！そして、僕を目覚めさせてくれた師匠に、教えを請いたいと！そう思っただけさ。」

食事の手を止め、気持ち悪いほどキラキラした目で、語るギーシュを、少しだけ、少しだけ見直した。

まあ、その弟子っていうのが、いまいちピンとこないが、スサノオのことを良い風に理解してくれる存在が、いることがなんだか嬉しかったのである。

「そういうことで、ギーシュを明日から、毎日、朝と夜に、修行タイムと決めて、鍛えることにしました。もし！私の厳しい修行に耐えることができたなら……」

「「できたなら？」」

「きつと、楽しくなりますよ……今以上にね」

「「……………」」

「それって、なんだか面白そうね？私も参加していい？」

ルイズは、スサノオと過ごす時間をこれ以上減らしてなるものかと、修行なるものにくっ付いていこうとするが……

「ルイズ……朝、起きれないでしょう？」

「うつ……いえ、明日からは、ちゃんと起きる……から、スサノオが起きたら、すぐ起こしてよ」

起きれるかしら……。でも、スサノオはちゃんと起こしてくれるはず！

そうよ、だって私も、スサノオの横に立つ者として、ギーシュに負けてなんていられないし！

魔法の訓練もしないと……。よおし！頑張ろう！

そんなルイズを、面白いもののように、周りを見る。

「ふふふ、なんだか面白そうね、私の参加してみたいわ、いいですよスサノオ様？」

キユルケも、なんだか楽しそうな予感を感じ、参加を希望する。

そうよ、もっともっとアグレッシブに！

それに、スサノオ様のこと、もっと知りたいしね、ふふふ、面白くなりそう。

「ふう……。まあ、いいでしょう。人数が増えても別段かまいませんし。ただし、コレだけは言っておきます」

急に、真面目な顔で、皆を見渡し、浮ついた空気を吹き飛ばすスサノオ。

『ごくり』と唾を飲みこみ、周囲に少し緊張が走る。

「私の修行は、キツイですよ？そして、コレは遊びではないのです。1人でも、浮ついた気持ちで参加するならば、私は容赦しません。それでも、構わないのであれば、明日の早朝、平原に来るといい。」

そう言って、席を立つスサノオ。

『先に部屋に戻ってますから』とルイズに告げ、背を向けて去っていく。

「君たち、師匠の修行は、本当にキツイと思うよ？僕は毎朝見ていたからね・・・だから、レディー達には、無理だと忠告してあげるよ」

「あら、そんなのやって見ないとわからないじゃない。私は、なんだか、燃えてきたわ！恋心も、メイジとしても誇りもね！」

「あんたたち・・・まあ、いいわ。私も、頑張るわ、あんた達には負けないんだから！」

ライバル？たちの言葉で、真剣に頑張ろうと決意するルイズだったが、キュルケの横で、モグモグとサラダをまだ食べているタバサが気になった。

「タバサ・・・あんたは？」

「・・・興味ある」

「・・・あつそ」

なんだか、変な集まりができちゃったわね・・・。

そう思いながらも、『友達』というコミュニティを持たないルイズは、少しだけ、少しだけ、楽しいかも・・・そんな風に感じていた。

第31話：只今、友人集合中（後書き）

遅れました・・・

すみません。

感想、評価、ありがとうございます。

がんばりますので・・・

第32話・只今、団員登録中

.....

「スー起きろ、ほら、今日から修行するんだろ！師匠が遅刻しては、示しがつかんだろ！」

ガジガジと、スサノオをかじりながら、毎朝の日課『スサノオを起こす』を実行する。

まったく、しょうがないヤツだ・・・そんなふうにも思いつつも、その瞳は優しい。

「ルイズ、起きなさい。ささ、ほら、起きないとお〜チュウしちゃうぞお〜」

南天に起こしてもらった、スサノオは、隣でねているルイズに声をかける。

そして、その唇に、顔を寄せ・・・『ガブリッ』南天に本気咬みされて諦める。

「ルイズ、起きろ！お前も、オレの牙で咬み起こしてやるつか？」

その言葉で、パチツと目を開け、飛び起きるルイズ。

1度だけ、咬み起こされた時の痛みを思い出したのか、その効果は観面だ。

「起きる、いや、起きたわ！だから、咬まないで！」

そして、そそくさと、洗顔し、朝の身づくろいを軽く済ませる。  
スサノオは、もう廊下で待っているのだろう、キュルケの声もドア越しに聞こえてくる。

さて、どうなるか、わからないけど、頑張ってみせるわ！

くうく朝日が眩しいね〜そんな自然の美しさを楽しんでいるところに、キュルケ、タバサ、ギーシュの順でやってきましたよ？

もちろん、ルイズちゃんも、私と一緒に来ているので、セーフ！遅刻ではありません〜ん。

さて、そろそろ始めますか。

「皆、おはよう！では、早速、始めたいところであるが、その前に、各自の力を見たい。私について着るように！そして、ここで本気が出せない者は、明日から来ないほうが身の為です」

そうやって、私は、少し身体を慣らすために、ゆっくりと走り出す。そして、徐々にスピードを上げていく・・・かれこれ30分程・・・そして、振り返る。

ピツタリと、私の後ろについていたのは、タバサのみ。

少し遅れて、キュルケ、かなり後方にギーシュ、そして、ドン尻はルイズ。

まあ、予想通りといえば予想通りなんですけどね・・・ギーシュ余りにも情けない。

ここは、ちいーと厳しくしましょうか・・・。

「ハイ、それでは、呼吸を整えながら聞きなさい」

さて、離れるか、食いついてくるか、どうでしょうね？

気分屋な私ですが、一応、真面目に教えるつもりなので・・・ね。



「この現状が、貴方達の実力です。いいですか、貴方達が、何を目指し、どこへ行きたいのか、私にはわかりません。しかし、何を成すにしても、体力、精神力、技術力、の3つは不可欠なんです。そして、その1番肝心な体力が、余りにもない・・・情けないことですが、レベルが低すぎて話しにならない。」

「え？なに？どういうこと・・・」

「いいから、聞きなさいルイズ。今、この場で、なにかしらの攻撃を受けたなら受けたなら？確実に、ギーシュとルイズは、無力化されるでしょう。キュルケは、なんとか避けられる？タバサは、反撃できる・・・そんなレベルです。」

何かしら、華々しいモノを期待して、この場にいるのなら、去りなさい。私の修行は、遊びではないのです」

「・・・・・・・・」

「しかし、歯を食いしばり、己が輝きを掴まんとするモノには、望む姿へ誘<sup>いびな</sup>つことも吝かではありません。さて、どうしますか？ここで、去つても私は、何も思わないですし、いつもと同じ日常が待っています。選ぶのは、常に自分自身なのですよ？」

ま、ギーシュは徹底的に・・・する予定なので、逃がさないつもりですが、女の子達はね？心の強さを私に示せるのかな？

「も、もちろん、僕はついて行きますよ！師匠、この、ギーシュ・ド・グラモンに二言はありません！」

ふふふ、ギーシュ、残念ながら、君は『否』を選択しても結果は同

じなのですよ。

しかし、少しは気概を見せたようですね、虐め……いや、シゴキ……えっと、教育し甲斐がありますね。

「面白い……その挑戦……受ける」

へ〜タバサちゃん、以外に熱いじゃない？外見はクールなのにね……ま、いいでしょう。

女の子がいたほうが楽しいしね……え？だって、眼鏡っ娘だし……私の個人的な気持ちですが、なにか？

「私の情熱を甘く見ないで欲しいわ！それに、ヴァリエール家の者に負けるわけにいかないしね」

おっと、これは予想外、キュルケちゃんが喰いついてくるとはね？熱しやすく醒めやすいかと思いきや、中々……その、いけない果実を携えているだけのことは……いや、なに、独り言ですよ？

「わ、わたしは……もちろん負けていられないわ！この、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールの名に懸けて、ツエルプストーの女には、絶対負けられないもの！」

なんだ……結局、こうなってしまうのか……まあ、仕方が無いですね……。

ならば、どこまで頑張れるか……とくと楽しむとしましょうか。

「ふむ、いいでしょう。では、コレを……」

そう言いながら、スサノオは、3人に、懐から出した、手の平サイ

ズの四角カードを手渡していく。

「……なに？コレ……トリプルエスSSS団ポイントカード……？」

堅い紙の表に書かれている……その文字を読み上げたルイズの頭の中には『？』が浮かぶ。

「これは、トリプルエスSSS団の入団者だけに！特別に手渡されるカード……私は、君たちをSSS団への仮入団を許可しようと思う。そして！裏にある四角のマスが全部埋まると……」

「埋まると!?!」

「なんと! 『何でも、望みをかなえちゃう券』ミニマムをプレゼント!」

「『え〜!?!?何でも?』」

よくわからないながらも、『何でも望みをかなえる』という言葉に驚くギーシュとキュルケ……  
タバサは、じつとカードを見つめている。

「ふっふっふっ……驚いたかね諸君! ま、信じるか、信じないかは、君たちの自由……そして、! 『何でも、望みをかなえちゃう券』ミニマムを10枚集めると……『なんでもかなえちゃう券』マキシマムに交換できるのだ!」

良くわからないことの説明が続くが、なにか途方もないことのようにも感じられ、ウンウンと聞くしかない状態に、4人は、スサノオとカードを交互に見つめながら、話を聞いていた。

「まあ、こんな説明では、さっぱり理解が追いつかないと、思うけどね。いわゆる、アメとムチってやつさ。というわけで、ハイっ、今日は特別だ。」

そして、各自のカードに、自分に指を判子代わりに押ししていく。

タバサに、3個

キュルケに、2個

ギーシュ、ルイズに1個づつ。

「頑張る、そして、結果を出す。そうすれば、ドンドン、ポイントが貯まるから・・・楽しみも増えるって感じだよな？」

なんだか、独りだけテンションの高いスサノオを、声をかけられるのは、やはり、ご主人様しかいないわけで・・・

「ねえ、スサノオ？この・・・『なんでもかなえちゃう券』って、本当に、なんでもかなえちゃうの？」

「もちろん、私は、嘘は言わないさ、ジョークは言うけどね。金！知識！名誉！なんでもOKさ（大人の事情を除く）それに、ルイズは、1度経験済み・・・だよな・・・？」

そう・・・そうだね、スサノオは私の願いを叶えてくれている・・・ふふふ、よし！私・・・このポイント貯めきって、そして、スサノオとの熱い一夜を要求してやるのよ！誰にも邪魔されない二人っきりの時間！そして、そして！いやあ・・・ん、もおゝスサノオったら、大胆なんだからあゝ

突然クネクネしたルイズを眺めながら、ギーシュ、キュルケ、タバサは、スサノオが語る、その言葉の信憑性について考える。

凄い！凄いです師匠！『何でも』だなんて！こ、ここは、やはり、メイジとしても力を！いや、しかし、女の子達との甘いひと時も棄てがたい・・・貴族としての名誉・・・女の子・・・女の子・・・女の子・・・はっ！イカンイカン、まだ修行が始まってもないのに、そんなこと！今は、修行に集中し、真の貴族足りえる実力と、知性を磨くんだ！

本当かしら・・・でも、あのルイズの様子をみると、信じてもいいかも・・・スサノ才様・・・いつたい何者なのかしら・・・メイジでもなく、平民でもない。その知性と実力、そして不思議な力・・・嗚呼、素敵すぎるわ！ふふふ、ルイズには悪いけど、スサノ才様は、私のモノにしてみせる！

・・・不思議・・・『何でも』・・・本当なら・・・もし、本当なら・・・お母様を・・・スサノ才・・・変な人物・・・変な力・・・変な知識・・・でも、嘘は感じない・・・

三者三様に、想いをめぐらせる姿を見ながら、楽しくなりそうな予感に、ニヤニヤするスサノ才であった。

第32話：只今、団員登録中（後書き）

すみません・・・少々私用で・・・  
毎日更新は、ちよつと・・・  
出来る限り・・・頑張ります。

### 第33話・只今、出会到来中

・・・

「・・・」

おっと、私としたことが、つつい嬉しくて、機密事項を漏らしてしまつところでしたよ？

今日は、虚無の日・・・そして、私は、買い物中！

もうね・・・大変。

いざ買い物に出かけようとしたら、『デートしましょう』と、迫ってくるキュルケとその後追おうキュルケ、Sボーイフレンドとの壮絶な死闘？に巻き込まれ・・・

そのあと、修行に燃える、ギーシュが、『僕に休みなど必要ありません！師匠！あの滝まで走りましょう！』と追いかけてくるし・・・

ルイズは、ルイズで、コバンザメのように離れないし・・・  
まあ、それはそれで、嬉しいのだけど。

しかあああああし！漢オトコには、色々と、腐女子・・・じゃなかった、婦女子には、見せられない・・・秘密裏に満たさなければならぬコトもあるわけで・・・

それは、この私こと、スサノオにも当てはまるわけで・・・  
だから、そうするしかないわけで・・・

そんなこんなで、城下町に逃げ出してきました！

まあ、本当のところは、スペシャルプリンと作るための材料を買いに来たんですけどね。

手持ちのバナビーンズを使い切っちゃったので、それを探しにね。あと、新鮮な卵と牛乳も！

なので、ナンちゃんに人型に戻ってもらい、手分けして買い物&お店探検をしているところなんですよ。

色々な露天や商店が、相変わらずの賑わいを見せている中、デリフを片手に、あつちをキョロキョロ、こつちをキョロキョロ・・・

「デリフ〜南国系の商品売ってる店って、本当にこつちなんですか？ なんだか、人が少なくなってきましたが・・・」

「スサノ才殿、生憎と、拙者もあの武器屋から出たことがないので、詳しくは・・・ですが、拙者には聞こえるんです！ 南国の香り漂う果実たちの声が！」

妙に力説？するデリフをじと目で見ながら、『嘘だったら・・・折るよ』と言い放ち、デリフを怯えさせながらも、目的の店を探す。

私も、こつちの方だと感じたんですけどね・・・そこの角を右に・・・

「きゃっ！」

「おっと！」

も〜ちゃんと前見てないと危ないでしょ？

角に差し掛かったところで、女の子に体当たりをされてしまいましたた・・・この私に、体当たりをかますなんて・・・ある意味天文



学的確立ですよ？

食パンも啜えてないのにね・・・

まあ、それはさておき、倒れた拍子に、女の子のM字に開いた脚の中心から、真っ白なデルタ地帯が見えた・・・なんてことは、ありませんよ？いや、本当ですって！彼女の名誉の為に言っていきませんが、シルクの純白で、細やかな刺繍とフリルがついて、ピンクの小さなりボンが、ちょこんって付いていたなんて、見てませんか！でも、とっさに、スカートの端を押さえて、恥ずかしげな上目遣い・・・できる！この娘、只者じゃないですね！

「大丈夫ですか？なにやら急いでいたようですが・・・」

私はそういながら、座り込んでいる女の子に、手を伸ばします。

ふむふむ、なにやら、全力疾走しかも、後ろを気にしながら・・・って感じでしょうか？

「あ、あの、申し訳ありませんでした。その、急いでいたものから・・・」

「いえいえ、私も、想定外のことでしたから、御気になさらずに」

そんな、非日常的な会話をしている私達の後方から、なにやら、激しい足音と、だみ声が聞こえるのは・・・気のせいでしょうか？

『こつちに行つたはずだ！』

『良く探せ！』

『絶対、逃がすんじゃないぞ！』

ああ・・・なんたる・・・今日は、平穏な生活を楽しもうと思つていたのに・・・

ま、いいか・・・それもまた楽し・・・です。

「へっへっへ・・・見つけたぜ・・・もう、逃がさねえ・・・」  
「おい！その男、その女をこっちによこしな！」  
「どこの逃げてても無駄なんだぜえ」

なんてこった！なんだこの弱そうな、そして、ヤラレ役A・B・C  
みたいな台詞は！

そして、お約束通り、女の子は、私の背に隠れ・・・上着の端をギ  
ユツと握っている。

おおこのシユチュエーション！

あるんだ・・・本当にあるんだ・・・こんなこと！

嗚呼、神様ありがとう・・・って、どこの神にお礼いつたらいいん  
だろうか？

そんな感動に浸っている私の貴重な時間に、割り込むKYな3人の  
男たち・・・

「いいから、そこをどけ！」

「さつさと女を渡せ！」

「ひっひっひっ・・・」

あゝもう！こんなこと、一生に何度もないことなのに！

もつと空気読め！無粋な人たちですね！

ちよつとお灸を据えてやらねばならないようですね！

「君たち！止まないか？こちらのお嬢さんと何があつたかは知らないが・・・君たちのような、不細工、敵つい、そして、モアイのよ  
うな輩が、こんな可憐なお嬢さんを追い掛け回していいと思ってい  
るのかな？もし、そう思っているなら、やり直したほうがいい・・・  
前世からね」

「一応警告はしておきますよ？いや、主に私の自己防衛を主張するた  
めにね？」

「やかましい！」

「俺達とやるっていうのか！」

「こ、殺す！」

やはり、言葉と誠意？が伝わらない人種でしたか・・・私は、慈悲  
の心で彼らに接したというのに・・・

「お嬢さん、申し訳ないが、少し下がっててもらえますか・・・大  
丈夫、私を信じて、あなたのような可憐な女性には指一本触れさせ  
ませんから」

私は、男たちに、『私が正義の味方だったら、一度は言ってみたい  
台詞NO、5』を選択。

そして、『悪党に告げる決め台詞NO、3』を選択。

「さて、君達・・・残念です、ここに居合わせなければ、幸せな人  
生が待っていたかもしれないのに。」

懺悔の準備は出来ているかな？こんな可愛らしいお嬢さんを怯えさ  
せた罪は・・・君達の大切なモノで賄ってもらいますよ！」

くうううう・・・いいぞ私！カッコいいぞ私！

そんな私に、男たちは、刃物を構えてこちらを睨んでいますね・・・  
ふっ愚かな。

「デリフ！行きますよ！」

「お任せ下さい！スサノ才殿！」

「やちまえ！」

「殺す！」

「死ねええええ！」

3人ごときで私に刃向かおうとは、笑止千万！

突っ込んで来た一人目の男が繰り出す直刀の突きを半歩左へ交わしつつ、デリフを下から上へ振り上げ、そのまま、直刀の刃と握りを切断、そして、首の付けへ振り降ろす。

「ぐはあ・・・」

「まずは1人！」

両手に大型のナイフを持つ二人目がすぐさま、目にも留まらぬスピードで、スサノオがいた場所を切り刻む・・・しかし、すでにその場所は無人！

何処に！？そう思い目で周囲を探そうとしたその時！

「じふっ！」

背後から襲う衝撃に、気を失い崩れ落ちる男。

「二人目！」

「スサノオ殿！」

そして、デリフが叫んだの瞬間！

3人目はスサノオの頭上から、絶妙のタイミングで刃を突き立てる！その黒光りの剣先が、スサノオの頭に吸い込まれる！

『もらった！』男は勝利を確信・・・

だが、デリフを盾代わりに、その剣を弾き飛ばす

「ば、馬鹿な！」

弾いた衝撃で、空中に掘り出された男の胸に、衝撃波一閃！男を叩き伏せる。

「ぐはっ！俺達の、ジェットスト・・・がくっ」

「・・・ふっ、また、つまらぬものを切ってしまった・・・」

「いや、切ってませんよスサノ才殿・・・」

「雰囲気だよデリフ！もおく空気読まなきゃダメでしょうが！」

「はあ・・・申し訳ござらん」

さてと、男たちは、気絶させたから、これで問題なしつと。

○玉か、竿を取っちゃうか！とも思ったけど、優しい私は、『女の子を見ると吐き気を催す』という呪いを深層心理に掛けておしまいにしておきましたよ？

「お嬢さん、貴方を恐がらせる、不遜な輩は排除しました。これで、もう安心ですよ」

爽やかな笑顔と、優雅な仕草で、女の子を震えを消し去り、優しい言葉で、安心感を与える・・・

紳士たるもの、コレくらいは出来なけば・・・ね？

「あ、ありがとうございます。なんとお礼を言っているのか・・・」

「いやいや、礼には及びません、貴方のような、可憐な女性を守るのも、私の使命・・・それに、もう、お礼は頂きましたから・・・では」

「あ！あの、せめてお名前を・・・」  
「いや、名乗るほどのモノではありません・・・」

そう言って背を向け歩き出す私、ふふふ・・・カッコいい！カッコいいぞ私！

「スサノオ殿、いいのですか？彼女をそのままにしても？」

「いいんですよ、こうして何も言わずに去っていく・・・カッコよすぎると思いませんか」

「そういうもののですか？」

「そうだ、男は黙って、背中で語るものなのだ・・・とナンちゃんが言ってたしね」

その背中が、視界から消えても、1人の少女は、その場から動けずに、じっと見つめているのだった。

そして、彼女の耳には、インテリジェンスソードが語るその主の名がしっかりと届いていた・・・

「スサノオ・・・様と仰るのね・・・」

第33話・只今、出会到来中（後書き）

なんとか・・・

本当、いや、あはははり、

ふう・・・すみません。

### 第34話・只今、姉御投合中

・・・

「だからね！あたしは〜言ってやったのよ！このクソジジイ！つて、なのに、恍惚とした顔でこつちを見るもんだから、気持ち悪くつて！気持ち悪くつて！殴る、蹴る、何しても効果なし・・・はあ、あの変態ジジイ・・・絶対セクハラで訴えてやる！」

おかしな・・・今日は、スーと買い物に來ただけのはずなのだが、何故オレはここにいるんだ？

今、オレは、居酒屋でビールを片手に、隣の女の愚痴につき合われている。

久しぶりに酒の匂いを嗅いだからな、たまには・・・と、1人カウンターに座ってビールを飲んでただけなんだ。

本当だ。

1杯だけ、そう1杯だけのつもり・・・でもな、美味しいんだよ？  
ここのビール。

オレの好みでは、『スタウト』が好きなんだが、この世界ではないみたいなんだ・・・

だから、まあ、こつちに來てからは、エールばかり呑んでいたんだが、ここのビールな！『ランビック』なんだぞ！

今時、自然発酵ビールなんて！すげえよ！

この長期熟成されたモノだけが醸し出す芳醇な香りと苦味の中にあ





一緒に飲もおぜ」

はあく来た来た、馬鹿が来た。

いるんだよねえ、自分達の、体格とか、態度とか、品性とか、顔とか、顔とか、顔とか、全然気にしないで、声掛けてくる奴ら。

全く、鏡見る、風呂入れ、言葉勉強しろ！前世からやり直せ！って感じたよな。

「黙ってないで、なんとかいったらどうなんだあ？んくそれとも、俺様のルックスにイチコロか？」

「まじか！お前でいけるなら、俺なら、もつといい思いさせちゃうぜえ」

「馬鹿、俺だよ俺！なあ、こいつらなんか、放って俺といいことにいこうぜ？」

ああ・・・ウザイ！

こっちは、一人で飲みたくて、ここに来てるっていうのに！

どいつも、こいつも、モアイみたいなナリしやがって、この南天様に、声かけていいレベルじゃねだろうが！

あーもう！あー腹立ってきた！あーム力つく！ムカムカムカムカ・・・

「なあ、こっちのネエちゃんも、いいだろお？」そういいながら、男が南天の肩を掴む・・・が

つて、おい！触んな！

この肩はな！お前ごときモアイが触れることも、見ることも許されないんだよ！

オレに触れていいのは、スーだけなんだ！

オレの身体は、スーだけのものなんだ！

なのに、あいつつたら、あっちこっちに種を植えまくって、フラフラ、フラフラと！

オレや、櫛の気持ちも……知り尽くしてるはずなのに！

ああ〜嫌！

もお〜嫌！！

なんで、オレがこんな気持ちにならなきゃいけないんだ！

ぐおおおお……こいつらだな……こいつらがオレをこんな気持ちにさせたんだな！

ぐおおおお……許さない、許さないぞおおおお！

完全な責任転嫁だが、哀れ、南天の怒りを向けられても、男たちは、まだ気づかない。

逆に、『脈アリ』と超勘違いする始末だ。

「オレの怒りをその身に叩き込んでやるうううううう」

怒りに燃える南天が、カツと開いたその眼球が、緋色に染まる蛇の瞳だと気づいた者がいたかどうか……。

瞬きも許されぬその瞬間、人が知覚できるスピードを遙かに凌駕した、南天の拳が、男たちに、突き刺さる！

拳や、腕の動きなど、その眼で捉えることが難しいが、しかし、空気を振るわす音だけは確かに聞こえる！

歪む空間、唸る空気、そして、加速を増す拳！

そして、男たちに突き出す拳は、2本しかないはずなのに、その残像が、8本に増えたように見える！

反撃も出来ないまま、生きるサンドバックと化した男たちの死屍累々が、そこに出来上がっていく。

逃げることもかなわず、声を上げる暇もない、遠のく意識の狭間、眼に焼きつくのは、蛇のようにくらい付く8本の拳。

「はああああああ、思い知ったか、我観じたか、その身を食い尽くせ！八蛇手観音拳！」

そして、数分・・・標的となるべき男たちが一人としていなくなつたその場に、慄然と立ち尽くすのは、南天ただ1人。

「ちいゝとは、スッキリしたかな・・・おい、お前、大丈夫か？」

南天は、自分の後ろで、震えている女に、声をかけるが・・・

その女が、懐の中で握る杖の様相が見えた気がして、ニヤリと笑う。ただの・・・女ではないといったところか。

「いいぜ？お前、メイジなんだろう？得意の魔法でオレをやるなら、今のうちだぜ？」

しかし、女は、懐から手を出し、両手をひらひらとさせる。

「勘違いさせちまったかねえ？あたしは、もしもって時の保険を掛けてただけさね」

「ふふふ、いい度胸だ」

「そうでなきゃ、女1人で生きていけないのさ」

にらみ合う？見詰め合う、南天と女・・・

「その目、気に入ったぜ。オレは南天・・・お前は？」

「あたしは・・・マチルダ。」

「なら、呑みなおしだ、どこかいい店を、知っているなら教えてくれ・・・マチルダ」

「ふ、いいねえゝ着いてきな・・・南天」

マチルダと名乗った女と共に、居酒屋を出て、別の場所に向う南天。その頭には、『新鮮な牛乳と卵を買う』というスサノオからの使命は、これっぽっちも残っていなかった。

狭い路地の端にある、カウンターだけの酒場で、南天とマチルダは、かなりの量を飲んでいた。

「いや、今日は、いい女と旨い酒にめぐり合えて、楽しかったぜ」

「はは、あたしもさ、こんなに楽しい酒は、久しぶりだよ」

男の話、女の話、自分の話、周りの話、とにかく色々話しながらも、飲む飲む。

「野暮なことは聞かねえが、また会ったら、飲み明かそう・・・」

「そうさね、今度があればその時は、また飲みたいねえ」

席を立つ前に・・・南天は、懐から、金と銀の蛇が、絡み合うような装飾を施したブレスレットを、マチルダに渡す。

「なんだい、これは・・・？」

「魔よけだ、魔よけ。この蛇が啜えているこの石が、命に関する厄災から、お前を守ってくれるだろう・・・今日の礼だ、信頼の証に受け取ってくれ」

ブレスレットの真ん中で、淡い碧色の光りを放つ石・・・見つめていると、心が穏やかになる・・・そんな気が、不思議と湧いてくる。これは、かなりの値がつく代物じゃないのか・・・？

しかも、信頼の証なんて言われたら、手放すなんて出来ないじゃないな

いか・・・

「そうかい・・・随分気前がいいんだね・・・南天。いいさ、信頼の証、遠慮なく受け取っておくよ」

「ああ、かまわんさ、お前の魂の輝きは、たいしたもんだ・・・オレが男なら、惚れてたかもな」

「なにいったんだい、褒めたって何も出せないよ」

そついいながらも、本音を話せる飲み友達など、今まで出来なかったし、作ってもこなかったマチルダには、なんだか、不思議な縁を南天に感じた。

また、会える・・・そんな確信めいた勘を胸に抱きながら、その酒場を後にしたのだった。

第34話：只今、姉御投合中（後書き）

なんとか、なんとか・・・。

そんな感じですよ。

物語は、牛歩のごとくで、すみません。

第35話・只今、白濁採取中

・・・

はむはむ・・・

嗚呼、幸せ・・・

今、私は、宇宙一の幸せを感じています。

私の身体は、スペシャルな、プリンの力で満たされまくっているのです！

「はあく美味しかった・・・スサノオ、ありがとうね」

プリンを食べ終えたルイズも、幸せなオーラで包まれているでしょうね！これも世間で言われている『プリン効果』というやつですよ。

もっと、プリンの魅力を伝播しなければ・・・

プリンは世界を救う・・・心の響く言葉だと思えますよね？

思うよね？いや、思わないとダメでしょ！

しかし！ここに至るまでには、辛酸苦難な道のりが・・・あつたりなかつたり、するわけなんですよ！

私が城下町で、ゲットした新鮮な食材を引き連れつつ、学院へ戻った時には、拗ね拗ねモードのルイズちゃんがプンスカしてましてね・・・いやはや、宥めるのに少し時間がかかったんです・・・



「あ、だめですよルイズ・・・先つちよは・・・その、敏感なところなんです、だから、優しく触れてください」

「え！でも、わ、私、こんなこと初めてだし・・・あっ！ちよっと大人しくできないの？」

私は、押さえつけていないと、暴れだしそうになるそれを、押さえつけながら、ルイズを優しく諭す・・・

「それは、無理というものですよルイズ・・・ここまで来て・・・躊躇う理由もないでしょ？」

「それは、そうなんだけど・・・」

それでも、やや恥ずかしそうに・・・それを見つめるルイズ・・・いいよ・・・その表情、羞恥に染まったその頬が、私の気持ちを高めてくれる。

「さあ、そおくと、優しく触って・・・そう、根元のほうから、軽く握って下さい」

「こ、こっ？あ、温かい・・・」

「上手ですよ・・・ルイズ、次は、握る力を加減しながら、優しく、根元から・・・先つちよにに向けて、やや、引っ張るように擦ってみてください・・・」

「あ、ちよっと、ちゃんと押さえててよ！こ、こんな感じでいいのかしら・・・」

「いいですよ・・・上手です・・・そう、それを繰り返して・・・いいです・・・そろそろ・・・出ちゃうと思いますから・・・ちよっと受け止めてくださいね・・・」

「ええ?!急に言われても!あっあああああ・・・」

先から飛び出た、白い液体が、勢い余ってルイズの顔を汚してしま  
う……

「もう！出るなら出るって！ちゃんと行ってよね！あくもお……  
でも、こんなに出ちゃうんだ……それに、温かい……」

「ごめんねルイズ……びっくりさせちゃったね……でも、タイ  
ミングが分ければ、次からはちゃんと受け止められるでしょ？」

顔に付いたそれを、美味しそうに舐めとりながら、どこか嬉しそう  
なルイズがそこにいる。

「大丈夫よ、次は、ちゃんと受け止められる自信があるわ」

「ふふふ、楽しみにしてますよ？」

さて、次は、キュルケかタバサちゃんか……

後ろで控えている二人に、次はどちらがやるのか、決めてもらわな  
いと……

出る量にも限りがありますし、今日は初日ですから……

「さあ、次は、誰がするかな？」

そっぴいなながら、二人を見つめるが……何故か二人は、恥ずかし  
そうに、頬を朱色に染めている。

そして、どこかモジモジしていた、なにかを我慢しているかのよう  
にも見える……

「どうしたのかな？こんなこと、初めてだったかな？だとしたら……  
・ここで、経験を積んでおいても損はないと思うけどね？嫌なら……  
・無理強いはいしないさ……主に私が欲しいだけの話でもあるわけ

だし・・・」

そう、私は、無理やりとか、強引にとかっていうのは嫌いなんですよ。

こういうことは、やりたい人が気持ちよくやってくれたほうが・・・いいじゃないですか？

なので、強いて言えば、私1人でもできるんですけどね・・・ルイズがどうしてもって言うものなら。

「いえ、やります」

「・・・やる」

二人は、そう言うのと右と左に別れ、腰を落とす。

私は、ルイズが心配そうに、見つめる先で二人の動きに注目する。

「さっきのルイズの様子を見ていたから、分かると思うけど・・・基本、優しく！でもって、擦るときは、少しだけ力を込めると、いい感じですよ」

二人は、心配そうに、こわごわと手を伸ばす・・・

「あ、思っていたよりも温かいのね・・・」

「・・・初めて触った・・・」

「そうです、そして、できるだけ真下に向けて！下にある瓶にちゃんと入るように！そうそう、なかなか上手ですよ！」

え？なにしてるのかって？

わかりませんか？一目瞭然じゃないですか？

言葉にすると、けっこう恥ずかしかったりするのですが・・・

そう、『乳搾り』をしているんです!!

え？

もちろん、乳牛からに決まっていますじゃないですか！

やっぱりね、私は思いました！新鮮な卵は、鶏から！新鮮な牛乳は、乳牛から直接 Get すれば早いんじゃないかね。

そんなわけで、市場で、乳牛と鶏と買って来たんですよ。

これで、いつでも新鮮且つ、美味しいプリンが作れるってもんですよ！

ふふふ、完璧ですね。

まあ、そんなこんなで、たうぷりと牛乳を、ルイズ、キュルケ、タバサの3人に搾ってもらったので、今度は、私が、腕を振るう番ですね？

そして、私は、厨房の一角を借りて、超極上プリンを完成させたのでした！

わあ〜パチパチっ……

完成したプリンを目の前にして……

ああ、なんていい香りなんだ……

そして、このフルフルと揺れる魅惑の塊……

う、美しい……食べるのがもったいない……

でも、食べちゃいますが。

「それでは、お三方、どうぞ召し上がれ」

私は、器に盛った、プリンを、3人の目の前に1皿づつ置いていく。

始めてみる不思議な物体に、キュルケとタバサは戸惑っているようだが……

「ふふ、これって、美味しいのよね」

そういいながら、ホクホク顔で、食べ進めるルイズを見て、後の二人も、手を伸ばす。

「ぱくっ」

「んっ！美味しい！」

「美味……」

どうやら、お口に合ったようで、黙々と食べてますね……

やはり、真に旨き物は、言葉にならないものなのですよ。

では、私もいただくとしましょうか……

「いただきます……パクっ……うまああああああ」

ああ、堪りませんね……

やはり、プリンは至高の存在です。

身体の内側から、満たされていく感じが……

「おかわり」

あらら、ルイズちゃん、タバサちゃん……早いね、食べるの。

もっと味わって食べて欲しいところだけれど。

でも、残念、あと1つしかないんだよね……

むむむ、困った……仕方がないので、二人で半分コしなさい！

「でも、驚いたわ、スサノ才様が、突然、牛と鶏を連れて現れたと

きわ」

キュルケが、数刻前のことを思い出す。

日なたで、読書をしているタバサの横で、退屈そうにしていた目の前に、突然、スサノオと牛達が出現したのだから、驚くなつて言う方が無理である。

そして、牛乳を搾ると言い出すスサノオに、是非やりたいと、現れたルイズと共に、『乳搾り』をやることとなつたのだ。そして、今食べているプリンは、その報酬というわけだ。

「ははは、まあ、出会いは常に突然というわけですよ」

まあ、休日の過ごし方としては、よかつたんじゃないかな・・・  
そう、思いながら、プリンに舌鼓を打つスサノオなのでした。

第35話・只今、白濁採取中（後書き）

総合PV170,000越え、感謝感謝です。  
寒いと・・・指がかじかんで・・・  
すみません。

第36話：只今、魔法訓練中

・・・

「くっ、どうすりゃいいんだい！まったく！」

あたしは・・・毎日毎日、昼はエロジジイのセクハラに耐え、ハゲのしつこい誘いをかわし、馬鹿貴族の坊ちゃん、嬢ちゃんの相手をしながら、与えられた仕事もキッチンとこなし、本当なら、1杯呑んで、眠ってしまいたいほど疲れてるっていうのに！

こうして、警備の穴を探すために、夜な夜な監視してるんだよ！

お肌の張りも、気になる年頃だっというのに！

寝不足はね！

美容の大敵なんだよ！

それなのに、それなのに、それなのに！

この警備の厳しさはなんだい！

この宝物庫に収められている・・・学院の宝・・・『破壊の杖』・・・

いつになったら手に入れられるんだい！まったく・・・

「マスター・・・もう、無理ですわ・・・こんなに、ハアハア・・・  
激しいのって、初めてで・・・気を失っちゃう・・・」

あらら、キュルケ・・・もう、お終いですか？

以外に、キャパが少ないですね・・・しかし、まだまだ、私のターン！



まだまだ、終わらせないですよ！

「……こんなこと、今までやったことない……これ以上は、私も……口が、乾く……」

あらら、タバサちゃんもダウンですか……

確かに、こんなやり方は、未体験でしょうね。

しかし、私は容赦なく攻めますよ？

何事も慣れることが大切なんですから……最初はね、やっぱりツライと思いますよ？初めてという、未知との遭遇、初めての感覚、そして脱力感……

「……師匠……僕もこれ以上は……もう出せませんよ……はあはあ、こんなに出したこと……今までの記録を超えています。」

おや、ギーシュはまだイケルと思っていたのですがね？

まあ、ここら辺が限界かな？

搾り出すだけ出したから、身体は絞りカスのようにですね……

さて、年頃の貴族が、地面に大の字に転がる様は、中々見れるものではないでしょう。

どうやら、皆、中々鍛えがいがあるようですね……

「では、今日の締めくくりに、最後1発、出し切りなさい！もちろん、外したら、明日はさらに倍ですからね？」

「……え〜！？」「」

「ささ、文句は言わない！さっさと始めなさい！」

私は、3人にそう命じると、ルイズが練習している所へ近づいていく。  
ふむ、少しだけ精度が上がってきたかな？

「ルイズ、君も、ラスト1発、よく狙いなさい」

「わ、わかったわ・・・すうはあよおおし！ファイア！！」  
ルイズの狙った先にある的は、何故か爆発せず・・・そして、その奥にある壁が爆発・・・  
ルイズ・・・外しましたね・・・あら・・・壁・・・ちよつちヒビ入りましたよ？

「あ！えつと・・・今のはナシ！もう一回！もう一回やらせて！」

「残念、ルイズ、最後の最後に精度が下がった・・・ハズレだね。  
他の3人も何とかやり遂げたみたいだし・・・今日はここまで！」

・・・そう、今日は、夕食が終わったあと、魔法使いとして、鍛えることを始めたんです。

「皆の基礎の底上げが少しできたので、今日から、頭の中身を鍛えることも始めますよ」

私は、ルイズ、キュルケ、タバサ、ギーシュを座らせ、講義を始める。

本当は、もう少し後でもいいかな・・・と考えていたんだけど、なんだか嫌な予感がしてね・・・

少しだけ、ほんの少しだけ、備えが必要な……そんな気がするんだよね。

「では、今日から、私のことは、『マスター』を呼ぶように。まず、始めに、諸君達が使つ、『魔法』であるが、貴族としての矜持と、手段としても魔法、分けて考えるようにしなければならぬ……ここまではいいかな？」

「し……マスター、よくその意味がわからないのですが？」

「ギーシュ、よく考えて聞きなさい、魔法は、手段、道具の一部であると意識しなければならぬ……ということですよ」

「それは、いつたい？」

「魔法が使えるものが貴族……そうでしたね？」

「はい、そうです。」

「うん、ならば、魔法が使えないものは、貴族ではない？」

「はい、そうです」

「魔力を使い切った状態のメイジは、その瞬間、貴族ではなくなると？」

「え？いや、それは……」

「貴族とは、高貴なる魂の輝きを持って、礼節を重んじ、弱きものを助け、強きものを挫き、己の信念を曲げることなく、多くの人々

に、勇気と信頼を与え、そして、尊敬されるべき生き方をする人のことだと・・・私は思うのだが・・・これについては？」

「たしかに、そのとおりです」

「ならば、そこにメイジであること、魔法が使えることは、関係ないと思えないかな？」

「た、たしかに、そうなのですが・・・しかし・・・それは・・・」

「この国には、2種類の貴族がいると、私は考える。魔法が使えること、高位のメイジであることが貴族としての第一で、魔法が使えない存在は、人ではないと考えている者。貴族としての生き方、立ち振るまい、在り方が第一で、それ以外が二の次だと考えられる者。まあ、圧倒的に、前者が多いのだけれどね・・・ギーシュ君？」

「す、すみませんでした！た、確かに、僕もそのように考えていたことも否定しません！ですが、貴族としての在り方についても、疎かにしていたわけでなくてですね、あの、その・・・」

「いいんです、ギーシュ。君はかわった・・・そう、目覚めたんだ。だから、これから、成長していけばいいんだ。」

「はい、師匠！僕は・・・僕は・・・頑張ります！」

「で、他の皆の意見はどうか？私の考え方に賛同できなくても構わない、この世に完全なる解などありはしないのだから。だが、ここにいる以上、従ってもらっけどね」

「・・・具体的には？」

「タバサ、道具と割り切るためには、その長所と短所、威力と限界を知っていなければ使えない・・・ということですよ」

「・・・理解」

タバサちゃん・・・回転速いですね、考え方もいい、やはり・・・眼鏡っ娘は、素敵ですね。

キュルケとルイズちゃんは、どう考えているのでしょうか？  
さつきから、沈黙を維持していますが・・・

「キュルケは、どう考えていますか？」

「あら、私は、別に、魔法に対して特別視は・・・していないと言えは嘘になるけれど、私の国には、魔法が使えない貴族もいるし、別段、その考えに抵抗はないわね」

「ルイズは？」

「え？私？・・・私は・・・今まで、魔法が上手く使えなかったから、その、でも、スサノオの考え方が、とても正しいように・・・思えるから、そう考えるようにしてみるわ！」

「ありがとう・・・ルイズ。君の賛同を得られてうれしいよ」

こんな感じで、講義をしていたのですよ・・・何の為に？それは、より効率よく、『魔法』を使うため・・・ですね。

まず、手始めに、自分の属性の中で、一番魔力を消費せず、得意とする魔法を、魔力が尽きるまで、唱え続けるという訓練をしていたんです。

そして、ルイズは、何故か爆発するという属性魔法を、自分の意図する場所で爆発させられるようにする・・・という訓練をね。

これをする事で、自分の中にある、魔力の容量を把握し、耐性を付け、容量の底上げも狙います。

ゆくゆくは、戦術的魔法構築も視野に入れつつ・・・といった具合ですね。

ルイズに掛けられたプロテクトの謎は、まだ解けません。少しづつ、少ない魔力のコントロールも出来るようになって来ましたし、生徒の成長が感じられることは、楽しいものです。

第36話：只今、魔法訓練中（後書き）

本当にすみません。

UPできる内容でもないのですが・・・

少し、私用が重なりまして・・・

毎日更新は、難しいようです・・・本当に申し訳ありません。  
頑張りますので。

第37話・只今、獲物略奪中

・・・

「おはようございます、ミス・ロングビル。今日もお美しいですな・・・」

「おはようございます、ミスタ・コルベール。」

ああ、なんで、毎朝毎朝、あたしが座ってるテーブルにやってくるかねえ」

まあ、これも、あたしの美しさがいけないんだろうさ・・・あ、いや、思ってみただけさね。

しかし、このハゲ・・・女が気を持つてるかどうかも感じられないほど、ウブには見えないんだけどね」どちらにしても、ハゲとデブと髭と気障は、あたしの好みからは、OUT OF 眼中な訳で、でも、男を手玉にとるのも、いい女の条件さね。

精々、利用できるうちは、近づかせてやるさね、でも、触れさせはしないけどね！

でも・・・はあくどつかにいい男いないもんかね・・・

歳は・・・別に気にしないから、イケメンで、ガッツがあつて、少し暴れん坊的な一面もあり、不器用だけど、そのくせ、女には甘くて、でも、1人の女だけを愛し続ける一途さと経済力を持った・・・そんな男いかなあ」

はあああああ、ま、出会いは運命だしねえ」コレばかりは、あたしにもどうしようもないさね。

しかし、昨日は、いいもの見たね・・・まだ、弱いけど、あの調子



で、あと2、3発やってくれば・・・  
ふふふ、ちょっとは目処がたつってもんさね。

「ミス・ロングビル、なにやら、嬉しそうですね？も、もしかして・・・」

「あら、いやですわ、ミスタ・コルベール。私は、頼もしい方と、お知り合いになれたこの学院での生活そのものが、嬉しいのです・・・始祖ブリミエルに感謝を」

「あ、ああ、なるほど、ここは以外に居心地がいいですし、やりがいもある・・・いいところですからな」

ふふふふ、いいさ、精々、勘違いしてくればね。  
もしかしたら、今夜あたり・・・楽しみさね。

「よし！」

私達は、昨日と同じく、魔法の訓練を裏庭でこなしていく。

私は、コモン系魔法以外は、やはり爆発しちゃうので、スサノオからは・・・

『ルイズ、君の魔法は、何故か爆発してしまう・・・だから、逆アプローチで、進めよう。』

そんな訳で、私は、「私の爆発させたい所を爆発させる」という訓練をしているの。

最初は、的が大きくて、簡単だわって思っていたのだけれど、訓練

が進むにつれ、段々、的が小さくなつていくから、外れて……その、違うところを爆発させちゃったり……でも、毎日の積み重ねって大切だつてことも理解できるし、それに、頑張ると、スサノオが……ほ、誉めてくれるし、スタンプも溜まるし、なんだか、嬉しいし、皆とこうやっているのも、楽しいし……この学院に来て、こんなに充実した気持ちになるのつて初めてかも……だから、「スサノオに頑張れ」つて言われると素直に頑張っちゃえるの。

『ボンツ！！』

「あ！？」

「あ！じゃないですよ！ルイズ！今、集中してませんでしたね？」

「あ、いえ、そんなことは……」

「言い訳は、いりません。ちゃんと集中しないと！わかりましたか？」

「はい……」

あああああ、スサノオに怒られちゃったわ。

ふう……よし！気合よ気合！集中集中つと。

ルイズ……なかなか出来るようになって、すぐ、調子に乗るクセは中々直らないですね……

困ったものです。でも、やれることがわかって、結果が出せて、ソレを分かち合える友がいる。

ルイズの魂が、綺麗に輝きを増していますからね・・・いい傾向ですよね？

惜しまれるのは、あの、あれが、もう少し、成長するとねえ？

なんていうか、見ていても、楽しみが・・・いやいや、私は、純粹に、生徒達の成長を願っているものであって、決して、男の欲望的な視線で、彼女達を見てはいないのですよ？

杖を振り度に、眼に入ってくる、キュルケの・・・いけない魂の揺れ具合が気になるなんてコトは、ないんです！

本当ですよ？ただ、その、なんていいましょうか、余り訓練の邪魔になるようなら、なにかこう、押さえつけるような、縛り付けるようなことも考えてあげないとなあ〜って感じの・・・いえ、なんでもありません。

「さて、今日は、このぐらいにしましょう・・・やり過ぎはよくないですしね」

「はあ〜疲れた」

「・・・ふう」

「汗かいちゃったから、お風呂に入りたいわ」

ギーシュも、タバサも、キュルケも、皆、良く頑張っていますね。

でも、まだまだ、いろんなことを教えないといけませんからね・・・もっと厳しくしたいところではあります。

「最後に・・・えいつ!!」

『ドガンっ!!』

ルイズ……頑張り屋さんなのは、いいけど、休息も必要なことな  
んですよ……って外してるし！  
ま、いいでしょ。何事も経験経験っと。

「では、皆々スタンプ押してあげましょね！はい、カード出して……」

私は、今日の訓練を終わりにして、皆のカードにスタンプを押して  
いく。

やはり、思うに、このスタンプカードの魔力って凄いいよね……  
少し溜まってくると、もう少し、もう少しで……って欲が出ちゃ  
うから、ついつい、『ポイントのために』って感じで、趣旨が入れ  
替わっちゃうんだよね……コレを考えた人は、まさに神……い  
や、悪魔ですね。

そんな感じで、和やかな私達を襲う不審な影！

なんか心配するな……なんて、頭の端っこのほうで、感じてはいたん  
ですけどね？

こんな大きな……ゴレム？いつの間につったの？

「ギーシュ、疲れてるっていった割には、すごいじゃん」

「え？師匠……僕は何もしてませんよ？」

は？だったら……これは？

なんて疑問符を頭に浮かべている間に、なんだろ？  
ストレスかな？

それとも、やるせない思いで、胸が締め付けられているのかな？  
私達の目の前で、巨大なゴレムさんが、壁に拳を打ち付けていま  
すね……

うむ、いいパンチだ！優秀なトレーナーが付けば、更に上を狙える

な・・・

ドツカンドツカンと凄いい音を立てて、壁を殴っていますが、この壁・・・強いね！

あの拳の質量は、かなりのモノだと思うのだけど・・・『壁 VS 拳』

どっちが勝つのかな？

「よおし、壁と拳、諸君はどちらに賭けるかな？」

「スサノオ・・・この壁はね、スクエアクラスのメイジが、固定化や強化をかけてるのよ？そっくらちよいのゴーレムに打ち抜けるわけないじゃない・・・私は、壁！」

「ルイズの言うとおりね、でも、敢えて、ヴァリエール家とは逆にかけるのが、ツエルプストー家のステータス・・・あはっ、私は、ゴーレムに！」

「・・・ゴーレム・・・なんとなく」

「僕は、壁だね、スクエアメイジの実力を信じたい！それに、土のゴーレムでは、流石に無理があると思うからね」

「おや、でそろいましたね、2対2に分かれましたか。」

「なかなか、面白いですね・・・私は、どうでしょうか？」

「それで、何をかけるのよ！」

「おお、ルイズちゃん、やけに乗り気ですね・・・それでは・・・」

「勝った人には、スタンプ倍押し又は、牛乳プリン進呈ね」

「牛乳・・・ぷりん？・・・それは、なに？」

ふふふ、タバサちゃん、さっそく喰いついてきましたね？

もう、君は、私から・・・いや、プリンから逃げられない・・・プリンの魅力に取り憑かれちゃったようですね・・・

「この前、ご馳走したのは、極上カスタードプリン。そして、今回は、激ウマ牛乳プリンを作る予定なんです・・・フルフルと揺れる、魅惑の存在、搾りたての牛乳の風味と甘さをたっぷりと含んだ、あの味は、なるほど、戦争が起きても仕方がないと・・・それくらい美味しいんですよ！」

「え？なに？その、戦争って！」

「そうか、こちらでは知られていないんだね・・・プリン戦争・・・正式には、『古カスタード王国の七日間戦争』と歴史書に銘を打たれた、壮絶な争いだった・・・ルイズ・・・人はね、時に、負けるとわかっていても、傷つくとわかっていても、戦いに赴かねばならない時がある・・・」

「そ、それって・・・」

「争いの経緯など些細なことだった、しかし、フタを開けてみれば、もうお互いが引き返せないところまで、来てしまっていたんだ！あの時・・・私が・・・カラメルという存在を軽視していなければ・・・あんなことには、あんなことには・・・」

「だから、それって・・・」

「愛していた・・・私は、心の底から・・・なのに！なのに！なのに！・・・なぜ、あの時、本当の気持ちを素直に言うことができなかったのか・・・形も大切さ、でも、ポリウムも欠かせないと思っただ！あの、たゆんつと揺れるその瞬間が堪らないとね！だが、大きければいいというわけではない！要はバランスなんだ・・・その一部分だけで評価してはイケナイと！押しつぶされるときに出来る形の変った瞬間！斜め45度の視界に現れる谷間！こう、直接触れたときの、神秘的な柔らかさ！下からのアングルからみる桃源郷・・・etc・・・私はね、今でも、思い出すたびに、悔やまれるんだ・・・ルイズ、いいかい、人の生きられる時間は限りなく短い、しかし、可能性は無限大なんだ！その一瞬一瞬を大切にしないといけないんだ！わかったね？」

「え？ええ・・・わかったわ・・・スサノオ・・・辛い思いをしたの・・・ね？」

「昔の話さ・・・昔のね」

どんな争いが起きたのかは、私にはわからないけど・・・スサノオ、夜空を見上げて、何かを思い出しているよう・・・きっと、私なんかには、理解できない、とても悲しいことがあったのね・・・でもね、スサノオ、私、あなたが傍にいてくれるだけで、幸せなの・・・だから、この気持ちで、貴方を包んであげる！だから、そんな、寂しそうな目をしないで・・・

私は、スサノオに、もっともっと優しくしてあげよう・・・思っ  
たわ。

第37話・只今、獲物略奪中（後書き）

本当に、申し訳ないです。

ちうと、忙しくて、更新は、少し、間隔をあけてしまいそうです。



第38話・只今、会議紛争中

・・・

えい！そこだ！って中々強いですね・・・壁。

流石、魔法学院の壁だ・・・そこいらにある三流の壁とは、気合が違うって感じてしょうかね？

しかし、このゴーレム・・・でかいだけで、格闘の何たるかも知らないと見える。

だって、腕を打ちつけるだけで、威力がないんですよ？

質量的優位性を活かさきれていないんです！

なんだか、見ていてイライラしますね・・・

「やい！このヘッポコゴーレム！お前の取り柄は、でかさだけかあ！拳つてのはなあ！こうやって撃つんだ！」

私は、ガンガン壁を叩いているだけの、ヘッポコゴーレムに、拳を撃つ抜く手本を見せようと・・・

脚は三戦立ちサンチ、脇はギュツと閉める、そして、お腹に力を溜めながら呼吸を整え、身体の中にあるコスモを燃焼させるように・・・撃つべし！

『バシユツ！！』

ふっ、どうですか、この完璧な打ち抜きは！

こんな壁・・・クラゲに穴を開けるよりも簡単なのです。

ふふふ、いい仕事したって感じですね。

「ス、スサノオ！？い、今の何？か、壁に、穴・・・開いたんだけど！」

「師匠！凄いです！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「マスター！それ魔法？」

「まあ、まあ、諸君落ち着きたまえ。今は、太古の昔、女神を守護する『聖闘士<sup>セイクト</sup>』が神の軍団と対峙した時に放ったとされる、伝説の技・・・その名も、ペガサス彗星拳！」

ああっ！

もう！堅い壁だね！

ヒビが入ってるんだから、そろそろ打ち抜けてもいいはずなのに！早くしないと、警備隊の連中が来ちまうよ！

それに、ガヤガヤと足元もうるさいやね、離れてないと踏み潰すよ！ん、なに！おいおい、なんだいありゃ！

何か叫んでた男が・・・壁に穴開けちまってるよ！

どうゆうことだい！

ふむ・・・そうか、勢いが足りなんだね・・・よおし、ここは、玉碎覚悟で！

あたしは、少しゴーレムを下がらせ・・・振りかぶった巨大な腕に、腰の回転を加えながら、捻り出すように打ち付ける！！

『ドガアアアアアン！』

ふふふ、やったね！やりました！

くううううう……この瞬間をどれだけ夢見ていたことか！  
ああ、これで、明日から、少しはゆっくり寝ていられるねえ……  
やっぱり、夜更かしは、肌のためにもよくないし、張りを保つため  
の化粧品もばかにならなくなってきたしねえ。昔は、そんなこと気  
にしないで、化粧水をちよいちよいつけてただけで良かったのに。  
……はあ、なんだかね、気苦労のほうが多いんだよね……最近。  
でも、これで、少しくらいは楽できるか……  
はっ！ダメダメ！感動に浸ってる場合じゃなかった！  
さっさと、お宝を頂いて……張り紙も……よし！  
とっとと逃げないとね！

おっと！これは何のイリユージョン！ゴーレムの開けた穴から、人  
が飛び出し……消えましたよ？  
瞬動？瞬間移動？次元交差？私が驚いている間に、ゴーレムも、た  
だの土くれに戻っちゃって……  
引田天功もびっくりです！なかなか、いいもの見ましたね……

「さて、諸君、見世物も終わったし、各自解散としよう。でもって、  
賭けの勝者は、キュルケとタバサ！商品は、また明日ね？」

私は、皆にそう告げると、『ハイハイ、部屋に戻った戻った』と  
団員達を帰らせる。  
もちろん私も、ルイズちゃんと共に、部屋へ戻りながら、思考の海  
へ手を伸ばす……

ゴーレムの術者は、土系統の高等メイジ……そして、脱出経路は、  
土の中か？  
ルイズが作った壁の綻びを狙う辺り、夜な夜な監視していた……  
ということかな？

なかなかどうして、この世界の魔法使い・・・面白いじゃないか！  
科学の進歩しない世界観、全てが魔法に依存する歪さ、なんらかの  
関与か、呪縛キアスに囚われているのでしょうか・・・  
いつそ、私も、魔法使いのフリを試してみましようか・・・

朝、いつも通り朝練をしようと思つた私達に、『詳しい事情が聞  
きたい』と、有無も言わず、会議室に連行していく教師達。  
なんでしようね、この扱い・・・お腹が空いているからでしょうか  
？ちよつと、不機嫌ですよ？

会議室では、教師達が好き勝手に、責任の擦り付け合いをしている  
真つ最中。

私達ちも、あれこれと、事情聴集されました・・・  
そして、聞くところによると、宝物庫ホウモツの壁に、『土くれのフーケ』  
という盗賊のメッセージと共に、『破壊の杖』という宝物が盗まれ  
ていたらしい。

「衛兵達は何をしていたのだ！」  
「所詮は平民、当てにしているほうがおかしいのだ！それよりも当  
直は誰だったのだ！」

こんな感じで・・・なんとも浅ましい・・・コレが貴族の子弟を、  
教育すべく集められた教師なのでしょうか？  
教師がこんなでは、教えを請う生徒の質も、高が知れるというもの  
ですね。

この国の『貴族』と名ばかりの人種には、落胆というしかありません  
ん・・・  
スサノオが、観察していると・・・

「ごほん！諸君、静粛に、責任の転嫁をしても事態は解決せぬ。責任があるとすれば、ワシも含めここにいる全員にある！ここに居る何人が、キチンと当直をこなしていたのかね？」

オスマンは、教師全員の顔を睨みつけるが、教師達は俯くばかり・

「これが現実じゃ！だからこそ、この事態は、我々で解決せねばなるまいて……然るに、この中で、魔法学院の名誉を守る為に、盗賊の討伐と宝物の奪還ホウモツに赴く意志のあるものは、杖を掲げよ！」

「」「」「」「」「」「」「」「」

「誰もおらんのか！この魔法学院、そして、貴族としての責任を果そうという者はおらんのか！」

「」「」「」「」「」「」「」「」

「さて、見下げ果てたものじゃて……この国のメイジの質、貴族の誇りは凋落するばかりじゃな……」

ぼそつと呟いたオスマン……だが、その言葉の重みは計り知れない。

「ん……？そういえば、ミス・ロングビルはどうしたのじゃ？」

「はて？朝から見ておりませんが……」

「この非常時どこへいつておるのだ……」

周りを見渡しながら、自分の秘書の所在を確認するオスマンだが・

すると、会議室のドアが、バタンっと開き、ミス・ロングビルがやってくる。

そして、朝から、調査に赴いていたこと、聞き込みの結果、ロープ姿の不審者がいたこと、森の方角へ逃げ去ったこと、なにやら大きな目の杖のような物を持っていたと・・・報告をする。

「仕事が早い・・・して、居場所は掴めたのかね？」

「はい、およそですが・・・森の端に、小屋があり、最近そこに、ロープ姿の男が入り込んでいたと・・・ここから、馬で4時間ほどの場所らしいのですが・・・」

「なるほど、ならば、追いかけるなら急いだほうがいいじゃる・・・誰か！誰か勇氣と誇りを持って、この事態を解決せんと思う者はおらんのか！」

オスマンの檄にも、教師達は、ごにょごにょと言いつつ、もしくは無言で俯く者ばかり・・・  
咳払いをし、目を剥き睨みつけるが、皆、萎縮するばかりで、杖を上げる素振りすらない。

ルイズは、そんな教師達を見回し、そして、決心したかのように、自分の杖を掲げる。

「私が行きます！」

「なんと！ミス・ヴァリエール！おぬし・・・本気かのか？」

「もちろんです！」

すると、キュルケ、タバサ、ギーシユも杖を掲げる。

「おぬしたちも・・・危険じゃぞ？」

「ルイズに負けてられないわ」

「・・・仲間」

「僕は、貴族ですから」

頷きながら、4人をじつと見・・・そして、教師達へ目を剥きだし怒りを向けるオスマン・・・

「生徒達が、勇気を出しておるに、お前達に教師としての、貴族としての矜持！誇り！なにも持ち合わせておらんようじゃな！情けない！これが、わが王国が誇る魔法学院の実力か！」

しかし、困ったように顔を合わせあう教師達に、溜息をつく・・・

「ふう、今更・・・か。仕方が無い、君たちに任せよう・・・たのむぞい」

オスマンは、4人に暖かくも真剣な眼差しで向き合う。

「では、失礼します。ミスタ・オスマン・・・確認したいことがありますか、2、3よろしいですか？」

スサノオは、1歩踏み出し、オスマンに話しかける・・・

「君は・・・」

「ルイズの使い魔、名はスサノオと申します。」

「ふむ・・・君がか、して、確認したいことは？」

「はい、1つ、宝物ホウモツの特徴と効果、2つ、盗賊フーケ殲滅の許可。  
3つ、この魔法学院の誇りに見合う報酬。以上です」

「な、なにを言い出すのスサノオ・・・」

「いいかいルイズ、相手は盗賊だ、そして、凄腕のメイジらしい・・・つまり、戦闘になった場合、捕縛を考えての攻撃では、命取りになる可能性が高い。そして、協力者・仲間がいけないと言い切れない。ならば、最初から、殲滅する心つもりでいなければ、死と言う名の王冠を被るのは、君達だということだ・・・そして、それに見合う報酬が用意されなければならないほど、危険だということだよ」

私は、皆の耳に聞こえるように、大きな声で、ルイズへ話す。

そう、こんな茶番的な捕り物で、大事な団員達を傷つけることは許さないし、させない。

しかし、この場に集う似非貴族どもには、猛烈に怒りが募る・・・  
どしてくれようか・・・

「なに偉そうなことを言っている！平民ごときが！黙っている！」

教師の1人が、声を荒げ、スサノオに言い募る・・・自分よりも弱いものを見つけ、嬉々としているよだ・・・しかし。

「偉そうな？・・・平民ごとき？・・・黙っている？」

スサノオが、言葉を紡ぐたび、その身にある封環にヒビが入り・・・



そして、砕け・・・床に落ちる。

「当たり前だ平民！ここは貴族のみが発言を許されるのだ！お前のような平民ごときが発言していい場所ではない！」

自分の貴族・メイジとしての優位性を信じきっている教師の1人が、また、スサノオに対し言及する。

「ああ・・・踏んだわ」

「うん、踏んだようだね」

ルイズと、ギーシュは、スサノオが押さえ込みながらも、漏れ出している大きな力に気づきながら、教師達が、虎ならぬ、最強種ドラゴンよりも恐ろしいモノの、尾を踏んでしまったを確認しあう。

ああ・・・終わった・・・スサノオを怒らせちゃった・・・どうしよう・・・南天・・・こんなときにドコに行ってるのよ！

ああ、今日で、終わりかもね、私も、魔法学院も・・・ルイズは、こんなことなら、昨日、クックベリーパイもう1つ食べておくんだったわ・・・それと、スサノオと・・・しちやうという野望が！と心残りを胸に思った。

「ふふふ・・・ははは・・・なんと、なんとも愚かな・・・くだらん・・・全く持つてくだらん生き物だな・・・不甲斐無い自分の姿を誤魔化さんとするその言動、自らの不遜を気づきもしないその言動、貴様達が、生きている必要を、私は感じないが？」

あふれ出しそうな、とてつもない力を、ぐっと抑えながら、醒めた目で、教師らに告げるスサノオ。

しかし、自分達の言葉の正しさを信じることに、平民への侮蔑がそれ

に気づくことができず、さらに、踏みつける・・・

「口の利き方に気をつける！平民ごときが！ここで、無礼うちにしてかまわんのだぞ！」

「ほお？出来るかな？出来るならば・・・やってみせるがいい・・・

」

スサノオが、言い放った瞬間・・・その空間に、息も出来ないほどの濃厚な殺気が充満し、スサノオを除く全ての者が、瞬きすら出来なくなる・・・

そして、体中を流れる汗を知覚しながら、ドラゴンの口の中に座っているような・・・そんな感覚を感じていた。

生物としての本能が、魂が、自らの罪により、自壊を選択することも当然のように・・・そう自然を思えるような、そんな空間の中で、スサノオは、ルイズ達に背を向け、名も知らぬ・・・知る必要もない教師に向かい、言葉を投げる。

「うぬも存在、それ自体が罪である・・・何も産み出さず、何も守らず、何も理解しない・・・だが、私は慈悲深い・・・そなたの大切なものを1つだけ壊すことで、許そうではないか？己の命と誇り・・・どちらが大切な？」

言葉は聞こえる・・・しかし、誰も、口も、なにもかも動かさない・・・

しかし、スサノオは、魂の言葉に耳を傾ける。

「なるほど、惜しいか、命が惜しいか・・・なれば、命は助けよう、命はな」

その言葉と同時に、部屋に満たされていた、殺気が綺麗に消えうせ、清涼感あふれる水の香りに癒される。

そして、スサノオに杖を向け、魔法を唱えようとした教師二人が素早く動く・・・

しかし、そのまま、無言で杖を振るばかり・・・鋭い眼光で、スサノオを睨みつけるが、それだけだ。

そして、あたふたしながら、そのばにうづくまる・・・周りの教師達に何かを伝えようとしているようだが、わさわさと涙混じりに、腕を振り回す・・・

怪訝に思ったルイズは、スサノオに素直に質問する。

「ス、スサノオ？今、何をしたのかしら？てっきり大暴れしちゃうのかなって思っていたのだけど」

しかし、スサノオは、にこやかにするだけで、何も答えようとはしなかった。

だが、その笑顔にとてつもない怖さを感じ取った。

そして、スサノオに喧嘩を売った二人の教師が、スサノオの神通力により、メイジがメイジたる能力・・・魂の力を魔力に変化する力を消し去ったこと、二度と言葉を口にすることが出来なくなったことを知るの、この事件が解決しなかつと後だった。

第38話・只今、会議紛争中（後書き）

本当に、すみません。

もう、なんといいましょうか、好き勝手な私を許していただきたい。

### 第39話：只今、秘宝奪還中

.....

私の名前は、ルイズ。

あの時のこと・・・ありのままに話すわね？

私たち・・・そう、あの時、学園長の前でフーケ討伐の任を受けた、私と、キュルケ、タバサ、ギーシュ、そして、スサノオ5人？は、ミス・ロングビルの案内で、目的の場所までやってきた。

「あれが、報告にあつた小屋ですわ」

ミス・ロングビルが指さす小屋を、全員で確認しながら、道中に決めた通りの作戦を実行するために、スサノオの合図を待ったの。

「では、ミッションスタート！」

腕を組みながら、仁王立ちしているスサノオの掛け声を合図に、私たちは動き出した。

ワルキューレを盾代わりにしたギーシュと、風の感知魔法を纏いながら移動するタバサが、まず小屋に向かう。

私とキュルケと、ミス・ロングビルは、小屋の周りを警戒。

スサノオは、指揮官としてスタート地点での全体監視。

そして、ギーシュ・タバサチームが、慎重に小屋に取り付き、侵入を試みる。

二人は、勢い良く、開けられた扉と共に、室内へ入り込む。

転がり込んだ部屋の中で、ライトの魔法で照らされた室内は、無人。そして、警戒を解かずにトラップの有無を確認する。

辺りを見渡し、何も無いと思われた小屋の中から、二人は大きめの木箱を発見する。

予め定められた行動予定の1つとして、無言のまま、木箱を室外へと運び出すギーシュと、周りを警戒するタバサ。

そして、皆が注目する中、木箱がスサノオの前にて、開けられる・

「これが、破壊の杖……？」

私が出してしまった疑問の声に、反応するのはただ1人。

「ふむ、興味深い」

スサノオが、思慮深く破壊の杖を見つめながら、そう呟いた。

「この世界、この時代に、このようなものが存在するとは……ね」

「で、これは何なの？杖にしては……変な形だし、マスターはご存じなのね？」

キュルケの質問は、皆の意識が同調したようなものだった。

「その前に、片づけなくては……」

そういいながら、振り返るスサノオの前に、身の丈30メートルにも及ぶ巨大な土ゴーレムが出現していたのだった。

余りのことに、スサノオを除く皆が驚いていたが、そんなことお構いなしに、ゴーレムは、その巨大な拳を私たちの振りかざしてきた。当たる！そう思った刹那、大きな衝撃音と辺りに響いたのだけど、音の元となる衝撃も痛みも、私たちには届かなかった。

恐る恐る目を開けると、そこには、巨大な土の拳が頭上に留まり続けていたの。

「物理的な重量でいえば、かなりの破壊力だが……残念ながら相手が悪かったね」

見えない壁に遮られているように、押しつけられた巨大な拳がギギギ……と軋んでいるような音をだしている。

そんな現象を目前にしながらも、スサノオは、悠然とゴーレムの、その奥を射抜く。

「隠れていないで、出てきたらどうですか？盗賊さん？」

スサノオの言葉を受けて……フードをかぶった人影が姿を現したの。

「なんだい、その反則な力は……随分なことだねえ」

そう話し出すその声は、聞いたことのある声……でも、話し方

が……

「おやおや、お嬢ちゃん達には、わからないかい。ま、そんなもんだらうねえ」

そういいながら、フードを取った人影は……そう、ミス・ロングビルだった。

え？なんで？私は、そのことに思考が追いつかない。さっきまで、私のそばに……いたはずなのに？

「……目的は、何？」

タバサの冷たい声が、突き刺すように飛んでいく。

「おやおや、つれないねえ！私はね、知りたいだけさ、その杖の使い方だね」

杖の？え？どういうこと？理解できない……何を言っているの？

動転し、思考が追いつかない私は、呆然としながら見つめるしかなかった。

その声、スサノオの声を聞くまでは！

「アテーション！ここは遊び場ではない、戦場だ！」

そうよ、そうだわ！

ここは戦場！

命の狩場！

生き抜くことで、己の正しさを証明せしめる唯一の場！



スサノオの声を聞き、皆、我に返り、自分たちの立場と役割を思い出す。

ギーシュは、杖を振り、ゴーレムの足下一帯を砂地へと錬金。

タバサが、その砂地に、空気中の水分を凝縮させて混ぜ合わせる。

突然現れた沼地に足を取られたゴーレムが、傾き掛けたタイミングで、キュルケの特大火力が炸裂！

超高温に晒されたゴーレムが、陶器のように焼き固められていく。

そして、ルイズの爆破魔法！

杖で、狙いを定めた場所が、爆音と共に、砕け散る。

一連の流れるようなコンビネーションに、反撃する間もなく、ゴーレムは撃沈。

啞然とするミス・ロングビルに、油断することなく、視線を合わせる。

どう？私たちのコンビネーションは！

対ゴーレム用の戦術パターンBよ！

ここに来る途中に、考えた作戦だけど、うまくいったみたい。

でも、ここで油断しない、残心よ。

あなたの心が折れるまで、私はあなたを爆破するのをやめない！

「勝負あり……ですね、盗賊……いや、ミス・ロングビル？」  
スサノオの言葉に、身構えるミス・ロングビルは、ニヤツとしたし  
たかと思うと、後ろに飛び退く。

「ちつとばかり油断したみたいだけど、勝負はここからさ！」

そう言いながら、杖を振るうと3体の巨大なゴーレムが、地面から  
現れ、こちらへと突進してくる。  
勢いよく倒れるように、突っ込んでくるゴーレムとの距離が、ドン  
ドン近くなる。

くっ、恐い。

でも、逃げないわ！

私は貴族、敵に向ける背を持たない者！

「ギーシュ、Cプラン！」

「了解だ、ルイズ！」

私は、地面に向けて、連続唱和！

直接、ゴーレムへ向けて、爆破を繰り返す。

爆破により、やや、勢いは収まるものの、地面から土を補充するゴ  
ーレムには、効き目が薄いみたい。

ギーシュは、直接、吸収する地面との接点をなくすべく、地面を青銅に錬金していく。

これで、補完できないゴーレムを打ち倒すだけ！

そして、タバサは、ゴーレムの足を足し止めすべく凍らせていく。

キュルケも、超高温の火の玉を別のゴーレムの足下に！

しかし、それでも、ゴーレムの突進は止まらない！

詠唱し続ける私の魔力も、ドンドン限界に近づいていく。

正直、3体の巨大ゴーレムを一度に対するには、手数も、威力も足りてなかった・・・

「数は力だよ、兄貴！」

そんな電波を受けながら、いくら特訓で力を得たとしても、戦い慣れた者に対しては及ばなかったか・・・そんな思いが沸き上がるけど、何も良い手が思いつかない。

ここまで・・・なの？

「まあ、初めての实战ですから、こんなものでしょう」

私たちの後ろから聞こえる、その声。

私の最高の使い魔、スサノオ。

「いいでしょう、ならば、この威力、思う存分確かめるといい」

破壊の杖と呼ばれる、銀色の細い棒状の杖を、片手で握りしめたサノオ。

『フンっ』を念を込めると、手にした杖から、光り輝く緑色の光が、剣のように飛び出した。

破壊の杖を構え、ゴーレムへ切り込むサノオ。

振るう剣は、残像を残し、緑色の綺麗な軌跡が見える。

剣を振るう度に、吐き出される奇怪な敵声

『ブウオン……ブウオン……』

滑るよな移動で、舞いのような動きで、1体、また1体と切り刻む。切られたゴーレムは、何故か、爆発とともに砕け散り、あっという間に、その姿を土くれに変えてしまうのだった。

「これこそ、古き時代、ジエダイの騎士が使いこなしたという、フオースの力！」

その光り輝く緑色の剣先が、ミス・ロングビルの首元を刎ねると、誰もが思った瞬間、半透明の障壁が、その剣を止めた！

ジジッ……そんな音を出し、首元で止まるその剣を感じながら、ミス・ロングビルは、生きた心地がしない。全身から吹き出る、異様な汗が止まらない。そして、何故、剣が止まったのかもわからない。

い。

「不可侵の守り・・・なるほど」

なにが、なるほどなのか・・・わからないけれど、結局、剣をおさめたスサノオは、全員に撤収の合図を出すのでした。

「で・・・私はどうすればいいんだい！」

捕らえようともし、拘束しようとしてもしないスサノオに、ミス・ロングビルは、やや、切れ気味に吠えた。

無言のプレッシャーに耐えかねてのことらしい。

「特に、何も？」

「それって、どういう・・・」

「つまり、あなたは、守られている。私は容認するだけです。この子達に、軽くではありませんが、実戦経験も積まることができたですし、命の取り合いも経験できた。己の未熟さにも気づけたでしょう。あとは、覚悟ですが、それはまたの機会でもいいですから、今回はこれでお開きですね」

「だから、それって・・・」

「南天・・・この言葉に、聞き覚えは？」

「え？それは・・・」

「いえ、応えなくてもいいです。つまりは、そういうことですよ」

「このブレスレットに……そんな力が？」

「ま、それでも一応、神の力が込められてますからね、命拾いしましたね。」

「……………」

「盗賊は成敗。そして、破壊の杖は回収。討伐メンバーに欠員はなし。そういうことで、お願いしますね……皆さん？」

スサノオの願いは、決定事項。皆、頷くしかない。だって、反対したところで、覆った試しがないのだ、主にこういう荒事に関しては。

「さ、早く帰って……いいことしましょうね？」

そそくさと、馬車に乗り込むスサノオを追いかけるように、皆、馬車に乗り込む。

「……………なんだい、まったく、どうしたらいいんだい……………」

そうばやきながら、御者として馬車を操るミス・ロングビルの姿は、疲れ果てていた。



第39話・只今、秘宝奪還中（後書き）

忘れさられた・・・そんな感じで更新です。

やや、表現に違和感があるかと思いますが、勘弁して下さい。

少し時間は、かかるとおもいますが、細々と更新していく予定です。  
すみません・・・はい。



第40話：只今、任務帰還中

.....

「普通でいいんですよ」

は？

なにそれ？

わけ・・・わかんないんですけど？

あたしは、馬車の制御をしながら、隣に座る、スサノオの顔をマジマジと見る。

なんだいこの男・・・あたしの常識外生物だよ・・・まったく。何を考えているんだろうね・・・

あたしは、マチルダ。

またの名を、ロングビル。

ん？何故、名前が二つあるのかって？

いいんだよ！

乙女には、秘密の1000や2000あって当然なんだ。だから、なにも問題はないわけだ。

しかし、あれだ、このスサノオという男・・・ヴァリエール嬢ちゃんの使い魔？

てつきり、あたしを捕まえて、王宮に突き出すのかと思いきや、何もしないときたもんだ。

そして、もう一度、あたしは聞いたんだ、『あたしは、どうしたらいいんだい』ってね。

そしたら、さっきの答えが返ってきた・・・  
もう、わけがわからなくなっても仕方がないだろ？

確かに、あの時、あたしは、もう死んだ・・・そう思ったよ。  
緑に輝くあの剣が、あたしの首元に近づいてくるのが、わかった瞬間にね。

でも、結果的には、そうならなかった。

あたしの首は、離れることなく繋がったままだし、不思議な力が、その剣を止めていたしね。

あの時貰った、このブレスレットが、あたしを助けてくれたことは事実だ。

あの夜、めったら強い女・・・南天と名乗った女に貰ったこれは・・・

「魔よけだ、魔よけ。この蛇が啜えているこの石が、命に関する厄災から、お前を守ってくれるだろう・・・今日の礼だ、信頼の証に受け取ってくれ」

南天・・・いつたい何者なんだい・・・

それに、スサノオは、『神の力が込められていますからね』なんて言っただけ、神って・・・なんだい？

このハルケギニアの神は、始祖ブリミルだけじゃないのかい？

うう・・・だめだ、あたしにはわかんないよ！

はあ・・・命は助かったみたいだけど、これからどうしたらいいんだい・・・

あたしのごとは、不問にしてくれるみたいなのを言ってくれてたけど、どういってもりなんだろ・・・

はっ？

ま、まさか!?

このことを盾に、あたしのこの身体要求して……  
逆らえない……あたしに、あ、あんなことや……こ、こんなことを……

もしかすると、今、巷で読まれている、『冥土達の午後』に書いてあつたような!?

それとも、まさか!この前読んだ『お仕置き冥土の夜』のような・

だ、だめだよ、あたしは、これでも、純血をまもってるんだから・

これでも、生まれは貴族の出なんだ、そう簡単に、その、あれを許すなんてことはしないのさ

でも、もし、迫られたら……あたしは、どうすればいいのさ?

逆らえない……そう、逆らえないんだ……もし、このことが公になって捕まったりしたら、故郷に残してきたあの子達の面倒は誰が見るっていうんだい!

なら、仕方ないじゃないか、しくじつちまったのは、あたしの責任だ。

受け入れて、その上で、活路を見いだすしかないじゃないか!

そうさ、それしか……今のところ手だてがないのさ

だから……ここはあたしの魅力で、逆にうまくやってやるさ

大人の魅力を思い知らせてやる……

ふふふ、よし、そうと決まれば……この男、絶対に落としてみせる!

覚悟しておきなよ……

「ふふふ……ふふふ……」

青くなったり、赤くなったり、ブルブル震えたり、唸りだしたりと、なんだか忙しそうなのミス・ロングビルの横に座りながら、スサノオは考える。

あの宝玉を渡す関係である以上、この女を無下に扱うと・・・怒られるな・・・ナンちゃんに・・・

仕方ないなあ・・・めんどくさいけど、面倒みますか・・・はあ

「ミス・ロングビル・・・ミス？少しお話をしたいのですが・・・よろしいか？」

「あ、ああ、かまわないよ・・・あたしも、聞きたいこともあるしね」

「とりあえず、今まで通りの生活を送って下さい。ただし、今回の事は、他言無用。学園長には、私が説明しますので、話を合わせて頂けると助かります。」

「わかったよ、こっちは、情けを掛けられた方だ、あんたの命令には従うさ」

「素直なことで、で、聞きたいことは？」

「えっと、そうだね、このブレスレットの秘密と・・・あんたが・・・あたしを助けた理由を知りたい」

「ふむ、そうですね・・・まあ、簡単に言いますと、この石は、ある種宝玉となりうるもので、神の力の一部が宿っている・・・そういう類の、そうですね、こちらの言い方で、マジックアイテムといったところでしょうかね？」

「そ、そんな、大層なもんだったんかい・・・これ！そうか・・・まあ、凄いものだということはわかったよ。じゃあ、あたしを助けた理由を教えてもらおうかね？」

「ん？そうですね・・・まあ、そのブレスレットをあなたに渡した人物・・・南天が、あなたを気に入ったようなので、その意志に考慮した・・・そんな感じですね。どちらかというと、気まぐれ・・・そう、私の気まぐれですよ。だから、そう気にすることもない・・・というわけです」

「そうかい、ま、助けて貰ったんだ、文句はいえない。気まぐれつてところが、少し気に入らないが、まあ、いいさね。なら、あたしは、あんたに、借りを返さなきゃならないね・・・なにがいいかい？なんでも言っとくれ、あたしにできる限りのことはやるさね・・・なんなら、あたしの・・・この身体でも・・・いいんだよ？」

そういいながら、マチルダは、スサノオの耳元で、甘い声を口にする。

そして、その妖艶な唇が、耳を甘噛みをし、粘り気を帯びた舌が、軽く這わすように耳を舐める。

いつの間にか・・・密着したその身体を、スサノオに押し当て、豊かな胸を意識させる。

左手は、背中を撫で回し、右手はしっかと、身体を抱き寄せるように、力を込めている。

『くちゆくちゆ・・・ぺちや・・・はむっ・・・』

と、口と舌の動きを止めることないマチルダが、スサノオを蹂躪していく・・・

そして、その唇が、スサノオのそれと、触れ合うと思われた瞬間・  
・  
スサノオの手が、二人の間に割り込みをかける。

「無理に、そう、そういうことをしなくても、私は、何も要求しませんよ・・・お嬢さん？」

「な、なにさ・・・女のあたしに、恥をかかせる気がい」

「そんなつもりは・・・ないですが・・・左手が、震えていますよ？だから、強がらなくていいんですよ・・・そういうことは、本当に好きになった人をして下さい。雰囲気身を任せては、後悔しますよ」

「あたしには、なにもない・・・今、あたしが・・・あたしができることは、こんなことしかない・・・だから、あたしは、後悔なんてしやしないよ！っていうか、もしかして、あんた・・・あたしの、この身体に興味が無いなんて言うんじゃないだろうね！」

「まあまあ、落ち着いて落ち着いて」

「まさか・・・あんた、『幼女』や『つるペタ』でないと欲情しないような・・・」

「いや、まって下さい！何故、そんなことを決めつけるのですか！」「だって、あたしは、自分で言うのもなんだけど、そんじよそこらの女には、引けを取ってるつもりはないし、プロポーションだって、かなり・・・いいと自負してるんだけどねえ・・・そんな、あたしが迫ってるってのに、反応しないだなんて・・・そりゃあ、あん

たをロリコンと断じても、仕方がない！」

「待つて待つて、違うでしょ！そうじゃないでしょ！大丈夫、問題ない、反応してるから！かなりドキドキしてるから！理性という名の堅牢な鎖で押さえつけてるだけだから！……あっ」

「ふふふ……そうかい、ふふ……なら……我慢しなくてもいいじゃないか……ほら、その、あたしは……慣れてるわけじゃないから、やさしくしておくれよ？」

そっぴいなながら、再び、やわらかい膨らみをスサノオに押し当てる。  
・  
・

「OKOK、まあ、なんだ、そういうことは……嫌いじゃないですから、でも、その、この続きは、帰ってから……ですかね？」

「なんだい、ずいぶんと焦らすじゃないか……」

囁くように耳に流れ込む言葉と同時に、背中に、飛んでもないプレッシャーを感じるマチルダは、ギギギ……と首を後ろへと振り向かせると……

そこには、目をランランを輝かせる2対の目と、肉食獣の様な目で睨むルイズ、そして、気にしてない振りをしながら、チラチラと目を泳がせるタバサが……そこにあった。

「皆さん、お目覚めのようですね？」

戦闘での疲れから、馬車に乗り込んですぐ、眠りの世界へと旅だった4人が、いつの間にかそこにいた。

マチルダは、すぐさま、ロングビルへと口調を戻し、クールに、その話かけたのだった。

「ミス・ロングビル？ いったい、何をしているのかしら？」

真っ黒いオーラを漂わせながら、獲物を狩る目で、ルイズが『ギンツ』と睨みを利かす。

マチルダは、あまりのプレッシャーに、引き気味になるものの、持ち前の負けん気で押し返そうとする。

「あら、少しよろけただけですわ・・・まあ、ちよつと道が、がたついていたもので・・・」

「へえ、そうなんだ・・・よろけると、耳まで噛んじゃうんだ」

「あら、そんなことまで覗いていたのですか？ 貴族の婦女子ともあるうものが、はしたないですわよ？」

「それを言うなら、あんたのほうがはしたないことしてたじゃない！」

「わたしは、貴族の名を捨てたものですから・・・関係ありませんわ？」

「くうううう・・・そんなことは、どうでもいいのよ！ いいから、離れなさい！ スサノオから離れなさい！」

口先勝負では、幾分分が悪いと感じ取り、ルイズは、大きな声で、言い放つ。



「仕方ありませんわね……キャッ！」

スサノオから離れる素振りをしながら、よたついて、再びスサノオに抱きつくロングビル。

「ななななな、なに抱きついてるのよ！離れなさい！離れなさい！離れなさい！」

「道のせいですわ……まあ、嬢ちゃん達には、少しばかり刺激が強すぎたかねえ」

「おい、地が出てるぞ」

「あら、いやだ、わたしとしたことが……ふふふふ」

「きiiiiiiiiiiii、なんだか知らないけど、悔しいiiiiiiii」

「ルイズは、まだまだ、御子ちゃまね」

キュルケの言葉が、他の3人の心の声を代弁していたとか、していなかったとか……。



第40話・只今、任務帰還中（後書き）

なかなか、遅くてすみません。

亀の歩みではありますが、更新していきますので、宜しく願います。

## 第41話：只今、過去懐古中

.....

学院長室に、報告という形で集まった中で、一番の年長者であるミス・ロングビルが、経緯と結果について話をしていた。

フーケの隠れ家を見つけたこと、破壊の杖を発見・確保したこと、フーケと遭遇し戦闘になったこと、戦闘の際、破壊の杖を使用したこと、そして、力を合わせフーケを討伐したこと。

「・・・というわけで、破壊の杖は取り戻しましたが、『盗賊フーケ』は、残念ながら打ち倒してしまい、捕まえるということはお出来ませんでした」

「なるほど、そうか・・・しかし、破壊の杖は学院の宝物庫に戻り、盗賊フーケも討伐できた。なんにせよ、これにて一件落着じゃわい。諸君、良くやってくれた。ワシは、君らを誇りに思うぞい」

顎の下に伸びる長い白ヒゲを撫でながら、オスマンは、にこやかに皆を見渡しながら、任務をやり遂げた・・・そんな自信を持った表情が見て取れる生徒達が、無事に戻ってこれたことを本当に嬉しく思っていた。

「さて、今回の報償として、君たちには『シュヴァリエ』の爵位を王宮に申請するつもりじゃ、ミス・タバサは、すでにシュヴァリエじゃから、精霊勲章の授与を申請することとする。」

オスマンの言葉を聞き、ルイズ、キュルケ、ギーシュの3人は、顔を輝かせる。

「ほ、本当にいいのですか？」

上気した顔で、歓喜を含む声で、ルイズは、確かめる。

「もちろんじゃとも、諸君達は、そだけのことをしたんじゃ。」

ルイズは、私がシユヴァリエー！ああ、なんてことなの、吹いてる！風は今、私に吹いてるわ！と心の中で猛烈に叫んでいたのだが・・・はっと、気が付き、にこやかにしているスサノオを見つめた。

「オールド・オスマン、スサノオには、報償はないのですか？」

「彼は、貴族ではない。しかし、この任の中心的役割を担っていた事はわかっておる。じゃから、ワシから報奨金を直接だそうと思うがどうじゃ？」

スサノオの目を、じっと見つめながら話かけるオスマンに、スサノオは「かまいません」と一言発するのみだった。

その言葉を聞き、うんうんと頷きながら、思い出したかのように手をポンポンと叩いた。

「そうじゃ、そうじゃ、今日は、あれじゃ、『フリッグの舞踏会』じゃ、事件も解決したのじゃから、予定通り行わなければ。皆、それぞれ準備があるじゃろう？ささ、部屋に戻って用意をするのじゃ」

そう言いながら、皆に退出を勧めるが、スサノオには、「少しばかり残るよつに」とも伝える。

スサノオとオスマンだけとなった、学院長室で、二人は向き合いながら、話を始めた。

「さて、今回のこと、誠に感謝しておる……この通りじゃ」

スサノオに頭を垂れるオスマンに、少し驚きを感じる。

「さて、先ほど話した報奨金じゃが、ここに、500エキューある。少ないかもしれん……が、余り多くを渡せん理由もあってな、すまんが、これで我慢してもらいたい。代わりと言ってはなんじゃが、他になにか困ったことがあれば、遠慮せずと言って欲しい、出来る限り力になろう」

「いえいえ、お気になさらずに、このお金は、大切に（主にプリンとルイズに）使わせていただきます」

にこやかに対応するスサノオであったが、1つ気になることを思いだし、聞いてみることにした。

「ミスタ・オスマン、つかぬ事をお伺い致しますが……あの、破壊の杖、あれはいつたい、どういう経緯で手に入れたのでしょうか、差し支えなければお聞かせ頂きたい」

「なるほど、破壊の杖……まあ、呼び名はワシが勝手に名付けたんじゃが、あれは、ワシがまだ若く、見識を高めるために旅していた途中で、手に入れたものなんじゃ」

「あれは・・・ただのマジックアイテムではありませんね？」

その言葉を聞き、顎髭をしごきながら、オールド・オスマンは、窓の外に視線を移した。

まるで、ココではない遠くの情景を見ているかのような目で、少しずつ話し出す。

「そう、あれは確か・・・」

とある貴族の領内で、ワシは、路銀稼ぎの亜人討伐に参加しておったときのことじゃ・・・

あの日、ワシは、突如発生した濃霧に惑わされ、気が付くとワシ一人になっておった。

晴れることのない霧の中、ワシは彷徨い続けた、いくら魔法に自信があるとしても、亜人の集団にでも出くわせば命が危険じゃからなしかし、歩けども、歩けども、一向に本隊の気配を感じることもできず、ワシは疲れ果てていった。

しばらくすると、水の流れるような音を感じ取り、それに向かい移動を始めたんじゃ。

近づくにつれ、水の音は大きくなり、それが大きな河であることがわかったんじゃ・・・

しかし、ワシは思った。遠征してきた領内に、大きな河があるといった話はなかったと。

では、ここは何処なのか？

好奇心もあったが、それよりも、本隊に合流することが先決であったため、ワシは、上流へと足を向けた。山頂近くにあるとされる、

亜人の住処が目的地じゃったからの。

川沿いに歩くこと数刻・・・ワシは、激しい戦闘音を耳にし、魔力を振り絞り、フライの魔法を唱え上空へと飛び上がった。

すると、10リーグほど向こう側で、傷ついた片腕の男が、白い亜人達囲まれ剣を振るっている所が見えたのじゃ。

ワシは急いで、男の近くへと着地し、雷撃の魔法で、白い亜人達を倒していった、もちろん、その男も変わった剣で、亜人達を切り伏せていく。

やっこの思いで、亜人達を退けると、男はワシに向かって握手を求めてきた。

その男は、メイス・ウィンドウ・・・漢気溢れるジエダイの騎士だった・・・

一息つく為にワシらは、火をお越し、川沿いの開けたところで暖を取りながら、食事始めた。

話を聞くと、かつての仲間が暗黒面に落ちたため、掟に従い、彼を討つべく旅をしているとのことだった。

そして、目的地にたどり着いたのだが、白い亜人「クローン・トルパー」と言うらしいのじゃが、その者達に阻まれ、そして、仲間の懇願に冷静さを欠いた瞬間、別のジエダイに腕を切り落とされ、後一步というところで、取り逃がしてしまったこと。

だが、フォースの導きにより、追いかけて必ず討ち取らねがならないこと・・・そんな事を教えてくれた。

ワシは本隊と合流するまでは・・・と、行動を共にすることにし、川沿いをまた歩き出した。

メイスは、なかなか魅力に溢れる人物でな、ある種英雄的なオーラを発しておった。

見たこともない紫の剣と、剣技、そして、魔法ではない不思議な力



を使う彼に・・・とても興味が湧いたことも事実じゃ。

決して、惚れたわけではないぞい！ワシは、誰よりも女の子が好きなんじゃからな！

そして、ワシは知ることになる・・・この世の中には、絶対的な強者がいるということ。

何故か喉が渇く・・・そう思い始めたその時！

突然空より飛来したドラゴンの雄叫びに、身を固まらせてしまったワシの前に、メイスは躍り出た。

強力なブレスを不思議な力で避け、光り輝く紫色の剣を振るい、ドラゴンを圧倒していった。

しかし、少し離れた場所から、支援魔法を唱えていたワシの気づいたドラゴンが、ワシに向かい特大のブレスを吹き出したのじゃ！

正直ワシは、これは、死んだなつと・・・思ったよ。

何故かゆっくりと近づいてくるように見える・・・真っ赤なブレスを正面に見据え目を瞑った。

やってくるであろう高温のブレスに身を構えたワシには、高温の風は感じるが、焼けるような痛みは来なかった・・・そう、来なかったんじゃ。

目を開けたワシは驚愕した。

ワシの目の前には、ドラゴンの頭を両断した・・・焼けただけだメイスがそこにいたからじゃ！

絶命したドラゴンを見据えながら、メイスは言ったよ 『命を諦めるな 若者よ』とな。

そして、彼は崩れ落ちた・・・

横に寝かせたメイスに、ワシは必死に治癒の魔法をかけ続けた。しかし、ワシは水の魔法が得意ではなかった。ワシは思ったよ、何故もっと真面目に修行しなかったのかと、何故、ワシには、力がないのじゃろうかと。

しかし、メイスは言ったんじゃ・・・

『お前のような若者を救えてよかった・・・』

結局、ワシはメイスを助けられなかったんじゃ。

命の灯火が尽きる前に、メイスはこうも言っておった。

『力を求めることは・・・悪いことではない、だが、力に溺れてはならん・・・心を強く持て・・・』

『これもまた、フォースの導きなのだ・・・シスに・・・気を付ける』

そう言い残して、彼は永遠の眠りについたんじゃ。

夜明けを待つて、ワシは、メイスの墓を作り、彼と共に、彼の剣を埋めた。

そして、彼から手渡された杖・・・破壊の杖を懐に入れ、その地を去ったんじゃ。

フォース・・・シス・・・その言葉が何を指すのか、ワシにはわからんままじゃがな・・・

「改めて礼を言おう、恩人の形見を取り戻してくれて、ありがとう」

篤き想いを思い出し再び、頭を垂れるオールド・オスマンがそこにはあった。

第41話：只今、過去懐古中（後書き）

いやはや、忘れた頃に、こっそり更新です。  
なんといいましょるか、申し訳ないですね・・・  
温かい目で宜しく願います。

## 第42話：只今、姉御陥落中

・・・

学院長室から出てきたスサノオを、待っていた人物がいた。

「ずいぶんと・・・話し込んでたみたいだねえ」

ミス・ロングビルこと、マチルダは、壁に背を預け、ウデを組み、俯きながらその言葉を紡いだ。

「おや、私を待っていたとは、いったい何の御用ですか？」

「いったいなんだろう・・・もちろん約束などした覚えはないし、『待て』と命令した覚えもないし、命令すること事態が不自然だ。

第一、気まぐれで命助けた・・・というよりは、南天の見えざる介入の意を汲んだというほうが正解かもしれない。

「なんにせよ、これ以上の係わり合いを必要としない・・・それが、スサノオ自身の答えであり、決して、面倒くさいとか、女の匂いに敏感な、従者や姉達+ の乱入を恐れたわけではない・・・たぶん。

自問自答を繰り返すスサノオに、痺れを切らせてマチルダは・・・  
「やや切れ気味に叫ぶ。」

「いいから！だまって付いておいで！」

スサノオの腕を掴み歩き出すマチルダに、なすがまま・・・

暫く歩き、そして、二人は暗がりの部屋に入り込む。

扉を閉め、明かりを付けた部屋は、余り広くはなく、良く言えばスツキリ、悪く言えば何も無い、木製の質素な机とベット、そしてクローゼットと本棚、妙齡な女性特有の華やかさは、そこには無かった。

「なにもないだろ・・・この給金は、ほとんど仕送りしてるからね。まあ、あたしは、贅沢したいわけでもないしね」

そういいながら、スサノオをベットに座らせ、自分もその横に座る。

「別に、好きで盗賊の真似事をしていたわけじゃないさ、でもさ、あたしには養わなきゃならない奴らがいてね・・・普通に働くだけじゃ追いつかない・・・だから・・・さ」

俯きながら、身の上を話し出すマチルダの甘い香りが・・・スサノオの男の部分に刺激する。

傾れかかるように、その身をかぶせてくる物理的な法則に従うように、そのまま、ベットに押し倒される。

「逆恨みじゃないが、あんたには・・・責任とってもらわないとねえ・・・あたしを好きにしてい・・・だから、あんたの力で、あたいを助けて欲しいんだ・・・」

耳元で囁かれるように、甘い吐息と共に紡がれる言葉。

しかし、スサノオは思った・・・『責任』か・・・わけわからん。

日本の公務員や管理職が真っ先に嫌がる言葉だし、いかにも、自身が悪いような印象を受けかねないが、はっきり言おう無実だと！  
しかしながら、この身に感じる、二つのいけない果実の感触が、私の理性を侵食する……

そして、マチルダの攻撃は終わらない。

はむっと、甘噛みする耳に、柔らかい唇の感触がさらに侵食を加速していく

「あたし……初めてなんだ……だから、やさしくしておくれよ……」

据え膳喰わぬは男の恥！

武士は喰わねど高楊枝！

スサノオの脳内議会は大荒れだ！

賛成派と反対派、言葉は飛ぶ、物は飛ぶ、そして、議員も飛ぶ！

何十人にも分裂したスサノオ達は、お互いに殴りあい、押し合い、その数を減らしていく

理性と本能がっぷり右四つ状態だ！

「お前の性根は、この際徹底的に叩きなおしてやる！」

「オレは、オレの靈魂の叫びに忠実に生きる！」

向き合う二人のスサノオ

「「こうなったら、お前が泣くまで殴るのやめない！」」

そして、クロスカウンターを決め最後の1人となったスサノオは……

賛成派でした！

優しく、マチルダのか身体をいとおしむ様に抱きしめる。

「んんっ」

スサノオも温もりを更に感じ、また、高ぶって敏感になったことで、思わずでた吐息・・・

見詰め合う二対の瞳が、唇が、その距離を縮めていく

閉じた瞳と、遂に重なり合った唇は、さらに互いの存在を主張するように侵食しあう。

「んん、んんん・・・」

濡れた暖かい何かが、絡み合い、奪い合い、そして、荒い息使いが、部屋の中に漏れ出していく。

長いような、短いような、そんな時間の流れの中、息継ぎをする為に、一旦はなれた唇からは、一筋の糸が、その行為を肯定する。

いつの間にか、照度の落ちた部屋の中、申し合わせたかのように、互いの衣服を剥ぎ取っていく。

離れない唇と、吐息、衣ずれの音・・・



スサノオの逞しい胸元が露になったと同時に、マチルダの溢れんばかりに白く輝いた果実もまた、その身を曝け出す。

優しい手つきで、その果実に手を添えられた瞬間、高ぶりの境地にあったその神経は、今まで感じたことの無いような、至福を知覚するのだった。

幾ばくかの時間が過ぎ、何度か宇宙への飛翔を体験したマチルダは、かわいい寢息と共に、その疲れを癒していた。

その寝顔を真横で眺めながら、スサノオは・・・ヤっちまつた的な達成感と罪悪感にその心を焦がしていたのだった。

まじい・・・マジでまじい・・・絶対気づかれる・・・特にナンちゃんは、凄く感が鋭いからなあ・・・上手く言いくるめられるような理由を考えなければ・・・でも、なんていうか、その、不可抗力と言いますか、仕方が無かったといいますが、その、久しぶりだったし、新鮮だったし、って理由になつてないな・・・ここはいつもの事、契約の一環だったということを押し通すしかないよね・・・何気に良さ気だしさ・・・この娘。

「んっ・・・スサノオ・・・？」

思考（言い訳考え中）の没頭していたスサノオの横で、目を覚ましたマチルダは、ぽーっとしつつも、数刻前の行為を思い出し、恥ずかしげにシートにもぐりこむ。

そして、再び顔を出し、スサノオの胸に枝垂れかかる。

「約束・・・守ってねサノオ」

うっ、まじい・・・マジでまじい・・・かわいいじゃん・・・参ったなあ〜参らないけど。

OKOK、約束大事ですよね〜これでも一応？神様なので私。

それに、大人ですからね〜っていうか、何歳差になるんだよこれ！確実に2億年差はあるわけで、いや、まて、ロリコン言うな！

違うと思うんだよその定義！

年の差が関係あるのではなく、成長過程のある一定年齢との交友関係がキーなわけで、その、なんだ、今の私の状態に関しては無問題だと主張しておく。

主に私自身の尊厳の為に！

舞踏会の時間が迫り、互いの役割を確認しながら、身繕いを始める二人。

契約という名の情事から、思考を切り替える。

「じゃあ、事が収まつたら、あたしはここを出て、あんたの従者？と落ち合えばいいんだね？」

「ああ、この世界の情報を集める手伝いをしてもらう。とりあえず、これをもっていくといい」

そっいいながら、オスマンに貰った金貨の詰まった袋を机の上に置く。

マチルダは、ドスンと置かれた金貨の量に、眼を開く。

「助かるよ・・・ありがとう」

マチルダの感謝の言葉に、いやいやと手を振りながら、『またな』と部屋をでる。

廊下を歩きながら、とりあえず、身にある充足感を素直に評価し、ルイズの部屋へ向うのだった。

そして、一方マチルダは……

「あはは、やっちゃった……勢いとはいえ、あたし、いや、あゝん、恥ずかしいけど、なんていうか、これがアレだね、もう、あんな無しでは生きていけないような気がするよ……スサノオ……あたしのご主人様……いやんっ言っちゃった〜いやんいやん……」

何気に、悶えていた。

そのとき、スサノオがクシャミをしたかどうかは、定かではない。

第42話：只今、姉御陥落中（後書き）

お待たせしすぎて、本当にすみません。

なんとか、続けていきますので、今後もよろしくお願いします。

第43話：只今、一部完結中

.....

魔法学院の食堂2階、早々と着飾った少女達と紳士の仮面を被った少年たちが、いつもとは違う一面を見、互いの認識を書き換えたり、肯定したりしながら、歓談と食事、そしてダンスを踊りながら、各々が楽しみながら時間を過していた。

「スサノオ殿は、あの輪の中には入らないのでござるか？」

久々に登場したデリフを立て掛け、スサノオはテラスで、ワインを味わっていた。

そして、何故かその傍らには、スーパーメイド・・・シエスタが給仕の為に張り付いていたのだった。

「なんていうか場違いだと思ってね、それに今日の主役は彼女達だ、私がでしゃばる必要もない」

「そんなものでござるか・・・まあ、拙者には、よくわからないでござる」

デリフとのやり取りをしながら飲み干したワインのお代わりを促すと、シエスタは黙って完璧な仕草で給仕をこなす。まるで長年側にいたかのような自然な存在感である。

「しかしながら、この先どうするのでござるか？」

「どっにするか・・・とは？」

「いや、スサノオ殿のような存在が、ここに呼ばれた真意はどこにあるのでござろうかと・・・」

「・・・ま、おいおいわかんと思うよ。それよりも、今を楽しんだほうがいいと思うんだ」

テラスに背を預け、食堂の様子を観察しながら、スサノオは、自ら手ほどきしている少年少女たちを眼で追うのだった。

ギーシュは、周りを取り囲む少女達に、フーケ討伐にて如何に自分が活躍したかを身振り手振りで聞かせていたが、キヤーキヤーと黄色い声を上げるその後方に、黒いオーラを纏った二人の美少女の存在に、まだ気づけないでいた。

キュルケは、持ち前の胸を全面に押し出した際どいドレスにを武器くわに、ある種宗教団体の教祖のような扱いを受けている。

ただ、周りで崇め諂うのは、鼻の下が伸びきったことを隠しきれない『坊や』ばかりだが。

タバサは、周りをまったくもって O U T O F 眼中 状態・・・所狭しと並べられた料理の数々を胃袋に納めるのに夢中である。

あの小さな身体のどこに、あれだけのモノが入っていくのか・・・その一点に関して興味津々である。

そして、ルイズはというと・・・

公爵令嬢としての気品を身にまとい、純白のパーティードレスがより一層その存在を際立たせていた。

いつものツンケンとした表情とは違い、優雅に階段を下りてくる様を見た男子生徒達は、まさに格上であることを認識すると同時に、いままでの自分達の行いを何所か遠くに捨て去ったかのように、ルイズにダンスを申し込もうと躍起になっていた。

そして……

「もう、探しちゃったじゃない！なんでこんなところにいるのよ！」

テラスに見えた人影が、スサノオのものだと気づいたルイズは、ドレスの両端をつまみながら、早足で駆け寄る。

口調は怒っていたが、見つかった捜し物に安堵しているようでもある。

「ずいぶんと声を掛けられていたでしょう？ダンスのお相手なら順番待ちができそうでしたよ？」

グラスの中のワインをゆらゆらとさせながら、スサノオは微笑みをルイズへと向ける。

ホールでは、楽士達が演奏を始めており、参加者達は意中の相手とダンスを踊り始めていた。

「私と踊って下さいませんか？」

ルイズは、はにかみながらも優雅にその手をスサノオに差し出す。

「生憎、ダンスは苦手ですね……無骨ものだから」

そう言いながらも、軽やかにルイズの手を取り、ホールへと足を進める。

二人が進んでいくと、自然と道ができ、ホールの真ん中で見つめ合う。

「私がリードしてあげるから、合わせなさいよね」

穏やかな曲に合わせ、踊り始めた二人には周りの景色は映らない。お互いの瞳を見つめ合いながら、楽しくもあり、照れくさくもあり、そんな時間を過ごすのだった。

そして二人を見つめる二対の眼。

「ここにいていいのでござるか？ほかの給仕達は忙しく働いているようござるが・・・」

「いいのです。私はスサノオ様専用メイド。専用・・・なんて甘美な響きなんでしょうか！私は、スサノオ様の為に生き、スサノオ様の為に死す存在！スサノオ様が欲せば、すぐさま私の全てを差し出しますのに・・・嗚呼、スサノオ様・・・」

自分で自分の身体を抱きしめながら、あらぬ妄想に身を任せているようだ。

その妄想力は、天を越え、宇宙を越え、そして次元の壁すら越えるであろうか？

いつのまにか、スサノオ専用メイド？のポジションに収まっていることもデリフには不思議でしょうがなかった。

いつものことであるが、スサノオ殿のそばにいと賑やかでござる



な・・・眩きながら、楽しそうな二人を眺め続けるのであった。

そんな主従？優雅な一時を満喫していた同時刻・・・

「ほらほら、お姉様♡いい感じになってますよ♡」

「どれどれ・・・あら、本当ね」

にたにたした顔を隠すこともなく、水を張った桶をのぞき込む美女が二人。

厳かな空気が満ちた神殿の奥の一角で、何やら怪しげな様子。

溢れんばかりの輝きに満ち、迸る熱い情熱と陽気さを感じられる妙齡の美女。

憤ましげで、儂げな、それでいて清流のような神秘さを感じられる妙齡の美女。

表舞台にいる時には、絶対に見せない・・・そんな黒い笑顔がそこにはあった。

もしくは、仕込んだ悪戯が、どうなるのか楽しみで仕方がない・・・といった感じでもあるが。

「ふふふ・・・この姿を櫛ちゃんが見たらどうなるのかしらね♡」

「あらあら、それは大変そうよね」

そう言うてはいるが、全然大変そうには見えない。  
寧ろ、楽しみで仕方がないようだ。

「でも、まだ楽しめそうじゃない？」

「妾もそう思うわ」

「「ふふふふふ……」

不気味な笑い声をあげる怪しい美女。

水面に映った二人の姿だけが、不思議なほど煌びやかな輝きに包まれていた。

この先どうなってしまうのか？

それはまた別のお話にて。

第43話・只今、一部完結中（後書き）

・・・

本当にすみません。

ここで、一旦完結扱いとさせていただきます。

いままでありがとうございました。

また、気合いを貯めてから取り組みたいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9171i/>

---

閉じられた世界と知識と記憶

2010年10月11日02時53分発行